

芋川氏館跡発掘調査報告書

2002

長野県上水内郡三水村教育委員会

芋川氏館跡発掘調査報告書

2002

長野県上水内郡三水村教育委員会

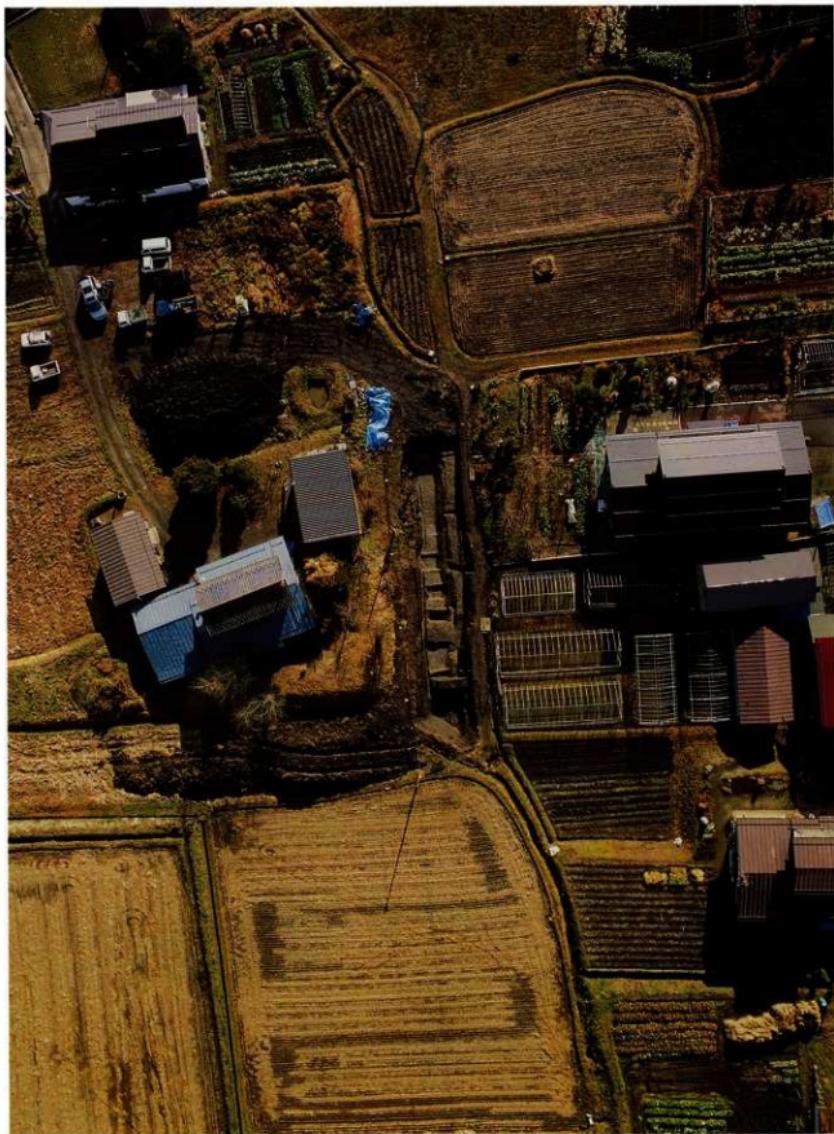


全景（第1次調査）南上空より若宮城を望む

口絵 2



全景（第2次調査）南上空より



全景（第1次調査）北上空より

図版 4



磁器・金属器・石製品



漆 器

発刊の言葉

村政施行115年、古来より優秀米の産地として、冠たる名声を得る三水。優秀米の生産の主たる芋川田園に、三水村民のかねてからの願いでありました、県道長野荒瀬原線の改良工事が、三水村役場前から御所ノ入、入口までバイパス化により施工されることに伴い、かつて、この地の豪族であった芋川氏館跡（三水村 昭和62年5月史跡指定0003281）の堀附近一部が道路敷に含まれるため、発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は、平成13年10月24日から14年8月24日までの2年間にわたり実施しました。芋川氏館跡の北と西に「字形」に土塁が残っており、現存する部分は東西方向に25m、南北方向に20mあり、今回西側の土塁の周りにある堀が調査の対象となりました。今回の堀の調査では、長野県では非常に珍しい『障子堀』が発見されました。三水村にとって貴重な文化財であります。又、数多くの土器片や曲物等、生活に密着したものや、漆器・椀・硯・茶臼等芋川氏に関係したと思われるものも発掘されました。

本調査は、日本考古学協会会員の笹澤浩先生指導のもと、三水村内外の応募いただきました皆さんで調査団を結成し、調査・研究を重ねながら発掘をすすめられたとのこと、また、13年調査は天候不順で寒さと湧水、14年度は炎天下のなか体力と気力の調査であったとお聞きしております。文化財調査委員長であり、本調査の主任をおつとめいただいた池田陸氏を中心に連携のとれた発掘調査は、大きな成果を得て無事終了いたしました。又、土地所有者であり「堀の家」と称する森見一氏には、土地貸与等ご協力に感謝いたします。

発掘により出土しました遺物につきましては、できるだけ整理いたしまして、三水村の歴史の一助としたいと存じます。

最後に、ご協力を賜りました、関係各位に敬意と感謝を申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成15年3月

三水村教育委員会
教育長 渋沢 清

例　　言

1. 本書は主要地方道長野荒瀬原線改良工事に係わる長野県三水村芋川所在の村指定史跡芋川氏館跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用した地図は長野建設事務所作成の路線図（1：500）及び国土地理院発刊の地形図（1：25,000）を使用した。使用に際してはともに許可済である。
3. 空中写真・測量は共同測量社（長野市）に委託したものであり、測量実測図は1：20を基本とした。
4. 写真撮影と遺物実測、トレイス等は笹澤がおこなった。
5. 執筆分担は下記のとおりである。編集は笹澤がおこなった。
森 佳也 第1章第1節
池田 隆 第1章第3節
笹澤 浩 上記以外のすべて
6. 本書で使用したおもな参考文献は巻末に一括した。
7. 遺跡の記録と出土遺物は三水村教育委員会が保管している。
8. 発掘調査・報告書作成にあたり多数の方々に指導・支援を受けた。別に記載したが特に下記の二氏には、城館と出土品について、協力頂いた。ともども感謝申し上げる。
河西克造（長野県埋蔵文化財センター）—城館跡一般
水沢幸一（新潟県中条町教育委員会）—珠洲焼。陶磁器類・城館跡

凡　　例

1. 遺跡記号名は、三水村の遺跡記号名に従い、三水村のSと遺跡名から2字をとり「S I Y」とした。
2. 遺構は通常に従い次の略記号を使用した。ただし、堀内底部の障壁土坑、堀底台は本書独自の呼称である。
S K—上坑、障壁土坑 SD—溝、水路、堀 SB—堀立柱掘物、平地式建物 SX—土橋、堀底台、列石などその他の遺構
3. 土層は統一して記号化した(表1)。
4. 本書に掲載した実測図は下記のとおりである。

遺構実測図

- 遺構分布図・グリッド配置図 1:400
遺構全体図 1:400
遺構図・土層図 1:80
遺物出土状況図その他の遺構詳細図 1:20、1:40
遺物実測図・拓影図

- 古代の土器、石製品、木製品の一部 1/4
木製品、中世土器、陶磁器、土器拓影図 1/3
金属品、石製品などの小型品 1/2
なお、一部以上によらないものもあり、そのつど縮尺を示した。
5. 遺構実測図の方針は真北である。磁北は7度20分西に偏している。座標は国土地理院の国土座標第8系を使用している。
 6. 遺物の出土状況にある番号は遺物実測図の番号と同一である。
 7. 遺物実測図の断面は上器・瓦質土器は白ヌキ、須恵器・珠洲焼は黒色、灰釉陶器・陶磁器類はアミとした。
木製品は年輪を示し木取りが分るようにした。
 8. 漆品類は二色とし、赤色は赤漆、黒色は黒漆を示した。

目 次

発刊の旨意

例言

凡例

目次

写真図版目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 調査の目的	1
2. 調査に至る経緯	1
3. 調査体制	2
4. 調査協力者・現地指導者	3
第2節 調査の方法	3
1. 調査前の現状	3
2. 発掘調査の方法	4
3. 調査区の設定	4
第3節 基本層序	6
第4節 調査の経過	6
1. 発掘調査日誌（抄）	6
第2章 遺跡の環境	10
第1節 遺跡の位置と地理的環境	10
1. 遺跡の位置	10
2. 地理的環境	10
3. 周辺の遺跡	11
第2節 歴史的環境	11
第3章 遺構	15
第1節 西堀と付設遺構	15
1. 概要	15
2. 西堀（S D01）	15
3. 防壁土坑	16
第2節 南堀と付設遺構	19
1. 南堀	19
2. 障壁土坑	19
第3節 建物跡・水路跡・列石	19
1. 建物跡	19
2. 水路跡・列石	20

第4節 錫冶跡	20
第4章 出土遺物	21
第1節 遺物の出土状態	21
第2節 縄文時代の遺物	23
第3節 古代の遺物	23
第4節 中世の遺物	24
1. 土師器	24
2. 丸質土器	25
3. 珠洲焼	25
4. 陶磁器	26
5. 石製品	26
6. 金属製品・その他	28
7. 木製品	28
8. 自然遺物	33
第5章 まとめ—芋川氏と芋川館跡	35
1. 芋川館の構造	35
2. 芋川氏と芋川館の年代について	36
3. 芋川氏館の性格	36
4. 隣子堀とその意義	37
あとがき	41

写真図版目次

P L 1	左：土橋北側斜面 右：同上土層
全景（西上空より）	S K12遺物出土状況
全景（第1次調査）（南上空より）	左：土橋上層の杭例 右：土橋上層の右列 S X07（西 より）
P L 2	P L 6
西堀全景（第1次調査）（右：北側）	左：S K01（北より）右：S K03埋土土層（南より）
西堀全景（第1次調査）（南より）	左：S K11埋土土層（南より）右：S K05埋土土層（西 より）
P L 3	
西堀 右より S K02～S K09（東より）	S K16堆土土層（北より）
西堀全景（第2次調査）左側北	S K01埋土土壁の砂層と粘質土などのM層（部分）
西堀全景（左：北より）（右：南より）	
P L 4	P L 7
西堀 S K12、上橋 S X03 S K13・14（北より）	左：西土塁と調査前の西堀（部分）
西堀・南堀 S K12～S K19（南より）	右：北土塁（北より）
P L 5	左：南土塁残存部（西より）
土橋 S X03（西より）	右：村史跡芋川氏館跡入口部現状

左：見せかけの主郭西南坡

右：鍛冶跡全景（西より）

左：鍛冶炉跡と「火の神」出土状況

右：便所跡

P L 8

左：クルミ大木出土状態（S K12・13）

右：昆虫出土状態（S K03）

左：広葉樹葉など出土状態（S K03）

右：カラスガイ出土状態（S K01）

左：漆器・土器・小皿片出土状態（S K03）

右：把杓出土状態（S K12）

左：堅杵出土状態（S K11）

右：櫛出土状態（S X05）

P L 9

左：下駄出土状態 S K12

右：漆器出土状態 S K16

スダレ（？）出土状態と部分（右）S K12

薄板製品出土状態（左部分）S K13

風鈴、内耳上鏡出土状態 S K13

P L 10

木製品・小板

金属製品・櫛

P L 11

木製品（把杓・曲物底板）

木製品（曲物底板綱蓋（？））

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査の目的

主要地方道（県道）長野荒瀬原線は三水村役場前までは改良が終了していたが、以北は現道が町集落を通過し、道路幅が狭くかつカーブが多いため、新たに集落をさけた新道を建設することとしていた。しかし、建設予定地には村指定史蹟「芋川氏館跡」があり、館跡内を道路がまともに通過することになっていたため、当時の村文化財専門委員会の反対にあい、委員全員が辞職するなど路線をめぐり紛糾した。このため、主郭内通過から堀内通過と予定を変更し、地元協議を経て路線が決定した。したがって、路線内にある聖遺文化財として芋川氏館跡の緊急発掘調査を2年間にわたり実施し、記録保存することとなった。

調査体制は三水村文化財調査員を調査員にあて編成した。また調査予定地が低湿地のうえ、地表下2.5mに及ぶため別に安全管理者を置いた。

2. 調査に至る経緯

13年2月16日 長野建設事務所から県単道路改良工事（芋川バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘の通知がある。

13年3月28日 長野県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての通知がある。

13年9月11日 三水村教育長と長野建設事務所長の両者において芋川氏館跡発掘調査の委託契約を交わす。

13年度の工期は平成13年9月11日から平成14年3月29日とする。

調査委託料は4,492,000円。

14年5月27日 長野建設事務所長から緊急地方道路整備事業（芋川バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼がある。

14年6月17日 三水村教育長と長野建設事務所長の両者において芋川氏館跡発掘調査の委託契約を交わす。

14年度の工期は14年6月17日から11月29日とする。

調査委託料は9,416,000円。

14年11月18日 三水村教育長から長野建設事務所長へ工期の延長願い提出（発掘品等の整理及び報告書の作成に時間を要する旨）。

工期を15年3月31日とした。

3. 調査体制

調査委託者 長野建設事務所長

調査受託者 三木村教育委員会

調査会 沖 大啓 (13年度教育委員長)

滝澤 治子 (14年度 タチ)

滝澤 武利 教育委員

碓井 明美 タチ

渋沢 清 タチ 教育長

調査団

団長 島澤 浩 日本考古学协会会员

調査主任 池田 陸 文化財調査委員長

調査員 畑田 光好 文化財調査委員

外山 吉恵 タチ

渡辺 宣雄 タチ

安全管理者 待井 篤 村松 直視 (株式会社村松建設)

発掘作業員・整理作業員

(平成13年度)

黒澤 順男 高橋 久子 龍野 正道 常田 範夫

外山 暢雄 永野 稔雄 名古 忍 名古 との

羽入田 賢 宮島 俊嗣 宮島 英男 渋沢 升

関 新一 風間 玉子 久保知枝子

(平成14年度)

黒澤 順男 常田 範夫 永野 稔雄 羽生田 賢

名古 忍 名古 との 宮島 俊嗣 宮島 英男

高山 義郎 中山 市治 常田 恵子 三澤 貞利

山田 哲也 関 新一

事務局 (平成13年度)

(平成14年度)

教育次長 名古 惣 教育次長 宮島 史朗

公民館長 渡邊 健治 公民館長 渡邊 健治

副 タチ 風間 文彦 副 タチ 風間 文彦

社会教育係長 渋沢 憲市 社会教育係長 森 佳也

社会教育主任 渋澤 直樹 社会教育主任 渋澤 直樹

タチ 丸山 謙 タチ 丸山 謙

タチ 朝比奈澄子 タチ 朝比奈澄子

社会教育指導員 村田きよ子 タチ 西澤智恵子

臨時職員 中島 和子 社会教育指導員 村田きよ子

臨時職員 中島 和子

4. 調査協力者・現地指導者

調査協力者（順不同）

森 晃一 地権者
長田 健 長野建設事務所長
下沢 治彦 ☈ 管理計画課計画調査技師
向山 智也 ☈ 工事第二係技師
田中 洋 ☈ 用地課用地第二係主事
山河 裕典 長野県文化財牛込学習課指導主事
広瀬 昭弘 ☈
河西 克造 長野県埋蔵文化財センター専門主事
水沢 幸一 新潟県中条町教育委員会
山浦 幹雄 建設課長
荒井 和己 建設係長（平成13年）
竹内 裕 ☈ （平成14年）

現地指導・協力者（順不同）

小林計一郎、郷道 哲章、金子 拓男、矢野 恒男、小柳 義男、佐藤 信之、佐藤 康二、松沢 芳宏、
中村 山克、中殿 幸子、横山かよ子、小山 丈夫、芋川 吾作、相澤 龍雄、小林 喜一

（森 住也）

第2節 調査の方法

1. 調査前の現状

芋川氏館跡は南にゆるく傾斜する斑尾川扇状地のほぼ中央で、馬の背状の高まりとそれを挟む東西の低地をたくみに利用して構築してある。西側は鼻見城のある山塊の山麓ぞいにある町集落と館跡の間はかつての斑尾川の流路跡と思われる凹地状地形で、ここに西堀を構築し、東側は斑尾川が直線的に南流している。しかし、遺跡周辺は構造改善と宅地化による造成で変形し、現状から微地形を把握することはかなり困難な状況にある。また斑尾川もかつては浅く川幅も狭かったものが、構造改善事業に伴い川幅の拡幅と川底の掘削や流路の直線化等で旧状とは異なり、中世の景観を今日に残すものとはいえない。ただし、斑尾川の流路位置そのものは大きく変えられていない。

館跡は西北隅に「L」字形に土塁を残し、主郭は一段と高く、方形に残り、西側を除き水田化された堀跡によつて囲まれ、土塁に接して森氏宅がある。主郭は2段に整地され、堀に面して土手状の斜面となるが、南辺は南東隅が「L」字状に張り出している。土塁跡は幅3.5m、高さは1.5mで、西土塁は18m、北土塁は20mある。西土塁は30年ほど前に削り取り、整地しプレハブを作ったとのことで、かつては30mほどあったという。

堀跡は北堀と西堀が周囲よりも1段低く、水田区割も異なり比較的よく残る。幅は9m前後である。

南堀は民家の宅地となり、しかも主郭の南辺が「L」字形となるなどはっきりしない。東堀は妙福寺の寺域となり、南堀が確定しない限り現状では把握は困難である。現在寺域の西側部分が墓地として造成されているが、水田を埋め立てたもので幅も10mあり、この部分が東堀と予想される。

したがって、主郭の規模は東西50m、南北60mの長方形となり、幅9mの堀で囲まれることになる。しかし、

現状地形からは不確定要素が多く、発掘調査によって堀の規模をはっきりさせることによって、主郭の規模と形状が確定できる。

調査予定地である西堀は水田化されており土壌を含む主郭の西辺より1段低い。西側の北半分は小農道と水路が巡り、その部分より低いが南半分は農道のみが巡るが、水田と農道との高低差はない。しかし、堀推定地内の水田の地割が周辺と異なり堀跡の痕跡として推定できる。

2. 発掘調査の方法

発掘調査の主旨的は、西堀の規模・形状と構築時期ならびに存続期間を可能な限り明らかにし、記録保存することにあった。このことは館跡を明らかにし、伝承のとおり芋川氏の館跡としてよいかを検証することにつながる。また芋川氏の館跡とすれば、国人領主としての芋川氏に関する様々な史料を得ることになる。

調査地は現状からも低湿地であることが予想できた。かつて、長野県埋蔵文化財センターに在籍し、典型的な低地性遺跡である長野市石川条里・川田条里遺跡の発掘調査にかかわった経験上、発掘調査の方法を確立していく必要があった。このため本調査に先立って重機を用いて試掘調査を実施した。目的は堀の掘り込み面と堀底までの深さの確認、基本層序を得ることにあったが、特に埋土と湧水、排水量を知ることにあった。

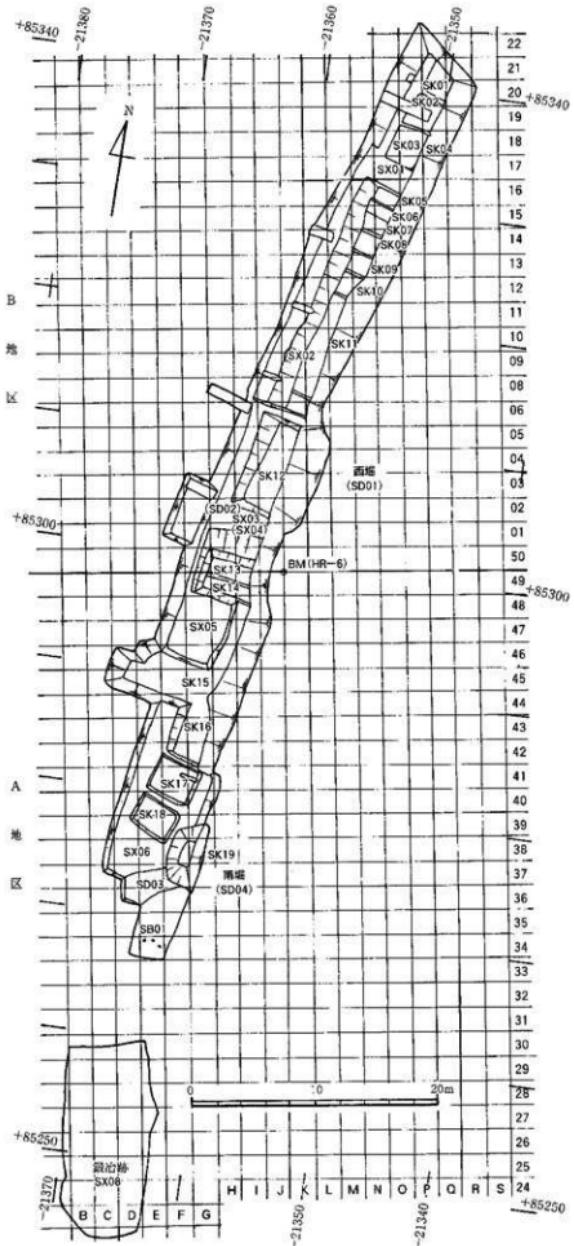
試掘は西北隅ぞい（BM20）と西堀中央寄り（BJ09）の2か所で実施した。幅1m、長さ2～3mである。埋土は有機物を含む泥状の黒色粘質土であり、基盤層が青灰色粘質土やパラス層で、堀底まで地表から2mを超えることが判明した。特に掘り込み面の検出は上層の状況から極めて困難であろうと思われた。しかし、埋土中に厚さ10cm前後の恐らくアシ等の集積した褐色の有機物層があり、堀の存在の有無を判断する手がかりとなり得るものと考えた。

以上の点を考慮して発掘調査を実施するうえで、最大の留意点は安全と湧水対策にあった。堀の深さを2m、堀幅を10mとした場合、安全対策上、掘削法面を45度とすれば、堀の底部幅は6mとなる。しかし、調査対象とする堀幅は小農道から上界までなく、その中途までの5mであって、深さ2mまで掘削すれば堀底部の調査幅は1mとごくわずかで、底部の調査はほとんど不可能となる。そこで土器備用地外に地主である森見一氏の了解により安全法面を求めた。石川条里遺跡等の経験では、法面をさらに矢板で囲めば安全対策はより強固なものとなるが、種々の理由で実現には至らなかった。しかし、土木に精通した安全管理者が常駐し、その指示のもとに発掘作業を進めることとした。また、調査の必要上、場所によっては45度の安全法面をとらず2段に段差をとることによって対応した。調査区壁面の土壤も十分に乾燥を加えれば安定するからである。しかし、シート等で雨水対策をおこなれば不安定となる。事実、調査期間中に小規模な崩壊をまねくこととなったが、安全面では特に問題とはならなかった。

平成13年度調査の調査区は上方に水田地帯があるため水田への冠水時期をさけ、秋期に実施した。調査は湧水対策を考慮して西堀北側の高所から標高の下がる南へと順次おこなった。排水は当初は人力でおこなったが、作業能率を考慮に入れて、ベルトコンベヤーと重機を併用し、キャリアーによる運搬をおこなった。排水場所の確保も森氏をわざわざした。なお、重機のオペレーターは安全管理者が兼ねて実施した。排水は調査区の東西壁側に小規模な排水溝を設け、2基の水中ポンプを用いておこなった。また、平成14年度調査ではトレーンチ深掘りを実施した関係で、同時にそれを排水溝とした。調査上効率が良くなったが、後述のとおり一部遺構を失った。

3. 調査区の設定

調査は北より順次南下しておこなうために調査区全域が網羅できるようにし、道路用測量点HR-6にB.M



第1図 グリッド配置図・連携分布図 (1:400)

を置き、このラインを50とした。そして、50ラインより南側をA地区、北側をB地区とした。グリッドは 2×2 mの方眼とし磁北に合わせて設定した。道路用測量図が磁北であったことにもよる。南から北へ算用数字を、西から東へはアルファベットを配してグリッド名とした。A地区は01～50まで、B地区も同様に01～50とした。B.MはAK50である(第1図)。

測量は株式会社協同測量社によるラジコン使用の空中測量で実施し、基図は20分の1図である。座標は国土地理院座標第8系である。遺物の取り上げは主としてグリッドで取り上げたが、グリッドの設定は斜距離によるため補正が必要であり、特にグリッド杭による出土地点等を測量したため、出土地点等は補正をおこなったが、遺物の出土地点の注記は整理途中有る。

第3節 基本層序

堀外層序 水田耕作土(1層)、鉄分集積層(2層)、黄灰色(灰色)小ブロックまじり黒色土(3b層)、黒色土(3a層)、青灰色粘質土(9b層)、青灰色砂礫(パラス)層(8a層)が基本である。黄灰色(灰色)小ブロックまじり黒色土は1～2cm大的円形ブロックを多量に含む。A地区43ラインより南には認められない。ブロックはアシなど湿地性植物の生育と関係して生成されたものかはっきりしないが、低湿地性土壤であることは間違いない。耕作上同様に基本は水平堆積である。

堀内層序 黄灰色小ブロックまじり黒色土、以下に黒色粘質土(3a層)、有機物層(4c層)、含有機物黒色粘質土(4b層)、含有機物黒灰色粘質土(5b・5c層)、黒灰色粘質土(5a層)、青灰色粘質土(9b層)、パラス層を基本とし、有機物層以上は水平堆積が基本である。堀内層序の有機物層は厚さ5～10cm程度で多量の細かい有機物からなり、堀の埋土には水平堆積物として一様に認められる。堀の埋没過程において形成された最終段階の地層のひとつであり、有機物以下は堅ぎわと堀中央とでは特に底部に接する部分では共通した層序となる。壁塗土坑SK01、SK11、SK13などの堅ぎわは高台から流出した砂と黒灰色粘質土とによる数層にもわたる互層となっている。木製品等は特に有機物を含む黒灰色粘質土層と互層及び底部からの出土が多い。

土橋SX03は有機物層ではなく、堀外にあったことを示している。

なお、堀の埋土からなる地層は場所によって異なるため多層にわたり、呼称も複雑となる。煩雑さをさけるため記号化した(表1)。しかし、中には同一記号の地層であっても生成条件が異なり、時期が同じであるとは必ずしもいえない場合もある。また、青灰色のグラウト化した粘質土層や砂礫層などは時間の経過とともに酸化して褐色となり、土層の色調も調査時の判断によるものである。

第4節 調査の経過

1. 発掘調査日誌(抄)

平成13年度(第1次調査)

10月19日 三水村役場にて事前打ち合わせ

10月26日 西堀2か所で試掘(バックホー使用)。探査し断面観察をもとに、長野県教育委員会文化財生涯学習課出河裕典指導主任を交え、事前打ち合わせ。危険防止のため安全管理者を重機運転を兼ねて置くこととする。調査日程・調査方法を決定。

10月29日 発掘調査発会式終了後、バックホー及びクローラーダンプによる排土と運搬開始。発掘調査は西堀が北から南に傾斜することから、排水を考慮して、排土は西堀西北隅から順次南下しておこなうこととした。表土剥ぎは有機物層上部までとしておこなった。排水路設置にあたっては一部下層までバックホーを入れたが最小限にとどめ、原則人力でおこなった。これは調査開始当初、湧水のため調査が難航したことによる。排水路は調査区両側に必要最小限に設けて、調査区を掘り下げるに伴い人力で確保した。また、調査区は安全法面を確保すると、予想される堀底の調査が不可能となるため、地主の森晃一氏の了解のもとに森氏所有地の一部を借り上げて安全法面にあてた。排土終了後グリッドの設定。B.Mは工事用道路測量点杭HR-6をあてた。調査は堀の掘り込み面を探るために観察用土手を調査区内にいくつか残すことで始めたが、かえって排水対策上好ましくなく、調査を難航させる起因となったため、必要最小限とした。断面観察を進めながら平面調査を実施してゆくこととなる。

調査風景（第1次）



調査が進むにつれ植物質遺物と貝類や昆虫類の羽などが多くなり、層位別にグリッドごと取り上げ、必要に応じてレベルをとった。

11月2日 矢野恒男氏来跡。遺跡周辺の水田地割など教示を受ける。土層観察(セクションA-A'・B-B')により、土層の掘り込み状況は観察可能であるものの面的確認は困難と思われた。しかし西堀下部で地山の青灰色粘質土からの掘り込み面を確認したため、上部を掘り込み面と意識しつつ、地山での検出を優先させることとした。

11月5日 B O16で堀底台S X01と両側に方形落ち込みのあることを確認。同様の落ち込みは西堀北西隅で検出。のちこれらは障子堀の底部構造で障壁土坑と呼称することにした。S X01の南側S K05は検出面から深く、しかも砂礫を充填していた。

11月8日 降雨が続き2台のポンプがフル稼動する。発電機設置のちベルトコンベヤーを使用し、作業能率が上がる。地山に西堀肩部が南北に直線的になることを確認。S K01からS K10まで作業に順次つく。これら土坑は方形で堀に直交させており、背の低い畦畔で区画され、土坑底はすべてレベルが異なり、高低をくりかえしている。これらの性格付けに苦労していたが、上越市史編纂会議の席上、金子拓男氏により障子堀ではないかという教示を受けたが、障子堀となると長野県下で初めて検出された堀形態であり、後北条氏の堀を特徴づけるものだけに、何ゆえ半川氏館にあるのかという新たな課題を抱えることになり、慎重にならざるを得なかった。

11月16日 今次調査地の発掘がほぼ終了。南北方向30m、幅10m、深さ平均で地表から2.5mである。あとは土坑の掘り下げ、清掃、土層図の作図などになる。

11月19日 S K11東壁の土手が長さ6m、幅0.5~1mでずり落ちる。昨夜來の降雨によるものであり、矢板で



調査風景（第1次）



調査風景（第2次）

補強をする。

11月20日 小林計一郎氏来訪。

11月21日 信濃毎日新聞取材。

11月22日 調査終了式で今次調査終了。実測・チエックを残すのみとなる。

11月23日 現地説明会。参加者60余名。

11月30日 午前中清掃、午後空中測量。

12月1日 残った上層岡作成で全工程終了。

12月3日 木製品洗浄。以降は笠澤が面面整理等をおこなう。

平成14年度（第2次発掘調査）

6月25日 役場において第2次発掘調査打ち合わせ。日程及び調査方法と安全対策について協議。

6月27日 発会式。引き続いき調査開始。バックホーによる表土剥ぎ、三相電源設置、主郭内の電柱仮設に先立ち調査。表土下70cmで古代の包含層を確認。

調査南側の県道ぞいで鉄素材と鉄器など表採。この地は埋蔵文化財包蔵地外とされ周知されておらず、このため道路工事施工前の先行工事として路線にそって表土剥ぎ工事が実施されており、このため鉄器等が出土したものである。この地に居を構える相沢龍男氏（当時74歳）によれば、昭和30年代までにここで鍛冶がおこなわれていたとのことである。さっそくご子孫の小林喜一氏（80歳）にこの点を確認する。炉跡も露呈しており、表土剥ぎと並行して、3日間で遺構検出と測量を終了した。

6月29日 本発掘は表土剥ぎの終了したB地区01ラインから06ラインにかけて開始。01ライン前後で表土下に列石S X07と水路S D03を検出。水路S D02は最近まで使用されていたもので、その南側は比較的浅く地山である青灰色粘質土に達し、その直上に黒色砂質土が比較的厚く堆積し、ここから宋錢、珠洲焼瓦片、曲物底板などに加えて、手斧（チヨウナ）の削り屑が多量出土した。

一方、A地区44ラインに排水溝を兼ねた土層観察用のトレーナーをバックホーを用いて入れる。その結果、堀と思われる落ち込みを確認するが、B地区はほど深くなく、予想した掘り込みラインより3m東側に大きくずれるところから、B地区検出の西堀と直結するものかどうか判断できなかった。落ち込み底部は青灰色粘質土が薄く、パラス層になり、ここからの湧水が多くなったため、排水溝を南北に設ける必要が生じた。このため、主郭の段下に並行して、断面観察用の上層を残しながら排水溝を設けた。この結果、P-P'ではあまり明確でなかった有機物層がここではB地区西堀と同様に明瞭に認められ、堀の存在が予想された（O-O'）。しかし、この排水溝設置は結果として幅の狭い堀（幅狭堀）の西壁部分も破壊してしまったことが後に判明した。またP-P'のトレーナー幅が崩落と湧水が当初惹かしたことにより、予想以上に広くなり、これもまた結果として幅狭堀の掘り込み線（西壁）を破損したことになる。

7月4日 列石、水路跡の調査はほぼ完了。B地区01ラインより06ラインにかけての調査に主力をそそぐ。西堀部分の落ち込みラインを青灰色粘質土（地山）上部の黒色粘質土で検出を試みるが困難であり、結局地山でおこなうこととなる。堀内土内からの遺物の出土量が多くなる。

7月11日 列石実測終了後撤去。土橋上端検出始める。西堀西壁調査続行。有機物まじりの黒灰色粘質土から下駄・風呂・青磁・内耳土鍋・珠洲焼など出土。

7月24日 A地区45ライン南側調査本格化。SK12床面精査、柄杓など木製品多く出土。

7月29日 上橋南側の隣壁土坑SK13・14検出。

7月30日 SK12東側掘削面亀裂、矢板で補強。後日亀裂部分削平。

△地区45ライン南側でSK14～SK19の遺構検出。SK19の検出で南堀の存在確認。

8月1日 長野県埋蔵文化財センター河西克藏氏現地指導。西堀の形態上の相違、南堀の確認などから主郭形態、SK13・14からの内堀の有無などについて指導を受ける。

8月5日 水路SD03より寛永通宝出土。SK18南側は水路によりかなり削平。しかし調査区西壁に堀跡を示す痕跡が認められ(D9-D10)、西堀東南隅であることが判明(SX06)。

新潟県中条町教育委員会水沢幸一氏現地指導。特に堀外の施設について指導を受ける。

8月6日 SX06南側は水路を切りまわして調査、柱穴検出(SB01)。なお、その隣接地は水路により削平著しく調査断念。

8月9日 上橋外側の状況を探るため6×2mの拡張区を調査。遺構などは認められなかった。

本遺跡の南方、路線敷で多数の古代の土器片を探集。表土剥ぎ工事によって出土したものである。本調査の基礎データを得るために試掘調査。新発見の遺跡を下土浮遺跡(SSD)とする。8月11日 清掃、空中撮影実施。

8月20日 下土浮遺跡試掘。平安時代及び中世のピット群多数あり。集落跡と予想される。

8月24日 現地説明会、主要遺物展示。参加者80名。本日で作業終了、解散式。午後5時、三水村教育フォーラムで調査報告。

整理作業

9月2日～13日 遺物洗浄、注記、復元。このうち図面整理、実測、報告書作成作業に入る。

(池田 陸)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

1. 遺跡の位置（第2図）

芋川氏館跡（S I Y）は長野県上水内郡三水村大字芋川字中峯前田にあり、標高は538m前後である。

遺跡の所在する三水村は長野県北部地域（北信）にあって、善光寺平の西縁地域にある。善光寺平の西縁にそった山地には、いわゆる北信五岳と呼ばれる飯綱・黒姫・妙高・戸隠・斑尾の5名山がある。これらはなだらかなスロープを持つ火山群であり、分水嶺でもある。妙高を除く各火山は鳥居川の水源地であって、東流して千曲川にそそぐ一方、飯綱山を除く各山塊は関川の水源地となり西流して日本海に流れる。したがって、鳥居川と関川は旧石器時代以来の文化・経済の回廊であった。古代には越と信濃を結ぶ東山道支道が、江戸時代には北国街道が、そして現代ではJR信越本線と上信越自動車道がはしる。

2. 地理的環境

三水村は鳥居川ぞいにあるが、それは三水村のごく一部であって大半はむしろ鳥居川より1段上がった北寄りの台地上にある。この地は鳥居川と水系を異にする斑尾川およびそれにそそぐ小河川によって開拓された比較的比高差の小さい小扇状地と、その末端の盆地ならびにその背後の台地からなる。この台地地形は新第三紀層からなり、地殻変動に伴い褶曲隆起した後の浸食作用によって準平原的な地形となったものである。

芋川氏館跡は戸谷峰（756m）を主水源とする斑尾川によってつくられた高低差の小さな小扇状地の扇央部分に立地する。さして水量が多くない小河川である斑尾川流域に、パラス層やグライ土壤が発達していることは高低差の少ない斑尾川の堆積・運搬作用のみに起因するものか判断に苦しむところである。遺跡は扇央部分の馬の背状の尾根とその東西の斑尾川及びその旧河道を利用して立地している。



第2図 芋川氏館跡位置図（1:25000）

斑尾川は芋川地区を出ると、鳥居川にそそぐことなく、深い谷となって南流して、下水内郡豊田村替佐で千曲川へ合流する。

3. 周辺の遺跡（第3図）

三水村の遺跡は地形にそって3地区にある。鳥居川ぞいの小規模な段丘上とその背後の山腹上にあるもの、斑尾川上流域の扇状地上にあるもの、斑尾川下流域と、その背後の台地上にあるものとである。

鳥居川ぞいには左岸地城が三水村に属し、縄文時代草創期の原遺跡（小柳1983）があるが、右岸の牟礼村には栄町や兎玉坂など縄文時代中・後期の好資料を出土する遺跡が多く見られる。このほか、鳥居川ぞいは近世に牟礼宿が栄えた場所であり、中・近世の重要な遺跡がいくつかある。鐘山遺跡は左岸にあり、平安時代の住居跡や中世の遺物が出土した（今佐・百瀬1984）。また鐘山遺跡に近い岩袋遺跡では地下水位が高いことによって、中世の曲物や珠洲焼の大甕・擂鉢・瀬戸系の天日茶碗・カワラケなどが出土している（小柳1984）。

右岸では牟礼村矢筒城館跡がある。山城とそれに隣接した店舗跡で、飯糰病院建設に先立つ調査で店舗跡の一部が明らかにされた。太田荘の地頭であった島津氏一族の居館跡と伝えられるものである（米山ほか1981）。

斑尾川上流域では扇状地先端の左岸段丘上に古くから考古学界に知られた縄文時代前期の伊豆ヶ入遺跡（小林1976）や、芋川氏館跡遺跡に近接した小野遺跡（小林1976）がある。小野遺跡は縄文時代前・中・後期、平安時代から中世にわたる三水村屈指の複合遺跡で、1975年に発掘調査された。芋川氏館跡や下土浮遺跡と直接関連ある遺跡として重視されねばならない。また、同様の遺跡として背後の山頂には山城である若宮城跡や鼻見城跡がある。

斑尾川下流域の台地上には縄文時代中期の北信を代表する大規模遺跡がある。上赤塙遺跡では地元の永野五六・稻雄父子によって資料採集がされ、1995年には道路拡幅工事に伴い発掘調査が実施され、13棟の堅穴住居跡が検出された（小林1976・大久保1979・寺内1991・小柳1997）。このほか今田遺跡（広瀬1975）や東柏原遺跡も赤塙遺跡に匹敵する重要遺跡である。

また、与四郎原敷遺跡からは2001年度の試掘調査で縄文時代前期及び中世の内耳土器が発見され、倉井地籍の台地上の遺跡の一部が明らかにされた意義は大きい。

三水村には31遺跡が知られているが、実体が判明しないものが多く、特に遺跡の所在が面的でなく「点」でしか把握されていない。今後の課題である。

第2節 歴史的環境

芋川氏館跡が確実に芋川氏の居館であったという直接の文献史料ではなく、いわば地元の伝承である。その意味からすれば「伝芋川氏館跡」とすべきものである。このことは信濃のほとんどの居館跡についていえることである。しかし、芋川氏館跡については、戦国時代末期に活躍する芋川氏の本貫地を芋川の地に求めることから、単なる伝承以上のものということができる。つまり、「芋川」の地名が「宇河庄」以来のものであり、甲越の戦の時に上杉・武田両氏から芋川氏が重用された主因は、芋川氏の本貫が信濃と越後を結ぶ要地にあったからにはかならない。芋川氏の本貫地は芋川の地のみならず信濃の一部にも及び、鳥居川ぞいや斑尾川を経て信濃町荒瀬原に至る道すじは、野尻と飯山を結ぶ最短コースにあたり、重要な地域であった。したがって、三水村誌（小林・矢野1980）等の通説を否定する根拠は見当たらないところから、あえて「伝」の字をはずして「芋川氏館跡」として扱った。「芋川」の地名は中世初期の文治2年（1186）の摂関家（近衛家）の所領として登場する。信濃の



第3図 三水村の遺跡周辺の中世城館跡 (1 : 50000)

「乃貞未濟庄々」の中の「殿下御領芋河庄」（近衛家所領目録）である。当時北信には同じ殿下御領である太田庄があり隣接していた。元亨2年（1322）には芋河庄の地頭大仲臣盛家が戸隱山中院（現戸隠神社中社）に法華經印板を納めた（戸隠神社蔵法華經判木奥書）とあり、芋河庄の地頭は大仲臣（藤原）氏であった。また、建長5年（1253）の近衛家所領目録によると領家は中原氏と考えられている。

江戸時代天保年間に作られた「芋川氏墨世譜錄」によれば、芋川氏の祖は藤原氏で鎌足17世孫芋川弥次郎兼定であるというが確証はない。しかし、大仲臣氏が藤原姓芋川氏の祖の可能性は高いとし、「御所之入」の地名は大仲臣氏の居館があって、そこからついた名前であろうというが（小林・矢野1980）、これもまた確証があるわけではない。

応永7年（1400）7月、守護小笠原長秀が京都から信濃に入ると、信濃の国人層はこれに反発して大塔合戦となる。守護と国人層の対立は合戦後も引き続き、同11年9月高梨朝秀も反乱し、幕府から派遣された代官細川恵忠は高梨方の桐原・岩槻・芋河の要害を攻略した。この下芋河の要害は若宮城といわれている。「芋川氏墨世譜錄」によれば芋川氏は芋川上下地頭であったと記録にあるところから、若宮城は芋川氏の山城であり、この時に高梨氏の支配下で戦ったと考えられているが、「譜錄」の信憑性から若宮城が芋川要害になるかも含めて検証が必要であろう。

文献に芋川氏の名前が初めて記載されるのは戦国時代末期の甲越合戦の時である。この戦は言うまでもなく、武田信玄の信濃攻略に対して、信濃の在地領主層が越後の上杉謙信に救いを求めたことに始まる。したがって信越国境に本拠を持つ芋川氏は、甲越両陣営によって重用された。このことは、いくつかの史料にかいま見ることができる。つまり鳥居川ぞいのルートと野尻から荒瀬原（信濃町）を経て斑尾川ぞいに抜けるルートは、前者は善光寺平南部へ、後者は善光寺平北部（飯山・中野）へ通ずるもので、戦略上きわめて重要な場所であった。だからこそ芋川氏が大きく勢力を伸ばすことになる。

芋川氏の出自はすでに記したようによく分からぬ。室町時代にあって初めは中野の高梨氏に属し、のち長沼の島津氏の配下に入ったともいわれる。島津氏の領地は芋川庄と同じ殿下領であり、島津氏は豊野町を中心にも礼村など広域にわたる太田莊の地頭であって、早くからの北信の有力国人層であった。

永禄12年（1569）2月24日の武田信玄の芋川親正への手紙には「其擧無事ニ候哉、承度」とあり、たびたび手紙を出して信越国境の様子を聞いている（『信濃史料』13の281）。これは芋川氏の史料上に見る最初のもので、以降芋川親正はひんぱんに史料に登場するのである。この時、芋川氏は武田の北信攻略によって、武田の支配下に入っていたのである。しかし、信玄没後武田勝頼の代になって武田氏が滅亡すると、武田の旧領のうち北信は織田信長配下の森長可に与えられた。これに対して、芋川親正は北信の国人層と謀り、森長可ら織田方に一揆を企てる。背後に上杉景勝の助けがあったからであり、このことを見ても芋川氏は本来的には北信の国人層と同様に上杉方と親密な関係にあったといえる。しかし芋川方は森長可ら織田方に大敗北し、大倉城（懇野町）にこもった芋川方の婦女子は多数命を落とす（小山2000）。なお、この時の総大将は芋川親正であった（『信長公記』）。芋川氏の成長ぶりが知られる。

この後、織田信長は本能寺の変で没し、森長可ら織田軍の諸將が上方へ引き上げるに伴い北信は景勝の支配下に入る。芋川親正は景勝により重く用いられ、芋川の本貫地を安堵されるとともに新たに牧之島城代（信州新町）となり、香坂（信州新町）、大岡（大岡村）の地を与えられる。これは中信地方から北信の一部にかけて勢力を伸ばそうとしていた木曾義昌に対抗するねらいであったともいわれる。村上氏や須田・島津氏らに次ぐ厚遇を得たのである。親正の知行高は4,486石で、海岸城代（長野市松代）の須田氏の12,086石、長沼城代の島津氏の6,190石に次いで（文禄3年9月「定納員数日録」）。上杉景勝が長沼城代の島津忠直に与えた安堵状によれば、三水村



北堀から鼻見城を望む

内では福王寺（晋光寺）、倉井、赤塩であり（「地行方之費」「信濃史料」補遺上）ほぼ太田庄の故地である。芋川の地は芋川氏の本貫として残されていたことを示す。こうして親正は景勝軍の有力諸将の1人として安曇にも兵を進め仁科氏と戦を交えている。

慶長3年（1598）正月、天下を統一した豊臣秀吉によって上杉景勝は越後より会津へ移封され、芋川氏も景勝に従った。命により百姓を除く中間・小者まで会津へ移住した。これに伴い芋川氏館は恐らく無人の地となったものと思われる。

会津へ移った芋川親正は子の元親分を合わせると8,000石となり白河小峯城を与えられた。こののち江戸幕府の一国一城令などによって、芋川氏は代々江戸守老をつとめたが、上杉治憲の改革に反対して切腹の上、家名断絶した（七家騒動）。しかし、のちに末家をもって芋川氏は再興された。

このように芋川氏の出自ははっきりしないものの、芋川親正が牧之島城代となつても、芋川氏の本貫地として芋川館は会津移封まで維持され続け、その後、小者に至るまでの芋川氏関係者の移住で館は完全に廃れることになる。

また、芋川氏館跡には隣接して東に妙福寺がある。地割がほぼ一致し、北側には小規模な堀を巡らし東側は斑尾川が流れる。恐らく斑尾川からこの堀を通して、館の堀に水を導水したものと思われる。地割・規模等から館の副郭という考え方もある（鷹道・白田1983）。もともとこの地には蓮託寺があつて、寛文7年（1667）飯山城主松平忠俱に招かれ飯山へ移った（「自天和二年至天和三年六月領國寺社領並由緒卷出帳」）。跡地に妙福寺が創建され今日に至っているといふ。

館跡の西側の山麓ぞいにある町集落は小道にそってあり、城下町の名残という。この山頂に鼻見城があり芋川氏の山城である。標高722.7mの山頂に東西25m、南北6mの本丸跡と二の丸跡と呼ぶ曲輪と空堀がある。また、鼻見城の南の登り口に、芋川氏によって建てられたと伝える若翁寺があり、その上方に山麓線ぞいに慶長年間（一説には天正年間）に掘削されたといわれる芋川用水が流れる。

芋川氏館跡より3km北の山頂に若宮城がある。規模は鼻見城より大きく、標高690mの山頂に20m四方の本丸跡といいくつかの曲輪と5か所の堀割や井戸跡がある。高梨氏の反乱で攻略された「芋川要害」であり、芋川氏の詰め城であり、鼻見城を副城とする考え方が一般的である。

尚、本稿の記述は『三水村誌』（小林・矢野1980）に負う所が多い。

第3章 遺構

第1節 西堀と付設遺構

1. 概要（第1・6図）

検出した遺構は西堀と南堀の一部（S D01）と付設施設（遺構）及び杭列を伴う水路2か所（S D02・S D03）、石列1か所（S X05）、建物跡を示す柱穴群（S B01）、鍛冶跡（S X08）がある。付設施設は障壁のある土坑（略して障壁上坑）19基（S K01～S K19）、障壁土坑間の堀底の台地状の高まり（略して堀底台）が3か所（S X01・S X05・S X06）、護岸用と思われる杭列2か所（S X02・S X04）、土橋1か所（S X03）である。土橋を掘る付設物とするか判断に迷うが一体の施設とした。從来長野県内の中世館を囲む堀（濠）は素掘りで土橋や暗渠などの付設物はあっても、障壁土坑などの障害施設は未検出であった。

2. 西堀（S D01）

全長73m、最大幅6.5mを調査した。すでに述べたとおり、調査対象地が西堀の西側半分のため、堀の東側は未調査であるが、土堤の存在で推定可能である。ただし、西側の掘り込み面の確認は黒色粘質土にあると予想して調査に臨んだが技術的に不可能であり、青灰色粘質土から検出せざるを得なかった。

第1次調査（平成13年度）はB地区06ラインより北側を調査した。掘り込み面の平面確認が困難なため、断面観察用の上手をトレインで直交させて19ライン、17ラインなどに残したが排水对策上のこともあるってその数は最小限とした。第2次調査はB地区06ラインより南側で、土層観察用土手は土橋部分と44ラインとした。

西堀は西北隅にある障壁土坑S K01からS K14まで直であり51mある。堀幅は上端から土堀下端まで7mであり、その算出根拠は後述する。主軸はN10°Eである。堀底には障壁土坑S K01からS K14までの14基と堀底台S X01がある。各土坑の底部は意図的に高低差をつけてある。堀底台S X01と各土坑間に障壁を含めると堀底の凹凸は顕著である。土橋S X03は西北隅より43mである。S K11の西壁とS K13の北壁上端には護岸用と考えられる杭列S X02がある。

S K14から東南隅までは西壁が2.5m東に寄る。東壁は主郭の西土堀線と一致するため、西壁はS K14を境に「L」字形に幅4.5mと狭まり、西南隅まで直線となる。堀底台S X05・S X06の間に障壁土坑S K15からS K18までの4基の上坑がある。ここでも堀底は土坑と堀底台で凹凸をなすが、堀の北側はではない。堀底台S X06は西堀の西南隅となり、障壁土坑S K19から始まる南堀へと続く。南堀はS K19の幅数と一致し7mで、西堀北側と一致する。

西堀の西壁は青灰色粘質土で検出したため、発掘図では2段構築と錯覚されがちである。しかし、堀埋土の落ち込みは堀（土坑）の西壁上端の検出点よりも、1.8m西に寄った点にあり、この点が堀の西側肩にあたるとしてよい（土層A-A'、B-B'）。黄灰色小ブロックまじり黒色土（3b）層までは堀の内外にわたり水平堆積するが、黒色粘質土層（4a）以下の土層が堀中央へ落ち込んだ状態で堆積している。つまり、土層図B-B'では黒色土・青灰色パラス・青灰色粘質土を切って堀を構築したことを示しているのである。したがって、この堀土落ち込み点が堀の掘り込み点となり、現農道端まで0.7m、土堀下端まで7mとなる。つまり西堀の上端幅は7mとなり、地割等の表土観察からの推定幅より1m少ない。なお、西壁が2段構成とならない点は上層レーベル'、P-P' と南堀上層T-T' からも裏付けられる。

3. 障壁土坑・堀底台・土橋

S K01(第7図) 西堀北西隅にあるが、安全対策上北壁の検出は断念したため土坑の北辺は未調査に終わった。おそらく南北方向を短辺とし、東西方向を長辺とする長方形プランを平面形とすると思われるが、後述の大部分の障壁土坑同様に長辺径は不明である。西壁は2段であり、土層A-A'でも認められる。北西隅にあるからであろうか、この上坑のみである。坑底537.41mでは他の土坑同様に平坦である。壁は傾斜し確認高は20cmである。堀の下端は他の土坑の下端部と一致する。つまり各土坑は西堀に規則正しく並置させていたことを意味する。上端は他の土坑よりやや内側となる。S K01は幅30cm、高さ25cmの障壁でS K02と接する。

S K01(西堀)の北壁土層(A-A')はきわめて複雑である。特に有機物層(4c)から底部までは黒色・黒灰色粘質土に薄い砂層を挟む互層で20層に及ぶ。互層は西から東、つまり堀中央へ土砂が冠水状態の中で20数回にわたり流れ込んだ状況を示している。互層下部からは自然木片とともに特に下部砂層から貝殻や昆虫類の出土が目立った。西堀が堀として機能していた時には貝殻が生息する環境にあったことを示している。複雑な土層と昆虫や貝殻の出土は、堀の北西隅という他の土坑と異なる性格を語るものである。

S K02(第7図) 観察用土手を残したため全掘していないが、1辺3mの長方形土坑である。坑底はS K01よりも深く537.37mであり平坦である。土坑下部には砂疊層があり、上坑底部を一部覆う。これはS K03、S K05にも認められ、バラスが堀外より流入したことを示している(土層B-B')。

S K03-S K04(第8図) S K03は幅50cm、高さ30cmの障壁で隔てられたS K02の南側にあり、長軸を南北方向とし、長辺3.3m、短辺2.55mの長方形土坑である。S K04はS K03の東側に併置されており、幅10cm、高さ20cmの障壁で隔てられている。調査区ぎりぎりの所に検出されたため規模等は不明であるが、上墨から想定される東堀までの距離によりS K03と同規模で、土坑2基が併置されていたことになる。西堀は全掘していないので確実な点は不明であるが、調査範囲内では2基併存はここだけと思われる。この構造上の相違は堀底台S K01が東側にあることと密接な関係があろう。後述するS K05が、他の土坑群と異なる構造であり、障壁を持つ堀(隣子堀)の一形態を示すものといえる。坑底はともに537.43mである。

S X01(第8図) S K03-04とS K05の間にある幅2mの長方形の高まりで、検出面高は537.90mであり、S K03の坑底より40cm高い。上面はカマボコ形である。上面はバラス層で覆われていた。この部分の堀の壁ははっきりしなかった。当初、陸橋とも考えたが高さが不足し、かつ埋土が他の土坑と同一であり、S K03、S K05と同様にバラス層で被覆されており、堀底の付設物(障害施設)とすべきものであろう。

S K05(第8図) S X01の南側でS X06に接してある。坑底は平坦で537.77m、壁高からの深さは1m、S X01からは1.2m低く、土坑の中では最も深い。長辺3.3m以上、短辺1.4mの長方形で、底径は短辺で1.0mである。壁は青灰色粘質土を丁寧に削って急角度に仕上げている。壁面には掘削痕が見られた。埋土は多量のバラスが西から流れ込んだ状況で充填されていた。S K05はS X01、S K06と比較してばねけて深く、まさに障害物である。

S K06(第8図) S K05の南側にあり、幅・高さとも10cmの障壁で区画される。坑底は平坦で537.47mと高い。短辺1.0m、長辺は3.5m以上で長方形プランである。

S K07(第8図) S K06とS K07の間に併置させてあり、土坑底は537.06mで、両者より-60cmと深い。短辺1.2mの長方形であろう。上坑の西壁掘り込み面(検出面)は青灰色粘質土で、538.20mのレベルにそって、この部分も含めS K05からS K12にかけ各土坑は直線的にそろえている。これは青灰色粘質土層上面で検出したものであり、すでに述べたとおり見せかけである。西堀西壁と土坑西壁は共有していることになる。

S K08 (第8図) S K07とS K09の間にあり、短辺は1.7m、障壁幅は0.3m、壁高0.2mである。坑底は537.31mで両側土坑より深い。

S K09 (第8図) S K08とS K10間にあり、短辺は1.6m、障壁幅は0.2mである。底面レベルは539.98mで両側土坑より深い。

S K10 (第9図) S K09とS K11の間にあり、短辺は1.8m、坑底は537.90mで、S K09よりやや深くS K11とはほぼ同一レベルである。障壁幅は10cmである。

S K11・S X02 (第9・10・16図) S K11はS K10とS K12との間にあり、それぞれ障壁幅20cm、壁高5~10cmの小規模な障壁で区画される。障壁土坑としてはS K12に次いで大きく、南北方向の長さは8.8mである。この間に障壁は認められなかった。床面は平坦で、S K10とS K12とはほぼ同一レベルで537.05mである。西壁は西堀と共にし、検出面と底面との比高差は1.2mであり傾斜角は45度である。青灰色粘質土をフラットに掘削し、堀が漏水状態であれば、湿った急角度の壁は足がすべり侵入者にとっては大きな障害となる。

西堀壁斜面上端の肩とそれより20cm南の斜面上に、直径8cm前後の丸木を素材とした杭が2本と、それに横に架けた丸木が3本と、枝の小片が10数片からなる護岸施設(杭列)S X02がある。ほかに杭やその痕跡は認められなかったが、杭の背後には崩落と思われる浅い落ち込みが青灰色粘質土上面に2mの範囲に認められており、他の杭の痕跡は残されなかつたものと思われる。また西堀の壁がこの施設の存在によって2段構築とする根拠となり得るか検討したが、壁の小崩落に伴う斜面上の応急処置とした方が、S X02の状況からむしろふさわしい。なお、この部分のレベルは538.20mで現地表下60cmである。

S K12 (第10図) S K11と土橋S X03との間にあり、南北方向の長さ10.2mの西堀最大の大型の障壁土坑である。西寄りの一部は平成13年度調査分であるが、大部分は14年度に調査した。また、兩年度に調査がわたったため、土層観察用の土手(L-L')を残した。S K11とは幅15cm、高さ5cmの障壁で区画されるが、坑底はともに平坦で、レベルは537cm前後で同一レベルにある。西壁は土橋S X03側は急となり、検出面と坑底との比高差は0.9mである。南壁は土橋S X03の西壁となり、S X03との比高差は1m、主郭現地表面からの比高差は1.4m前後である。坑底及び埋土下部(有機物層以下)から木製品、陶磁器、内耳土鍋、茶臼、石臼など、西堀の中でも最も多くの遺物が出土した(第4図)。

埋土はS K01同様に複雑で、堀コーナーの性格を示している。つまり、南壁寄りは埋土下部は粘質土と砂層の互層が土橋S X03から流れ込んだ状況であった。また、南壁から坑底にかけて土橋S X03の護岸用と思われる人頭大の石が数点転がり込んだ状態で検出された。

土橋S X03 (第10・15図) 上端幅2m、下端幅5mの西堀と直交させた長方形の高まり部分であり、ここでは冠水状態を示す有機物層(4c)は認められない。下端幅に比較して上端幅が狭いが、土橋南壁上端に崩落防止用の杭列(S X04)が認められるところから、実際の上端幅は3.5mとなる。しかし、後述のように、土層の状況から再度崩落があり、その後は現状とさほど違わない土橋であったものと思われる。上端は標高1.2m、S K13とは0.8mの比高差がある。北斜面が70度と急であるのに対して南斜面は緩斜面で、S X03肩部から1.5mで再び急角度となり、S K13の北壁となる。この傾斜変換線から内側に4本からなる径10cm前後の木材を削った杭群S X04



西堀西壁 (S K11部分)

が打ち込まれていた。後述のとおり水路護岸用の杭列とは離れた一群であり、斜面の状況から陸橋 S X03 の護岸用杭群とすべきものである。この部分は青灰色粘質土層上部に有機物を含む黒灰色粘質土を挟む砂層が厚さ10cmであった。ここからは北宋錢2点をはじめ木製品や珠渦焼などの土器類が多数出土したが、特に手斧の削り屑が最も多く出土した。護岸用の防御もむなしく、まもなく崩壊したのち、冠水状況となり堀の一部となったものと思われる。

また、土橋 S X03 の北壁上端には人頭大の削り石が10点ほど認められ、一部は S K12 の底部に崩落していた。護岸用の石であり、北壁上端も一部崩落していたことをうかがわせる。北壁の傾斜角が上端で緩くなるのはこのためであり、恐らく土橋上端幅は完成時には2間(3.6m)であったものと思われる。

また土橋 S X03 から S K13 にかけては、水路 S D02 と列石 S X07 が上層遺構としてあったが後述する。

S K13・S K14 (第11図) 土橋 S X03 の南壁に接して構築された2基併置された障壁土坑で、S X03側が S K13、その南側が S K14 である。S K14 は S K01 に始まる幅広の西堀の南端である。西堀は S K14 の南側の堀底台 S X05 から堀幅を2m減じた、幅の狭い西堀となる。両土坑とも長方形で短辺径は S K13 が2.0m、S K14 が1.7m であり、長辺は4.5m以上である。両土坑は幅30cm、高さ5cmの障壁で隣接している。坑底は平坦で S K13 は537.20m、S K14 が536.95m で S K14 がわずかに低い。S K13 と土橋 S X03との比高差は0.8m、S K14 と堀底台 S X05との比高差は0.7mで土坑が低い。

両土坑の埋土は S K01、S K12 と同様に周辺の高所からの流れ込みで粘質土と砂の互層が著しく発達しているが、S K13、S K14 も同様である。木製品の出土量が多い点と出土状態も共通する。また、クルミの大木の根が有機物層(4c)に挟まれた状態で出土した。二次堆積したもので、恐らく館の屋敷材のひとつであったものと考えられる。

S X05 (第11図) S K14 と S K15 の間は南北6m、北側が高くレベルが537.50m の堀底台であり南に傾斜する。埋土は有機物層(4c)とその下層に有機物を含んだ黒灰色粘質土層(5b)や黒色砂層(7a)からなり、堀底台 S X05 は堀底であったことを示しているが、堀の西壁ははっきりしなかった。堀底台上の薄い砂質土のあり方から、幅の狭い堀であったと思われる。なお、この有機物層とその下の砂まじりの黒灰色粘質土層(6f)から20数点に及ぶ種子類の出土があった。堀底台の底部直上は砂質土であり、梯2点と少量の枝などの木片が出土したにとどまる。

S K15 (第11・12図) 排水を兼ねたトレンチ設定時に大部分を失い、断面観察で存在を確認した。南にゆるく傾斜する堀底台 S X05 に幅30cm、高さ10cmからなる障壁と1.4mの平坦な坑底からなり、S K16 の壁となる。いずれも青灰色粘質土を掘削していた。ただし、堀底台に接した土坑は高まり部分を直接掘削し、土手状の高まりを障壁としている。堀底台を緩傾斜としたためであろう。この緩傾斜を別の土坑の坑底とすることは平面調査でも未確認であったからである。

S K16 (第11・12図) 試掘トレンチの上層に西壁及び坑底を確認し(P-P')、西堀南端では最初に確認した障壁土坑である。北壁は試掘用トレンチで失い不明であるが、トレンチ東壁土層(O-O')に見られるところから、南北方向5.1m、東西方向2.1m以上となる方形プランの土坑であろう。坑底は青灰色粘質土層下層のパラス層に達していた。レベルは536.95mであるが、10cm前後の凹凸がある。また主郭からは1.7mの深さとなる。西壁は黄灰色粘土小ブロックまじり黒色土(3b)下部の黒色粘質土(4a)層から切り込んでいるが、これは土坑肩部の崩落ではあるが、掘り込み面としてよい。土坑埋土の堆積状態とも一致する。しかし、平面形での検出は有機物の含有の有無にかかるが、肩部部分は少なく、この部分の崩落もあって、ここでも確実に検出可能な青灰色粘質土からおこなった。壁高は1.4m、青灰色粘質土からは0.65mであり、傾斜角は40度である。ちなみ

に現地表面から坑底までは1.7mである。坑底には灰色粘質土が5cm堆積しており、漆器碗が出土した。また埋土からの木製品などの出土も多くあった。坑底レベルは536.85m前後である。

S K17(第12図) S K03、S K18とともに完掘できた数少ない障壁土坑である。平面形は南北3.1m、東西3.7mの長方形である。壁高は30cmであるが、東北隅は10cmと浅い。確認のための小トレンチを入れたが変化はなく、底部にパラス層と、20cm前後の凹凸があることになる。S K16、S K18とは上端幅40cm、下端幅70cmの障壁で区画される。

S K18(第12図) 西堀の最南端にありS K17と西壁をそろえる。南北2.8m、東西3.6mのやや東側が広い長方形プランである。壁高は24cm、坑底レベルは537.16mで、ここも凹凸がある。埋土部から石鏡が出土した。

S X06(第12図) 西堀最南端で南北隅にある堀底台である。南寄りは水路S D03と最近の深い掘り込みによって地山(青灰色粘質土)はかなり削平されていた。地山のレベルは537.45mで地表より1m低い。トレンチ南壁土層図(D₃-D₄)で国土座標85276mの点では灰色粘質土層を切り込んだ、長さ3.5m、深さ0.5mの落ち込みが認められた。堀上には堀埋土と同様の有機物を少量含んだ黒色粘質土(4b)と砂砾層(6c)、砂層(7a)が互層となっていた(第17図)。平面としては、先述したとおり後世の削平で追求できなかったが、これが西堀西南隅を示す地層と考えてよい。つまり堀の西南隅には障壁土坑は設置されずに素掘りの堀であったことになる。西堀はここで曲がり南堀となり障壁土坑S K19となる。なお、この部分は水田地割とはかなり異なる。

第2節 南堀と付設遺構

1. 南堀S D04

主郭の南外郭線は中央東寄りの中央道路を境に異なる。つまり、中央道路東寄りは公民館裏手にかけて、主郭外郭線は「L」字形に上端で3m南側に張り出した形となる。この主郭の南外郭線にそって南堀が開むものと調査当初から予想していた。南堀想定地には民家があり、地割も手が加えられていたからである。しかし、S K19の検出によって、公民館裏手の張り出し部分にある右手下端と障壁土坑S K19の西側掘り込み点が一致することによって、南堀の位置が確定するとともに、現在見られる民家裏手の東西線と土手は後世に削り取られたもので、公民館裏手の土手が主郭南外郭線は南堀にそうものであることが判明した(第6図)。

2. 障壁土坑

S K19(第12図) S K18の東側にある。用地外にあるため西寄りの一部のみ検出した。上端幅は南北方向で6.7m、東西方向で3m以上である。

S K19付近は地山層である青灰色粘質土層とその酸化層である黄褐色粘質土の割合が高く、耕作下にくる。馬の背状の丘陵頂部にあたる。S K19の検出はこの部分に相当するため、南堀の上端幅は6.7mとなる。

坑底は平坦で南北方向2.2m、深さは検出面から1.6(536.30)m、西壁斜角は50度、南壁では45度である。

第3節 建物跡・水路跡・列石

1. 建物跡

建物跡S B01(第13図) S K19の南方は表土層が浅く、表土下30cmで地上である黄褐色粘質土層に達し、当時は高台部となる。S K19の南方5mの地点に柱穴3個があった。柱穴は円形で径18cm、深さ10cm前後である。掘

立柱の物置小屋の柱穴の一部であろう。時期は不詳である。なお、調査の南及び西側は水路が巡り、搅乱が著しく表土剥ぎの途中で調査を中止した。

2. 水路跡・列石

水路跡 S D02 (第15図) 今次工事に移設された、最近まで使用されていた農業用水路である。西堀の西側縁にそって農道とともに北から南下し、水路のみ土橋 S X03 墓上部で斜めに横断し、主郭西縁ぞいに南堀埋土上部で横断したのち再び西に進路をたどり、西堀南西隅に至ったのち南下する。調査区内では上橋 S X03付近と南北隅で河道路を調査した。この小水路 S D02は西堀の埋没時期、ひいては西堀の下限を知る手がかりが得られればと思い調査を実施した。

水路幅は50cm、深さ70cmで土盛りで上手を塗いているが、必要に応じて割杭を打ち込んで土手を補強している。土橋 S X03 墓上では列石を一部護岸に利用している。水路底には砂礫層が10cm前後堆積していた。この堆積層から寛永通宝1枚と18世紀末以降の陶器類が多数と茶臼1点が出土した。用水路が江戸時代末期であり、この頃はすでに西堀はほぼ完全に埋没していたものと思われる。

列石 S X07 (第15図) 径50cmを超える大石から人頭大の多数の石が、土橋 S X03とその南斜面上に列石状に認められたものである。また一部は S K12の墓内にもあった。大石の中には礎石と思われる加工を加えたものも認められた。とともに遺跡周辺には大石は少ない。恐らく主郭内一部を水田化する時に振り出されたものを投げ込んだものと思われる。このような大石は調査区内では全く出土しておらず、列石は一時期になされたものと思われる。この意味では「列石」という呼称はふさわしくないが、ほかに適正な呼称名もないところから使用した。恐らく水路構築時期よりは古いであろうが、さして遡るものではないと思われる。

第4節 鍛冶跡

工事に伴う上取りによって削平され、遺構面まで達していた。調査予定地外であったが、焼上跡や鉄製品や鉄滓が散乱していたので、平成14年度調査開始早々、3日間にわたり実施した。調査地点はA地区E～H、23～30ラインである。

鍛冶跡 S X08遺構(第13図) 炉跡と便所跡がある。炉跡は2か所並置されていた。炉床は砂まじりの白色粘質土で固められ、火熱で固く焼きしまっていた。すでに上部は失われていたが、残存部分はいずれも径50cmの円形で、両者は30cm離れていた。本来はひとつのものであったかもしれない。炉床の中から割石に「火」と陰刻した火の神の神体が出土した。

便所跡は径40cmの木製桶を用いたもので、板を組み合わせタガで固定したものである。

遺物 火の神の神体以外に多数の鉄製品と鉄素材と鉄滓である。鉄製品には鎌、ノミ、釘などがあり、鉄素材は長さ10cm、幅2cm、厚さ0.5cmほどの長方形のものである。

遺跡近傍の住人相沢龍雄氏（当時74歳）によれば、昭和30年代まで操業した鍛冶屋があったとのことで、子孫の小林喜一氏（80歳）を現地に招き教示を得た。便所跡の確定はその時のものである。

第4章 出土遺物

第1節 遺物の出土状態

大多数の遺物は西堀の有機物層（4c）以下の埋土下部層である黒色・黒灰色粘質土と堀底（隙壁上坑底部）からの出土である。個々の遺物についてはそれぞれの項目で必要に応じて述べるが、ここでは西堀全体の中で出土状態のあり方を述べておきたい。

遺物には木片など植物質遺物が多く、埋土下部とはいえ、場所によっては遺物の包含層が1mにも及ぶ。しかも、冠水状態の中でも植物質遺物が埋積時の原位置を保つて今日に至っているとは考えられない。しかし、堀底（床面）出土遺物の大半は、堀が機能していた会津移封前に廃棄されたものと考えられる（第4図）。問題は有機物層（4c）下部で底面よりかなり上位で出土した場合についてである。この場合に館が無人の地となり、荒廃が埋土堆積に拍車をかけた中で埋積したものとなれば館との関係はなくなる。問題は防御施設として障子堀が機能するためには堀底の清掃が不可欠である。だとするとならば、堀底出土の遺物は会津移住直前に館で不要となつたものを廃棄されたものとなる。珠洲焼の瓦片は土橋を境に底面直上で出土したものが接合している。明らかに瓦片として廃棄されたもので、移住に伴い廃棄されたとすれば、堀には土砂がすでに堆積していたことになる。堀底の清掃はあまりなされていなかったことになる。すなわち、この前提が正しいとすれば、堀埋土出土の遺物の大半は館と密接に関係したものであるし、土器や陶器類を見ても17世紀代のものは見当たらない。つまり、発掘の所見では堀の清掃が確認されていないのである。

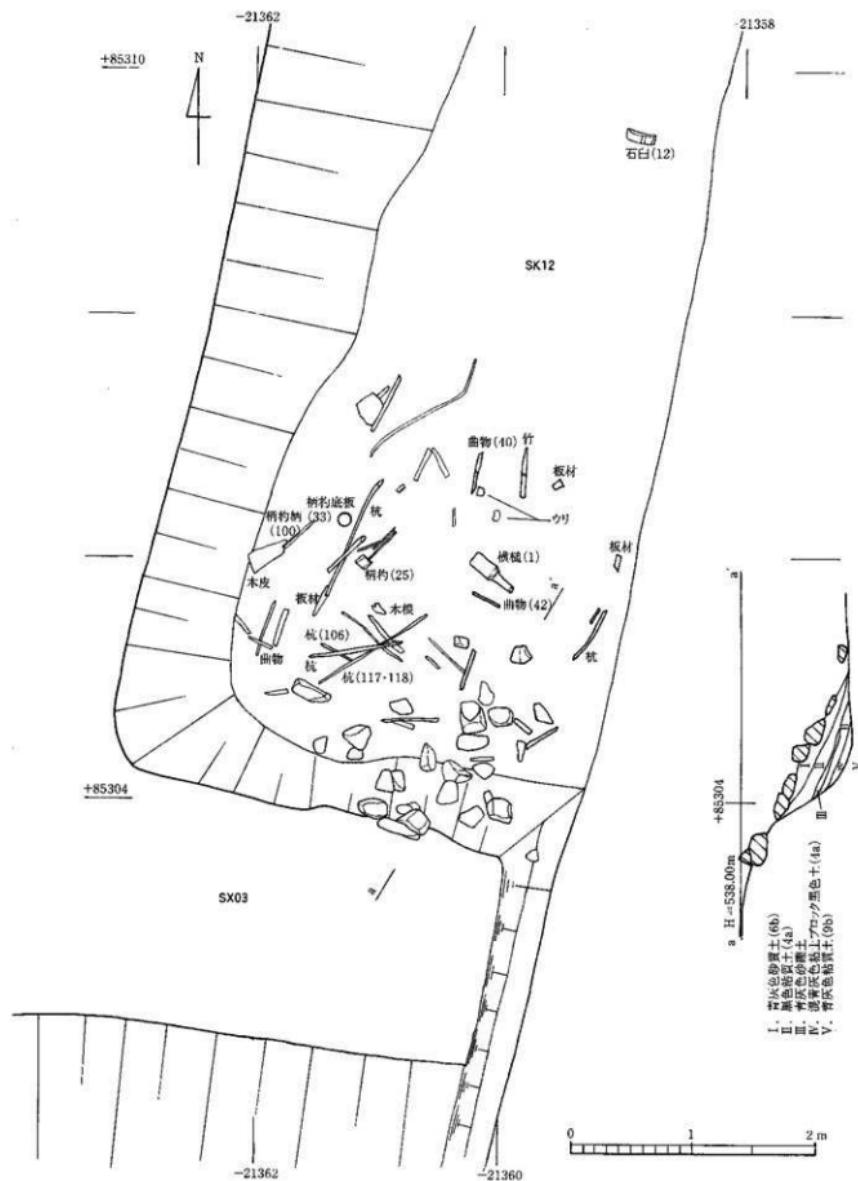
表2は植物質遺物を出土層位は無視し、底部（床面）、床直（底面からおよそプラス10cmまで）、そして有機物層下部の黒灰色粘質土や黒色粘質土出土の遺物を造形ごとにまとめたものである。植物質遺物を提示した理由は数量的に最も多く、かつ冠水状態の中では極く不安定であることから堀の性格を考える上でひとつの判断材料が得られるものと思われるからである。その結果は堀の端に多くの遺物が集中していることを示していることになる。自然木はSK03、SK11、SK12、SK13、SK17に多い。同様に手斧による削り屑も自然木と同様の傾向を示すが、特にSX04からSK13にかけてばねけて多く出土している。これらは冠水状態の中でも植物質遺物であるが故に、堀の中にあって浮遊し、やがて沈殿・堆積したことを示している。しかし、土器類や陶器類などはSK12に集中しており、石臼類も同様で土橋に近い堀からの出土が多い。館廃棄時に不要となった物品を土橋から一括廃棄したものとすれば、堀出土の大多数の遺物は半川氏館時代のものといえる。



遺物出土状況（SK12土橋側）



横幅出土状況（SK12）



第4図 障壁七坑SK12床面遺物出土状況 (1:40)

第2節 縄文時代の遺物

検出遺構は認められず、包含層を確認したにとどまる。しかも、その大部分は西堀埋土にあり、縄文土器では二次堆積である。縄文土器片は整理箱1個分あり、磨耗著しい小破片がほとんどである。すでに地層の項で述べたが、西堀自体、縄文時代以降の包含層を切って構築されたものであって、縄文土器片の多くは上方遺跡から運搬されてきたものではない。ただし、地盤を構成するバラス層にも磨耗著しい縄文土器片が少數あった所から、中には500m離れた上方の小野遺跡からバラスとともに運搬されたものも若干はあると思われる。

縄文土器は前期・中期・後期のもの（第19図）である。

縄文前期の土器（1～9） 土器胎土に植物繊維を含ませた繊維土器と、含まない無繊維の土器がある。前者には精選した粘土を用い、多量の繊維を含ませた丸底と思われる土器（1～3）と、微量の繊維を含んだ羽状縄文を持つもの（5）がある。無文の上器は口縁の形態などからあるいは早期後半の土器かもしれない。無繊維土器には單節斜縄文（4・9）、無節斜縄文（6）、撚り糸文（7・8）がある。胎土には石英・水晶（高溫石英）・流紋岩などの角粒を含む。撚り糸文は無文繊維土器に伴うものであろう。他は前期後葉の土器類と思われる。

縄文中期の土器（10～17） 前葉（10）、後葉前半（11）、後葉後半（12～17）がある。10は胎土に雲母・水晶の角粒を含む。深鉢の胴部上半の破片で箆で斜行沈線を描く。11はローリングによる磨耗が著しい。黒褐色で白色粒子を多量に含む硬質の土器である。信濃川水系の新潟県十日町地方に本貫のある馬高式土器を特徴づける火焔型土器である。火焔型土器は宮中遺跡など飯山地方にいくつか出土例がある（黒岩1993）。当地と信濃川水系との交流を示す資料である。12は樽形の大型深鉢で口縁に並行して隆帯を巡らし、さらにそこから隆帯を垂下させた北信中期後葉4期（水沢2000）であり、隆帯と斜縄文から15、17もほぼ同一時期であろう。16は斜縄文R上で縦位にすり消している。23は櫛描文を斜位に施したもので、いずれも12と同一時期である。

縄文後期の土器（18～22・24） 後葉前葉の土器群で堀ノ内I式土器に該当する。口縁部が「く」の字状に屈折する浅鉢（19）と深鉢（18）、直線的に立ち上がる深鉢（20～22）がある。18を除きいずれも精製土器である。24は連続した刺突文を持つ新潟県地方の三十稻葉式土器で、北信地方の後期遺跡に点在する。山ノ内町伊勢宮遺跡には相当量出土している（田川1981）。飯山地方を経由した信濃川下流域との交流を示す資料である。

第3節 古代の遺物

縄文時代と同様に包含層を確認したにとどまり、遺構の検出は認められなかった。遺物は縄文土器と同様に西堀埋土と掘によって切り込まれた黒色粘質土層から整理箱2個分の平安時代の土器が出土した（第20図）。大部分が細片である。土師器壺・壺B・壺・黑色土器壺・壺・皿・鉢・須恵器壺・壺B・蓋・壺・灰陶陶器壺・瓶などがある。

土師器 壺（1～3） はロクロ成形されたままのもので、口径13cm以下で小型化が著しい。2は底部に糸切り痕をとどめるが、箆で押さえて再調整されている。壺B（4・5）も壺と同様にロクロ成形のままであり、高台は高くいわゆる足高台と呼ばれるものである。壺は大型と小壺がある。大型壺（19・20）は丸底の放弾形で、口縁部から胴部上半は粘土紺（帶）を積み上げたのちロクロ成形され、胴下半は敲き成形された北信から北陸地方に多く見られるものである。小壺壺（14・15）は平底の底部に糸切り痕を残す。ロクロ成形された。北信地方に通常認められるものである。胎内土には石英・水晶・角閃石・チャートなどを相当量含んでいる。

黒色土器 壺（6）・壺（7）は内面を磨いて磨いた後に黒色処理されている。口縁部は横方向に、胴部から底部にかけては放射状に磨いている。6は口径12cm、7は14cmで小型化が進んでいる。

須恵器 壺（8）、壺B（9・10）、蓋（11）はともに暗青灰色で硬質である。壺はほかに灰色瓦質のものが相当量ある。11は口径13cm、壺Bは12cm、蓋は14.7cmである。壺（16・18・21～25）は口縁端部を絞状に肥厚させたもの（18）と、内傾させ断面形が三角形状となるもの（16・23）の2種がある。ともに舞踏波状文が2段に描かれている。胴部は叩き成形される。外面に平行叩き、内面に青海波文（21・25）あるいはさらに指頭で青海波文を消去したもの（24）がある。22は外面に格子目状叩き文が、内面にコテによる成形痕をとどめる。外面は叩き成形ののちにロクロナデをおこなっている。横瓶かもしれない。

灰釉陶器 壺（12・13）は口径がそれぞれ16cm（12）、15.2cm（13）で横け掛けされている。瓶は高台部分（17）である。いずれも東濃窯で大原2号窯期のものであろう。

以上、平安時代の土器は須恵器類が平安時代I期（9世紀前半）、土器器壺は同Ⅲ期（11世紀）、灰釉陶器は同V期（10世紀）、黒色土器は同IVからV期頃と思われる。つまり、平安時代を通じた土器類といえる。

第4節 中世の遺物

1. 土師器

小皿（第21図1～16）いわゆる「カワラケ」であり、西堀埋土有機物層以下の出土である。16点あり、すべてがロクロ成形であり、底部には糸切り痕をとどめる。器形からA～Eの5類がある。

A類（1～4）口径8～11cmで比較的大型である。口縁部が外反する。

B類（7～12）A類よりやや小型で口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。

C類（14・15）口縁部が直線的で、口径・器高の小さい小形品である。

D類（5）口縁部が内湾して立ち上がり、口径・器高とも小さい小型品である。

E類（6）口縁部が外反し、胴部との接点は稜となる。C・Dと同様に小形品である。

小型のC・D・Eは量計算するには数量があまりにも少なく、ここではさして意味がない。

色調や上器胎上からも2類型化ができる。灰色系統のもの（1・4・7～9・12・15・16）と茶褐色系統のもの（2・3・5・6・10・11・13・14）で、前者は粘土が良選され砂粒を含まないものが多い。

土師器小皿は器形・法量から5類型、胎土・色調から2類型があることになる。なお14の口縁部内面には油煙が付着しており、灯明皿である。

また、「手づくね」成形の小皿は認められなかった。

内耳土鍋（第22図）内耳土器とも呼ばれ、鉄鍋を起源とするか搾鉢・擂鉢を起源とするか見解が分かれているが、14世紀末には出現し、17世紀初頭には姿を消す土製の鍋という点ではほぼ一致している。服部敬史氏等の研究（服部1997・98）によれば、在地性が強く、甲信・北関東・東海地方にそれぞれ個性的な内耳土鍋が作られ、16世紀末頃、機能分化して平底ほうろくが発生すると姿を消すという。

本遺跡で出土した内耳土鍋は、すでに遺物の出土状態で述べたとおり、すべて西堀の有機物層（4c）下部の有機物まじりの黒灰色粘質土層（5b・c）や黒灰色粘質土層（5a）から出土した。特に土橋S X03北側の堀を中心とし、土橋南側にまで及ぶ障壁土坑SK12・SK13に集中していた。この範囲は西堀の中でも木製品などの出土も多く、内耳土鍋だけが特別というわけではない。接合関係では、1・3はSK12とSK14埋土下部、6がS

K12埋土下部出土にかかわるものである。1・3では、土橋SX03を挟んで出土したものが接合した。このことは土橋から破損した内耳土鍋片を投げ捨てたとも思われる。この行為をどう理解するか今後の課題である。

出土資料は破片で50点余であるが、図示し得たものは20点である。鍋（箱）型と鉢型があり、茅野市御社宮寺遺跡の分類（小林1982）に従って、鍋型をA、鉢型をBとする。

内耳土鍋A（1～4・9・10・16）は口縁部が外反し、内側に棱をなすもの（3・16）、直立するもの（1・2・4）とがある。口縁部の立ち上がり方には程度の差はある、内湾ぎみが多い。法量は1は口径31cm、底径29cm、器高18.1cm、3は口径24cm、底径22cm、器高13.4cmである。

内耳土鍋B（5～8）は口縁部が外反（6）、直線（5・8）、内湾（7）するなどA同様に変化がある。法量は8が口径33.4cm、底径26cm、器高14cmと背が低い。他は口径が31cm（7）、29.4cm（6）、25.2cm（5）である。なお、底径のみ分けるものにはAでは27cm（9）、23.2cm（10）、Bでは24.5cm（11）、25.4cm（12）である。口縁端部は笠でナデて平退しているが、丸まるものの（14・17・18）や内傾のもの（7・15）がある。

A・Bとともにロクロ成形されるが、胴部下半外面を輻方向に軽くケズリを入れたり（1）、カキ目を施したり（10）、胴部下半内面にハケを施す（11）ものもある。耳は指顎で成形し貼り付けている。底部外面の成形は不明であるが、9には板（笠）を押し付けた痕跡が見られる。外面には多量の煤が付着しているが、底部外面や内面には認められない。胎内には石英・雲母・角閃石や褐鉄鉱の角粒を混入させている。薄く作られた底部と多量の混和材は鍋の機能を高めるものである。黒褐色ないし褐色で、内面には使用に伴うヨゴレは認められなかった。

これら本例を御社宮寺遺跡例にあてはめればA IIないしA IIIとB IIIとなる。小林氏は御社宮寺遺跡の内耳土鍋を5段階に分類し、14世紀後半から17世紀初頭までとしている。この見解はほぼ服部敬史氏（服部1997・98）らに支持され、地域性などいくつかの課題を残してはいるものの、ほぼ妥当である。

したがって、本例は小林編年のA III・B IIIにはば該当し、IV期つまり16世紀後半から17世紀初頭にかかるものといえる。

類例は本遺跡と密接な関係にある、信州新町牧ノ島城跡や辰野町堀ノ内店舗跡の堀出土土器（福島1995）に類似し、16世紀代のものと考えられる。

2. 瓦質土器

壠鉢（第23図11） S K15埋土下部（5 b）から1点出土した。石英・白色砂粒を多量に含ませた黒褐色硬質の瓦質土器（須恵質土器）であり、11条1単位の指目がある。珠洲産壠鉢の影響を受けて在地で生産されたもの（織柄1986）である。

風炉（第21図24） 茶道具のひとつである。3脚ある獸脚の一部がSK12坑底直上から出土した。獸脚は3面に削り、2個からなる半円透かしを持つ抉りを入れた脇を獸脚の両側に付し、身の底部に付している。身の底部には2条の凸帯を付し、その間に藝文を印刻している。身の上半は不明である。類例は文様帯こそ異なるが、新潟県中条町奥山莊政所関係の遺跡群にある。

県内における風炉の出土例は、長野市栗田城跡（原1991）に2点飯山市大倉崎館跡（松沢1993）に1点あるのみである。

3. 珠洲焼（第23図）

西堀埋土下部から13点出土した。特に土橋付近のSK12・SK13・SX04からの出土が多い。堀1はSK12坑底直上の青灰色砂層（7 c）、壠鉢9は堀底台SX05の底直上、壠鉢10はSK11の整下部の斜面上の黒色砂質土

(6c) 出土で、壇使用時に近く、ほかもまた、廃絶時からさほど時間を経過することなく埋没したと思われる出土状態である。壇(1・3~8)と擂鉢(2・9・10・12)がある。口縁部片(1)以外は胴部片である。1は折り返し状の口縁部片で、ロクロナデと叩きで成形している。珠洲焼編年IV期(吉岡1994)である。胴部片は外面に右下がりの叩き目、内面にはて具痕(3・7)をとどめるが、内面をケズリ(4・6)またはナデ(5・8)などで再調整している。ほかIV期のものと思われる。いずれも珠洲焼特有の青灰色の色調で、胎土内に白色の砂粒を少量含んでいる。

擂鉢 口縁部(2)と底部(9・10・12)片がある。1は口縁部が外傾し、端部内面がわずかに突出する。指目が扇形状に施されており、擂鉢の指目としては特異である。青灰色で胎土には石美・白色粒とともにガラス質の黒色粒子が多く認められる。珠洲焼編年II~III期、13世紀代のものと思われる。底部片のうち9の内面は使用による磨滅が著しく、わずかに指目が認められる。底部は静止糸切り痕をとどめる。10も静止糸切り痕をとどめる。10条1単位の指目がある。9はIV期で14世紀、10はV期で15世紀代であろう。12は10条以上の指目を全面に施したもので、これも9・10同様に使用による磨滅が著しい。V期15世紀のものであろう。

以上、珠洲焼の焼成年代は14~15世紀のものが主体で、擂鉢2が13世紀代となる。

4. 陶磁器 (第21図)

中国産の輸入(貿易)磁器と国産陶器がある。なお、18世紀代以降のものについては、西堀上層、水路跡、銀治屋跡等から相当数出土したが、今回は西堀埋土下部から出土した中世陶器のみに限定した。

輸入陶磁器(17~20・23) 中國製の青磁4(17~20)、白磁3(23)点があり、いずれも破片である。青磁はすべて碗である。17・20は同一個体と思われる。外面には口縁にそって雷文を巡らし、胴部には唐草文を、内面には唐草文と印花文を施している。口径14.6cm。15世紀代であろう。19は口径15.7cmの端反碗で、暗緑色である。15世紀前半であろう。16は口径15.9cmの鎬連弁文碗で13世紀後半の所産である。

白磁24は口径12.1cmで、12世紀代(Ⅱ期)のものと思われる。本遺跡では最も古い。ほかに14世紀後半の白磁碗、ビーロスク外反タイプの碗(15世紀初頭)の小片などがある。

国産陶器(21・22) いずれも東海地方産のものである。21は瀬戸大窯末期の端反皿で15世紀末ないし16世紀初頭であり、口径は10.8cmである。22は口径10.2cmの瀬戸鉄釉皿で15世紀前半の所産である。このほか14世紀末の瀬戸天目茶碗片(後Ⅱ期)と鉄釉皿小片(16世紀代)がある。

5. 石製品 (第24~31図・表4)

石硯1、砥石3、茶臼7、着挽き臼8、石鉢4、凹石2点がある。臼類の一部は石列SX07(8・11)と水路跡SD02(15)から、ほかは西堀の黒灰色粘土層出土である。

石硯(第31図19) 現存長13.6cm、幅5.2cm、厚さ1.5cmの粘板岩製である。半壊しているが、復元長は長さ14.3cm、上端(海側)幅4.4cm、下端(陸側)幅7.6cmである。素材を切断して、海側を狭く、陸側を広くした擬形であり、縁片は素材を打ち欠いた自然面のままとしている。主要面は中央を1条の沈線で区画し、その内部に海と陸をケズリと研磨で造り出している。この長方形区画と擬形の縁にそわせた部分を沈刻で文様帯とし、上方には2条の沈線で山(岩)を、その上に1本の松を描き、下方には青海波を7段に描いて大海を表現している。この文様帯は海の部分に陸地(山・松・空)を、陸の部分に大海(青海波)を配置することになる。つまり、山水画として描かれた絵画と硯の主要部が見事なまでに一体化されている。しかも、縁辺は切断または打ち欠いたままであって研磨を加えていない「自然面」として残しておいて、人工部分である主要部に対して対照的である。な

お、下方部の文様体は長方形区画線が陸部から縁にかけて伸び、青海波文が上方部にそれてずれているが、その意図するところは分からぬ。また、破損している身の右側は不明であるが、恐らく左側と同様の絵画が対称的に描かれているものと思われる。身の裏面は成形時の痕跡を残している。条線の方向が異なるところから、母岩から切り取った後に研磨を加えたものと思われる。SK18埋下下部出土。

絵画を持つ中世石硯は管見にふれる限り、類例はない。隣県では上越市池田遺跡にあり青海波が描かれており、13~14世紀のものといわれる(戸根2003)。

礎石(4~6) 携帯用の小型品3点がある。4はSK13出土で破損品であるが、幅2.5cmの長方体であろう。4面に使用面がある。頁岩製で全面に煤煙が付着している。5はSK14出土で破損が著しい。現存する3面に使用面が認められる。流紋岩製。6も破損し現存長12.6cm、幅3.2cmで3面に使用面がある。SK11出土で流紋岩製。

茶臼 茶を抹茶にするための小型の石臼であり、丁寧に成形されている。上臼3点(1・2・25)と下臼3点(7・8・20)の計6点がある。いずれも安山岩製であるが、角閃石を多数含む黒色多孔質のものもある(1・20)。1を除いてほかは破片である。7はSD02、20はSK10、2はSK13出土で、ほかはSK12の埋土下部出土である。

上臼1は口径19.5cm、器高11.8cmの完形の良品である。平面形はほぼ正円である。身の中央には円形の心棒孔を兼ねた供給口があり、側面には対称的位置2か所に方形の挽き手孔がある。挽き手孔は径2.5cm、深さ4cmで、3段に彫刻された台座に彫り込まれている。台座にはわずかに破損がある。すり合わせ面はふくみ幅(佐々木ほか1986)が4cmで凹み、時計まわりに8分画して日が沈刻されている。成形は敲打によりきわめて丁寧である。口縁上端、臼部内面、すり面、供給口、挽き手孔は磨耗が著しい。

2は下端の破片で径20cmであり、側面は研磨されている。25は上臼皿部の破片で、口径20.2cmで外面は縦方向、内面は斜方向に丁寧にハツッテいる。

下臼(7・8・20)はいずれも受け皿を持つ。7は口径23cm、底径36cmである。すり面は8分画であり、ふくみ幅は8cmである。受け皿先端は欠損している。底部は抉りを入れたのみで、特に台部を造り出していない。8は受け皿の一部のみの破片であり、7に類するものであろう。20は多孔質安山岩製で受け皿部の破片である。全面を研磨して仕上げている。受け皿の口径は42.6cmである。

粉挽き臼 上臼5点(9~13)と下臼4点(3・14~16)の計9点があり、いずれも破片である。10・11・14は列石SX07、16はSX06出土でほかはSK12出土である。上臼は口径が41.8~29cm、下臼は33.2~28cmであり、最大の10を除き大半は30cm前後である。ふくみ幅も7cmから2cmと幅がある。心棒孔は円形が多い。すり面は6分画であるが、4分画もある(9)。いずれも時計まわりである。目は細かいもの(14)やきわめて粗いもの(10)と変化がある。4分画の上臼7は大型の円形心棒孔(径7cm)を持ち、それに接して用途不明の長方形の彫り込みがある。4分画の粗い臼と関係があろう。挽き手孔は9、供給孔は11・12に認められる。粉挽き臼は敲打により成形されているが粗い。13は側面を研磨し、丁寧に成形されており、粉挽き臼とするには疑問が残る。あるいは茶臼下臼の台の可能性もある。

石鉢 石擂り鉢ともいう。口径35~28cmと大型であり、敲打またはハツリにより丁寧に成形されている。4点(17~19・21)があり、19はSK12出土で口片である。21を除いていずれも台部は造り出している。内面は使用による磨耗が著しい。17はSX04出土で内面に煤煙が付着し、灯明皿として再利用されたものである。17・19は多孔質安山岩製である。21はSX07出土で口径部を欠損しており全器形は不明である。

凹石 小型の2点(22・23)がある。いずれも破片である。側面に自然面を残し、敲打によってくぼめたものである。22には煤煙が付着する。灯明皿の転用であろう。

用途不明の石製品（24）

器面に幅2.5cmの並行した溝が刻んである。形態から臼の一部とすることもできない。小片のため用途不明である。

6. 金属製品・その他（第31図）

小柄（17） 木製。刀身は鉄製で柄に着柄されている。全長19.6cmである。茎は着柄されていて不明であるが、刀身部の現長は10.5cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmで切っ先をわずかに欠く。柄は丁寧に削って仕上げた白木造りと思われ、全長9.6cm、最大幅1.9cm、厚さ1cmである。障壁土坑SK13の沈底直上の黒灰色粘質土（5b）出土。

引き手金具（23） タンス等の引き手金具と思われ、鉄製で全長4.5cm、最大幅4.5cm、厚さ0.7cmである。引き手部分は環状で、断面形は円形である。身の先端は亀頭状に造り出している。SK13埋土（黒灰色粘質土）出土。

白銅製金具（18） 直径3cm、高さ0.9cm、厚さ0.1cmの白銅製品で、断面はペレー帽形である。頂部には沈継からなる3条1単位の回線を三重に巡らしている。内面に全面に同心円状の沈継が1mm間隔で認められる。身下部にはわずかにゆがみがある。飾り金具の一部であろう。水路跡SD02底部の黒色砂層出土。

銅製容器（24） 銅製容器の高台部の破片であろう。高台部断面形は内湾し端部は平坦である。身との接合部には剥離痕がある。高台高0.7cm、高台径10.2cmである。SK12底部直上出土。

櫛（15-16） 横櫛2点がある。ともに障壁土坑SK14南寄りの西廻高まりS X05の堀底から出土した。15は山形の木製（ケヤキか）櫛で、両端を欠損。幅は現存長3.2cm、長さ5.2cm、厚さ1.5cmである。歯は長さ3.7cm、径0.1cmで7本分が残る。丁寧に削って仕上げている。一部火熱を受け炭化している。白木造りである。16はべっこう製で左半分を欠く。柄には植物の葉を浮彫りしている。幅は現存長6.2cm、長さ5cm、厚さ0.2cmであり、歯は8本分現存し、長さ3.5cmで、歯の断面形は四角形である。べっこう色であるが、退色しわざかに紅色を残す。

錢貨 3点ある。いずれも土橋付近で出土した。20は北宋元豐元年（1078）初鋤の「元豐通宝」で行書体である。徑2.4cmであり、土橋南斜面の黒色粘性砂質土出土。21は篆書体で、北宋宣和元年（1119）鑄造である。徑2.4cmで保存状態が良い。元豐通宝と同一地点出土である。22は寛永通宝で裏面に波文がある。徑2.8cm。水路跡SD02下部の黒色砂層出土で、SD02の上限が江戸時代を通り得ないことを示している。

7. 木製品（第5・31~41図）

漆器・曲物・折敷・柄杓・箸・堅杵・下駄・櫛などの日常生活用具、横槌・鍬などの農耕具、杭などの土木用具材以外にスレーラ状繩物や建築材、用途不明の加工痕のある木製品とチョウナによる削り屑など、整理箱10箱分が出土した。すべて西廻土下部の黒灰色粘質土やその前後の薄い砂層と堀底部からの出土である。特にほかの遺物同様に土橋北側に集中していた。

漆器・木製容器（第31図1~14） 梶・鉢・皿・大型容器などがある。梶は7点（1~7）ある。いずれも横取りである。1は口径15.2cm、底径7.5cmで高台と口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。外面は黒漆を地とし、口縁直下の3か所に朱漆で植物文と思われる文様を描き、底部には2条の円文を描き「小」の朱書がある。内面も黒漆を地に朱漆で見込みに丸く「植物文」を描くが西廻障壁十坑SK16底部直上の有機物を含む黒灰色粘質土層（5b）出土。2は底部を欠く。口径は13.8cmで、外面は黒漆で植物文を描き、内面は朱漆のみである。障壁土坑SK03西側の西廻西斜面埋土の砂礫を少量まじえた有機物層（6f）出土であり、3の高台付桿も2に近接して出土した。口縁部を欠損する。底径6.7cmで削り出し高台である。高台部外面にはロクロによる並行した削り痕が認められる。内外面とも黒漆を地に朱漆により植物文らしき文様を描くがはっきりしない。4

は口径11.7cmで底部を欠く。内外面ともに黒漆上に朱漆を重ね塗りしている。障壁土坑S K11埋土（5c）出土。5は高台部のみであり、底径7.8cmである。内外面ともに朱漆であり、高台部分から底部外面は黒漆である。材質はケヤキであろう。障壁土坑S K12の床面直上（黒灰色粘質土層）出土である。6は楕の胴部下半部分の破片で、内面に朱漆を喰る。障壁土坑S K12埋土出土である。腰の部分にくびれがあり稜輪であろう。7も障壁土坑S K12出土の楕底部片である。高台部を欠損する。内外面とも朱漆である。8は推定口径19cmの鉢である。口縁端部と底部を欠く。内外面とも黒漆である。障壁土坑S K12出土。9・10は大型容器で、9は口径22.5cmである。ともに端部は平坦であり、器壁は厚い。口縁は9は垂直ぎみに立ち上がり、10は内傾する。ともに口縁端部から外側は黒漆、内面は赤塗りである。ともに障壁土坑S K12出土であり、10は西施斜面（SK12）にはりついた状態で出土した。13は無台の楕で口縁部を欠損する。底径5.2cm。内外面黒漆であるが、わずかにとどめるにすぎない。ロクロ口は特に内面に著しい。11は皿または盆の底部片であろう。器厚は0.4cmである。内外面ともに黒漆で内面には竹の葉を朱漆で描いている。障壁土坑S K10出土。14は口径12cm、器高2.2cm、底径8.6cmの小皿である。口縁端部は平坦でわずかに内傾する。外側にロクロ口が顕著であり、外側に黒色の付着物が認められるが漆ではない。漆器でなく、木製容器（「けづりもの」）である。障壁土坑S K18出土。8・14は縦木取り、ほかは横木取りであり、樹種は5・6は針葉樹、ほかは落葉樹で、恐らくケヤキであろう。

曲物 ヒノキなどの長方形の薄板を曲げて作られた円形の木製容器で、薄板はサクラの樹皮（桺）で、底板は樺または木釘で留める。薄板は曲げやすくするために一定間隔に刻んだ平行線を入れるが小型品にはこれを欠くため、破片では曲物柄杓との区別は容易でない。また、後述のとおり、薄板の破片が相当量出土しており、これらの中に曲物片が含まれるものと考えられるが、除外し、平行刻線のあるものを中心に曲物として扱った。なお、曲物の完形品ではなく、数量や法量は不明である。ただし、底板によってこれらを補うことは可能である。

曲物の側板（12・27・28・39～58・79）は20点を越え、ほかに小片は相当数ある。同一片も含まれるであろうが復元是不可能に近い。器厚は最大0.8cm（44）、最小0.2cm（47）で、大多数が0.4cmである。板面はいずれもヤリガンナによって丁寧に削られている。平行刻線は身に垂直や斜行あるいは格子状などがあり、平行線の間隔や刻む深さ、施工部位などに変化がある。身の内側のみに平行垂直線（39・41・44・51・56）や斜行平行線（40・47・48）、外に格子で内に斜行平行線（45・50・54・57）、または内外に平行線（55）と刻線のないもの（42・46）などがある。刻線は曲物の成形に必要であっても、必要箇所に施工するもので、刻線のないもの（27・28・42・46・52・53・58・79）は本来的になかったか、刻線のない部分にあたるか判断できない。いずれにしても、線刻という行為そのものは曲物の成形上必要工程であるから、これらを分析することは曲物の製作技術復元、ひいては曲物復元の手がかりとなろうが今後の課題である。なお、28には留皮であるサクラ樹皮があり、44とともに曲物の口縁部であり、41は外側に深くロクロによって刻まれた平行沈線が意図的に刻まれている。27には四角形の釘穴があり、曲物の胴部下半である。側板はヒノキで縦木取り（柾目）である。12は縦木取りのヒノキ材で側板の底部片であろう。刻線を内側に刻まれ、ほぼ1cm間隔に目釘穴が列状に11孔見られる。外表面は黒く汚れている。曲物の大多数がSK12（12・27・40～42・45・47・48）、SK13（28・43・49・56・57）、SK16～19（44・46・51・54・55・58・79）出土であるが、SK03（50）もある。

底板は3点ある（30・32・36）。30はヒノキ縦木取りの材を使用し、側面はケズリで仕上げている。側面に目釘穴と思われる痕跡がある。直径21.6cm、厚さ0.9cmの障壁土坑SK18出土。32は推定直径44cm、厚さ1.3cm、ケヤキの縦木取りの底板で目釘穴が現存部分の側面に8か所あり、木釘が一部に残る。側面はケズリ痕をとどめる。内外面に不規則な線刻があるが、外側（底面）には平行沈線が一部に残り、油煙が全面に付着している。障壁土坑SK13底面に近い黒灰色砂質土出土。36は横木取りのスギ材を使用した底板あるいは蓋で、直径17.2cm、厚さ

0.9cmである。側面はケズリ、内外面はヤリガンナによる顯著なケズリ痕をとどめている。SK03底部直上出土。

以上、底板から少なくとも直径44cm、21.6cm、17.2cmの曲物のあったことが予想される。また、79は現存幅15.5cmであり、器高を推定し得る唯一の資料である。つまりこの曲物の高さが少なくとも15.5cm以上であることを示している。

58は側板の結合部分を残すもので、外板2枚を1組とし、内板一枚と桜皮で縦位に編み込んで結合しているため、この部分は三重となる。ほかの位置にも斜位の桜皮が見られる。次の柄杓とも思われたが、結合部分に柄穴がないので曲物とした。

柄杓（曲物柄杓）（25・26・31・33～35・38・59・100） 2点の完形品（25・26）、側板（38・59）、底板（31・33～35）と柄（100）がある。

25は曲物部分がゆがみ、底板がはずれかかった状態であるが、ほぼ完存していた。障壁土坑SK12底部直上で出土した。底板は直径7.2×6.8cm、厚さ0.4cmで楕円形である。縦木取りでヒノキである。側板もヒノキを用い、二重から三重に巻き2か所で柄で4段に編んで留め、その間の空間に四角形の切り込みを入れ、そこへ柄を通している。ゆがみのある身は、長さは底板および後述の柄の留木孔より復元可能であり、側面は長方形で長さ7.2cm、高さ5.6cm、厚さ0.4cmとなる。柄と曲物を固定していた。柄は長さ41cm、幅1.1cmで、断面四角形で縦木取りしたヒノキを用いて丁寧に削って仕上げている。柄の先端部は身に固定のため削り、先端から7cmのところで身の内側に断面「V」字状に留木孔が穿たれている。

26も障壁土坑SK12出土で、身の一部が押しつぶされていた。身は二重に巻き込み、2か所で柄で斜めに編み込んで留めており、編んだ間とその対面に方形に孔をあけ柄を通してしている。底板はスギの横木取りで、ヤリガンナのケズリ痕が著しい。側面もケズリ痕を残し、目釘穴が4か所にあり本釘が残る。11.6×11.2cm、厚さ1cmのほぼ円形である。柄は長さ37.2cm、断面形は2.2×1.5cmの方形であり、先端部分は着柄のために、先端から16.5cmのところに削り込みを入れ、以下先端にかけて削って先細りとしている。留木孔は削り込みから1cm先端寄りにあけられている。また柄頭は丸く仕上げ、1cm身寄り側に吊り下げ用の紐を通すための孔があけられている。以上から、27は身が直径12cm、高さ9cmで、柄を身に貫いて着柄した柄杓となる。

側板は破片では曲物との区別は困難である。38・59は厚さが2mm以下で薄く渋曲が見られるところからここに含めた。恐らく曲物とした中にも柄杓の側板があるものと思われる。

底板も4点ある。これらも小型の曲物の底板の可能性もあるが、ここに一括した。33は横木取りのスギ材で、ヤリガンナによって丁寧に仕上げている。直径6.2cmの円形で、断面形は中央がふくらむ。厚さは1.2cmである。31は直径12.5cm、厚さ0.7cmでヒノキの縦木取りであり、ヤリガンナによる痕跡をとどめ、側面も丁寧に削っている。縁にそって磨滅が認められる。34は推定直径10.5cm、厚さ0.4cmでやや小型である。縦木取りのヒノキ材である。丁寧に削って仕上げている。35は直径12cm、厚さ0.6cmで縦木取りのスギ材である。磨滅が著しいが側面にはケズリ痕と目釘穴が認められる。33・34はSK12、ほかはSX04出土である。

柄（100）は完形品の2点以外に1点ある。先端を欠損するが、柄頭から留木孔まであり、現存長37.3cm、幅2.2cmである。スギ材を横木取りし、断面長方形であるが、角取りをして丁寧に仕上げている。柄頭から30cmで身に着柄のために削られている。SK12底面出土。

折敷（37） ヒノキの薄板製箱形の蓋で、角の部分を含む側板の2面分が出土した。つまり側板は長さ27cm、幅は現存長で5.2cmで、中央で折り曲げて角とし、板の先端は斜めに削っている。恐らく別の側板との接合を目的とするものであろうか。なお、この部分には斜行する線刻がともにある。また目釘孔と思われるものも見られるが判然としない。以上の点から折敷は幅が13cm以上で、高さが6cm前後になるものと思われる。SK13出土。

櫛(20~24) 曲物を結合するための留具である。21~23は留具そのもので脱落したものである。幅1.3cm。20~24はサクラ樹皮を三重に巻き込んでいる。未使用的原素材である。21はSK14、22~24はSK13、ほかはSK12出土。

箸(19) 紙木取りのヒノキと思われる材を多角形とし、先端に向けて順次細く削って仕上げてある。1点のみでありSK12出土。

堅杵(第5図) 落葉樹の丸木材を削り出して仕上げている。全長99cmで中央に16cm、径4.2cmの棒状に取っ手部分を丁寧に削って作り出し、その両端に44cm、38cm、直径8.5cmの頭部を丸く削って仕上げている。さらに頭部先端は円錐形としている。使用により磨耗が著しい。なお、頭部は台木として再利用され、その中央は刃あたりによって大きく抉られている。落葉樹用材としている。SK11黒灰色粘質土層出土。

下駄(10-11) 隣壁上坑SK12黒灰色粘質土層出土。いずれも連齒下駄である。10は落葉樹用材とし、横木取りである。長さ20.1cm、幅10cm、高さ5cmである。鼻緒孔は三角形に配している。歯はノコギリで切り出し、ほかは削って仕上げている。指跡を残している。側縁の一部を欠損し遺存状態は悪い。11はスギの横木取りで、凸形の歯をはめ込んでいる。前歯は欠損して現存しない。10と同様に指跡を残したものに長時間使用されたことを示している。鼻緒孔の間に「X」印が刻印されている。所有者を示すものであろう。長さ18.9cm、幅8.6cmである。遺存状態は悪い。

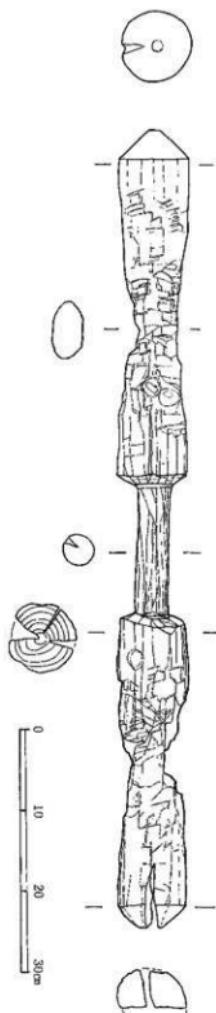
装飾板(17・18) 17は波形に縦どりされた三角形状の装飾された板材で、中央に3か所に切り込みのある円形の透かしがある。下端は欠損。長さ8.4cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmが現存法量である。材は横木取りのヒノキである。18は半月形で底面は鋸歯状に削り出している。円弧部分は削り、頭部に小孔が2個穿たれている。ヒノキの横木取りである。長さ10.2cm、幅3cm、厚さ0.3cmである。

以上の2点は用途不明であるが、木製品の具材の一部であろう。18はSK12、17はSK13出土。

横櫛(1) ナラの丸木を用い、柄と頭部分を縦方向に削って仕上げている。全長40.7cm、頭の径は4.7cm、柄の長さ17.7cm、径4.7cmである。柄及び頭の先端も円錐形に削っている。頭部分は使用により大きくくぼむが、刃先の痕跡が横方向に無数にあるところから、このくぼみは刃物(ナタ)で物を切断するための台として再利用されたものと思われる。SK12出土。

台木(砧)(2) 全長47cm、幅18cm、厚さ10cm。針葉樹製の台木である。両端はノコギリで切り落とし、側面にはチョウナ痕が残る。表にもヤリガンナの痕がある。刃あたりとくぼみがある。ヤリガンナ痕はかつて建築具材であったことを示し、のち台木に転用されたものであろう。SK18出土。

鉄(6) 鉄先と思われる破片である。針葉樹製。腐食著しい。現存長14.5cm、厚さ0.7cm。縁は削ってあり、



第5図 堅杵実測図(1/6)

鉄製の鉗先をはめ込んだアタリの痕跡がわずかに認められる。SK12出土。

杭 水路跡S D02と杭群S X02、S X04に杭列(群)が認められたが、西堀全周から大小の杭の破片が多数出土した。丸木の先端をナタで切断した杭A(106・107・114~121)と多角形に側刃を削り先端を尖らした杭B(99・105・108)がある。杭Aは樹皮の付いた枝を加工したもので、曲がった枝も利用している。直径3~1.5cm、長さは70cm以上となるもの(121)もある。杭Bは板材などを再加工したものもある。杭Bは針葉樹が多いのに対して杭Aは落葉樹が大半である。杭Aの枝の曲がったものや小型のものは、杭としてよりも水路の護岸用のソダがあるいは薪であったかもしれない。SK03(116・121)、SK05(120)、SK11(99・107・108)出土以外はSK12出土である。なお、105は一部が火熱を受け炭化している。薪として再利用されたことを示している。

環状木製品(13~14) 13は直径9.5cm、厚さ0.9cmで中央に方形の孔が切り込んであけられている。SK13出土。ヒノキの縦木取りである。14は直径18.8cm、厚さ0.8cmで中央に円形の孔があけられている。半円形に作られ、孔の左右に目釘穴があり、木釘が残る。したがって木釘で接合した環状木製品となる。周縁部は丁寧に削って仕上げている。内外面とも黒色塗料で塗られている。SX06出土。針葉樹縦木取りである。鍋の蓋であろう。

小型円盤状木製品(15~16) 15は直径4.5cm、厚さ1.8cmの縦木取りの針葉樹を丁寧に削って仕上げている。縁は2辺を直線状に、ほかは多角形に角を残して削っている。上面はわずかにふくらむ。SK13出土。16は直径3.6cm、厚さ0.15cmで丁寧に削って仕上げている。周縁部には円形にアタリ痕が見られる。中央には0.1cmの孔が見られる。ケヤキの縦木取りである。SK12出土。

台形状木製品(3~5・8・9) いずれも破片である。4はマツ、ほかはケヤキなどの堅めの落葉樹の横木取りを使用し、厚さは1.5~1.9cmである。8・9は3辺を知り得る。8は底辺部を、9は上辺部をノコギリで切り、他辺はケズリを入れ角も落とす。ほかも縫はケズリを入れて角を落としている。4の表面にノコギリによる切りが中途まで入れられている。農耕具の一部とも思われるがはっきりしない。3はSK13、8はSK14、4はSK16、9はSK18、5はSK19出土で西堀の南側に多く見られた。

舟底形薄板木製品(62~65) 厚さ0.1cmの薄板製品でAとBがある。A(62・63)は靴底形で、62は長さ24cm、幅6.7cm、63は長さ21.7cm、幅10.7cmで落葉樹を素材としている。54の表面には長軸に直交させた平行線が多数刻まれ、下半に方形の孔がある。とともにSK13出土である。B(64~65)は舟底形で64は長さ20.8cm、幅5.5cmで下部に長軸に直交させた1条の刻縫がある。針孔と思われる孔があるが、はっきりしない。SK17出土。65は半壊しており詳細は不明である。現存長15.7cm。前3者よりも器厚は0.2cmと厚い。厚さと先端部と抉り部分が64と異なるところから、あるいは杓文字かもしれない。ケヤキ製と思われる。

短冊形薄板木製品(67~78) 多くはSK12の出土があるが、破片が多く、詳細は不明のものが多いが、法量からA(67・68・73・74・76)とB(72)の2種類がある。Aは長さ9.5cm(67・73・74)、9.9cm(68)、12.4cm(76)、幅は4.8cm(74)、4.3cm(73)であり、ほかは破損のため不明であるが、7cmを超えるもの(68)もある。Bは折れ曲がっているが復元長22.2cm、幅7.3cmである。いずれも縫にノコギリの切断面を、片面にはケズリ、裏面には削り面を残している。Bはノコギリで切断し、削ってできた板の素材を正面のみヤリガンナで削り仕上げたものが多いが、Aはヒノキの縦木取りで両面とも削り面のみである。67には目釘穴と思われる小孔がある。

短冊形薄板に斜めの切り落としのある木製品(29・66・69・71・75・78) 成形は短冊形薄板木製品と同様であるが、69・75は斜めの切り落としはノコギリによる切断、ほかは刃物のケズリである。なお、75は1面に朱が付着している。とともにSK12出土。

短冊形厚板木製品(84~90・92・112) 厚さ0.3~0.9cmを厚板とした。薄板とは器厚で区別した。成形は薄板と同様にノコギリにより切断したのち削り、正面はヤリガンナで丁寧に削る。針葉樹の縦木取りであるが84~87・

92は横木取りであり、84・85・87には針穴が、86の先端には三角形状の切り込みがある。88は長さ17.3cm、幅3cm、90は長さ9.5cm、幅3cmであるが、これらには欠損したるものも多くあり、すべてが短冊形とはいえない。恐らく何らかの木製品の具材の一部であろうし、作りかけもある。112は縦木取りのヒノキ材で、平面形はやや台形状となる。割り面の左肩には針孔があり、不規則な線状の沈線がある。煤煙が付着するが削られた片面ではない。92は西堀西北隅、90は西南隅、84はSK11、86・88はSK12、89はSK13、87はSK16、86はSK18出土で、ほぼ西堀全城から出土している。

断面薄鉢形木製品（82） 幅5.6cm、現存長7.7cm、厚さ1.7cmで横木取りである。凸面は丁寧に削られ、使用による無数のキズがある。片面は削られたままである。凸面は火熱を強く受け器壁の半分まで炭化している。SK16出土。

角柱状木製品（83・91・113）両端はノコギリで切断し、側面は割り面のみか、さらにケズリを入れた直方体状の小型品である。83はスギの縦木取りの材を断面台形に仕上げたもので、長さ6cm、幅4.2cm、厚さ2.5cmであり、SK18出土である。上端に針穴がある。また底面には斜めに中途まで入れたノコギリによる切り込みがある。91は長端を欠損する。現存長9.2cm、幅3.2cm、厚さ1.6cmの針葉樹の横木取りの材である。SK05出土。113は針葉樹縦木取りの材であり上端を欠損する。現存長7.5cm、幅1.5cmである。SK12出土。

円筒形木製品（101～104）ノコギリで切断する（103）か削り取る（101・102・104）かした円筒状の丸木の側面を削って仕上げたもの（101～103）と、マツの縦木取りの材を断面円形に仕上げたもの（104）とがある。101は断面形が台形となるように側面を深く削ったもので直径は3cmである。上端が欠損のため詳細は不明である。現存長は18.6cmである。横槌の柄かもしれない。落葉樹を素材としている。SK17出土。102・103は側面のケズリは樹皮を剥ぐ程度であり、ともに丁寧である。ともに針葉樹を素材としている。102は長さ14.5cm、径3.7cmでSK12、103は上端を欠損し長さは不明であるが、現存長9.5cm、直径4cmでSK05出土である。104は側面・両端とも深く削り、断面形が梢円形となる。長さ8.8cm、長径3.3cm、短径1.9cmでSK12出土である。93を除き用途は不明である。

棒状木製品（109）下端を欠損して長さは不明であるが、現存長142cm、径1.3cmである。ナラの枝を素材とし、樹皮を残し、先端部を削って抜きを入れている。SK01出土。

建築廃材・削り屑（80・81、93～98）建築廃材としたが、詳細ははっきりしない。80は丸太材の両端をノコギリで切断したもので、両端にはノコギリの刃あたりがある。側面にも10数条の刃あたりが見られる。長さは欠損のため不明であるが、厚さは5.3cmである。落葉樹でSK11出土。81は建築道具の造作途中で不要となった廃材であろう。横木取りのスギで、正面下端にノコギリで切り込みを入れたのち削り取り、断面形が「L」字状となっている。両端ともにノコギリで切断、上面と底面はヤリガンナで丁寧に削っている。長さ7.6cm、幅7cm、厚さ4.5cmである。SK12出土。

削り屑は大部分がチョウナによるものであるが、オノの削り屑もある。樹皮を残すもの（95）もある。落葉樹・針葉樹とともにある。西堀全城から整理箱5箱分ある。特にSK12、SK13（96～98）、SK16（94）SK18（95）に集中していた。93はSK03出土である。

樹種鑑定を含めた分析をすれば、当時の木工技術復元の好資料といえる。

8. 自然遺物

昆虫類・貝類・獸骨などの動物遺物、種子や樹枝・葉などの植物遺物など多量の自然遺物がある。西堀全城の有機物層及び黒灰色粘質土からの出土であるが、特に障壁土坑SK01～SK04など西堀北部に多く出土した。こ

のほか珪藻類なども予想されるが、これら自然遺物の分析は専門機関での分析を待つこととし、ここでは発掘時の所見をもとに、これらの所在のみについて述べる。

昆虫類 ゲンゴロウ・タマムシの羽がある。特に前者は10数体出土した。

貝類 イシガイ科の二枚貝であるカラスガイとタニシ科の巻き貝であるタニシがある。カラスガイは体長20cmを超える大型のものもある。タニシは小型で遺存状況は極めて悪い。

歯骨 ウシの下肢骨と思われる骨がSK11埋土（黒灰色粘質土）から出土した。遺残状態は悪く、藍鉄鉱が付着している。

植物 落葉樹のナラ・シラカバ・クルミなどの葉や樹枝類、風倒木類と、針葉樹の樹枝類、アシなどとともに、オニグルミ、ヒメグルミ、クリ、トチ、モモ、フジなどの種子類が多量に出土した。特にクルミの風倒木が土坑SK13埋土で出土した。有機物層堆積前に倒れた状態であり、屋敷林のひとつであったことを示している。このほか、ヒヨウタンやウリなど栽培植物の種子類もある。

ゲンゴロウなどの水生昆虫や貝類は堀が満水状態であったことを示している。

珪藻類などの分析とともに、当時の環境復元は今後の課題である。

第5章 まとめ—芋川氏と芋川館跡—

1. 芋川館の構造

2年間にわたる発掘調査で西堀のほぼ全城と南堀の一部を検出した。西堀は内法で南北62m、中央南寄りに幅2mの上橋を持つ。西堀の断面形は箱形であり、堀底には18基の隙壁を持つ長方形の土坑（隙壁土坑あるいは隙壁豎坑）と3基の堀底台を持つ。隙壁土坑は堀底台を含めて深さをそれぞれ異にしており、さらに大きさも一様でなく、かつ場所によって隙壁土坑を東西に2基併設するなど、堀底は意図的に変化に富ませている。西堀は東側の3分の1ほど未調査のため、東西方向に2基併設がほかにあるか確定できないが、調査状況から隙壁土坑SK03とSK04の2基だけと思われる。西堀の西壁は堀の西北隅は検出が不十分であったが、堀底台SK01から土橋SK03をまたいで南側のSK14まで直線的で、傾斜角は45度と急角度である。土塁からの深さは最も深いSK05底部は4.6mである。西堀北西隅のSK01からSK14までの堀幅は外法8mであり、SK14の南の堀底台SK05から西南隅の堀底台SK06までの距離は外法で23m、幅は狭くなり外法6mである。この間には4基の隙壁土坑があるが、各隙壁土坑は幅広の西堀にあるものに対して比較的浅くかつ底面には凹凸があり、あたかも未完成の状況にある。深さも主郭面からは1.4m前後とこれも浅い。しかし、南堀の隙壁土坑SK19は主郭面からの深さは2.3mで堀として十分の深度があるところを見れば、隙壁土坑底部の凹凸は幅広の西堀区間にあるものが、平坦に仕上げられているところから未完成とも把握できるが、むしろこれも堀底部を意図的に変化させたものと思われる。

このように西堀は幅と底部は上橋の南SK14を境として北側と西側では異なり、西堀の外側線は鉤形となるところから、SK13に始まる南堀があつて屋敷地が2分され、幅広の堀に囲まれた主郭と幅狭の堀に囲まれた副郭からなる可能性も検討してみた。幅狭の堀が堀幅に限らず、深さや底部に設けられた隙壁土坑の底部などの構造上の相違なども考慮に入れた判断である。つまり郭を二重の堀によって囲まれた館とすることであり、類例は飯山市大倉崎館跡に見られる。しかし、郭内部の水田区画にも、堀跡らしい痕跡は見られるが、積極的に堀跡を示す痕跡ではなく、また、SK19に見られるように、南堀の規模は幅広の西堀部分に近いところを見ると、郭内が未調査である現段階では堀の二重構造説は保留し、堀一重説とした方がよいと思われる。

南堀は別章で述べたとおり、公民館裏手に残る土手を上辺の残存すると、この上手の線がSK18で確認された南堀北側の延長線と一致するところから、南堀は一部民家の敷地となってはいるものの、土地割のあり方からこの部分に存在したことはまず間違いないものと考える。北堀は北側土塁の存在と、その北側の水田地割が周辺と異なり、かつ低いところから從来より北堀の痕跡であろうとされてきた部分にあたる。問題は東堀の位置であり、現状では確定が困難であるが、妙福寺の新規造成墓域としてよい。これはかつて寺域外の水田であったものを寺域に編入し造成されたものであって、墓域の西側の縁線は公民館裏手の上手が直角に曲がり4mほど北に伸びた線と一致する。この線が北堀の内側の線——東外郭線となろう。

以上の検討で芋川氏館は、周囲を隙子堀と土塁で囲まれた堀内法で東西50m、南北60mの長方形区画の館となろう。東に隣接する妙福寺の寺域はほぼ芋川氏館跡と同規模で、東辺は斑尾川によって区画されるところから、この部分を副郭とする説もある（郷道・臼田1983）。妙福寺は芋川氏一族によって建立されたと寺伝にあり、芋川氏と密接な関係にあり南郭説はあながち否定できないが、可能性であり以下の論は妙福寺副郭説ははずして進めること。

また、主郭内部の構造は現在では不明である。米山一政氏は森氏宅地で礎石の存在を確認したというが、今日認めることはできなかった。しかし、列石SK07に礎石と思われる大石が数点認められたところを見ると、主郭

内に礎石建物があったことはまず間違いない。

土橋はS-X03以外に確認されていない。木査調査地域内には別にあるものと思われる。土橋に続く堀外も調査したが、門や道路などの痕跡は認めることはできなかった。土橋より北側2mの位置に東西方向の農道がある。現状で幅2mであって、中世の町屋の景観を残すといわれる町の集落（小林・矢野ほか1980）に続いている。恐らくこの農道が館と町屋を結ぶ街道で、土橋へは楔形を経て続いていたものと思われる。

以上の検討結果から芋川氏館は主郭が方半町規模で、信濃で初めて確認された障子塀を持つ館であったといえよう。

2. 芋川氏と芋川館の年代について

芋川氏が文献史料に確実に登場する時期は永禄12年（1569）で、武田信玄の芋川親正にあてた書状が最初である。甲越の戦の中で芋川氏が信玄に重く用いられており、その理由は越後との国境に本拠があったからである。つまりこの史料から、芋川氏が在地領主として甲越の戦の時点では確実に存在し、重要な役割を担っていたことを知るのである。問題は芋川氏の出現がいつかということである。芋川氏館跡の調査で館跡の構築年代が判明すれば芋川氏の出現問題のひとつの解決になるが、それがすべてではない。在地領主としての芋川氏が館を構えた出現時期を示すにすぎない。

芋川氏館跡の塀からの出土品で、館の年代を示す資料は輸入陶磁器、編年網が確立している能登窯の珠洲焼や東海産の陶器類と2点の北宋銭である。輸入陶磁器の大半は14・15世紀代で珠洲焼も同様である。瀬戸系の鉄釉陶器は15～16世紀代である。つまり、館の構築時期を14世紀代に求めることも可能であるが、北宋銭を含め伝来時期を考えねばならず、これらをもって館の構築時期とすることはできない。むしろ在地窯の土器である内耳土鍋と土師器小皿（カワラケ）は土器の性格上ほとんど伝承期間はないとしてよい（佐澤・水澤2001）。特に宴席用のカワラケは使用が1回限りが多いものと思われ、したがってこれらの土器類に年代が与えられれば構築問題解決の早道であるが、信濃のこれら土器類の編年研究はいまだ大系化に至っておらず十分とはいえない。しかし、内耳土鍋については15～16世紀代の年代が考えられる（小林1982・服部1997・1998）。

塀の埋没は慶長3年（1598）の芋川氏の会津移住以降のことである。会津へは百姓を残して小者に至る一族がことごとく移住することになっていたから、移住後の芋川館は完全に無人地となり、管理もなく塀の埋没は急速に進み、堀埋土と水路での発掘調査の所見から18世紀末頃にはほぼ埋まり、水田造成がなされ今日に至ったものと思われる。

したがって館の出現は、最大にとれば14世紀代に始まり、慶長3年をもって使命が終わったことになる。しかし、後述のように障子塀という防御機能で固めた館の構築は恐らくそれほど古く想定することはできないものと考える。内耳土鍋の示す年代——15世紀末から16世紀前半頃の構築時期と考えるが、さらに別の角度から構築時期については後述する。

3. 芋川氏館の性格

発掘調査で判明した北信地方の館跡は決して多くはないが、これらをもとにした市川隆之氏の研究によれば、主郭の規模によって3種があるという。高槻氏館跡（中野市）や栗田城（長野市栗田氏館）などの方1町規模のもの、石川県内黒崎高地の方形屋敷地（市川1997）、飯山市長者清水遺跡（高橋・望月他1985）、同市大倉崎遺跡（高橋・常盤井・高沢1989）などの方半町規模の館と30m規模のものの3種である。これらは14世紀から15世紀代にかけてまず方半町の館が出現し、次いで15世紀後半には方1町（100m）と30m規模のものに分化して、

半町規模（50m）はなくなるという（市川1997）。氏は館の中心建物の敷地（主郭）規模と堀が一重か、二重かなど多方面からの分析を加えている。方1町規模のものは氏の指摘のとおり有力国人層で文献に登場する有力御家人層の鉢跡がこれに含まれる。また、大倉崎館跡は千曲川河岸にあり、浸食によって崩壊していることを考えれば方半町規模に含めるべきか検討が必要であるが、出現時期については課題が残る。このことは飯山地方の館跡についての松沢芳宏氏の論考についてもいえることである（松沢1993）。年代決定の根拠となる在地生産の土器類についての基礎研究が不十分であることに起因する。

ともあれ、市川氏の研究によれば芋川氏館は半町規模の主郭を持つ館で、高梨氏や栗田氏など有力国人層より下位の国人層であったことになるが、文献に登場する国人層の館としては規模が小さい。当初は有力国人層に次ぐ中小国人層であったが、甲越の戦領から、芋川の地が越後との国境と交通上の要地にあったところから、武出・上杉両氏から重視される中で文献に見るよう勢力を伸長し、森長可に反乱を企てる一揆の指導者になるまでになったものであると考えられる。

しかし、出土品で見る限り芋川氏は館規模以上の在地領主であったことをうかがわせる。茶臼と風炉である。これらは館主が茶をたしなんでいたことを示し、中世では地方の有力国人層や寺院のみの風習といわれる。青白磁などの輸入陶磁器以上に茶臼や風炉は有力国人層の威儀財である（水澤1999・2001）。信濃の館跡で見た場合にも、風炉は栗田城、飯山市大倉崎館跡（高橋・常盤井・高沢1989）と本例のみであり、茶臼は佐久市大井城跡（佐々木ほか1986）、栗田城、大倉崎館跡、牟礼村矢筒城館跡（米山・矢野1981）など決して多くはない。特に二重に造作された挽手孔を持つ茶臼の上臼はきわめて丁寧な作りである。風炉もまた雲形文を配したものである。このほか、「松と波文」を刺した石硯もまた威儀財であろう。漆器類や陶磁器類・銭貨に加えて小判もまた芋川氏が館の規模で示される以上の有力国人層であったことを示している。これらの遺物が館放棄時に廃棄されたという前提に立てば館構築時には有力国人層の次に位置する領主層であった芋川氏が甲越の戦の中でたくましく勢力を伸ばしたことを考古資料は示しているのである。

堀内出土品のうち注目されるものに、多量の手斧による削り屑と薄板ならびに桜皮がある。前者は建築用材の加工がこの地でおこなわれたことを、後者は曲物の製作があったことをそれぞれ示している。石川条里遺跡（市川1997）や辰野町堀の内店舗跡（赤沼1995）では館内で鍛冶がおこなわれていたが、芋川氏館でも曲物生産が盛んであったらしい。国人層の館内ではこうした手工業生産があったことを示すものとして興味がつきない。

4. 隘子堀とその意義

隙子堀は城郭を囲う堀底に障壁・段差・竪穴（坑）などの障害構造物を設けた堀をいう。北条氏長の「兵法集鑑」（1645）や山鹿素行「兵法神武雄備集」（1642）など多くの軍学書に「堀隙子」・「隙子堀」と記載され、小田原の後北条氏の城郭を代表するものとして古来よりいわれてきた。しかし、多くの城館の堀の発掘調査例が増加するに伴い、隙子堀が多様な構造を持ち、後北条氏の領国内にとどまらず、広く全国に分布することが明らかにされつつある（中世城郭研究会1998・1999）。すなわち、隙子堀は後北条氏の領国である関東・伊豆・駿河の東半分にあり、16世紀前期を初源として16世紀中期以降に多く構築される。しかし、領国内の城館であっても、すべてに採用されているものではなく、持たない城館もある。また、後北条氏の領国以外では東国地方から中国地方まで、東北地方では米沢市と仙台市に多く見られ、織田政権系の城郭、例えば大坂城や川上二条城などにも見られ、構築年代も15世紀代から16世紀代にわたりバラツキがあるという（池田1998・1999）。

隙子堀は形態的には(A)堀底に堀の壁と平行に隙壁を築く、(B)堀の壁と直角に障壁を築くか、(A)と(B)を組み合わせる(C)があり、水堀・空堀に限定されない（池田1998・1999）。

芋川氏館跡の障子堀はすでに明らかにしたとおり、堀の壁に直角に障壁（障壁土坑）を設けたもので、池田氏分類のⅣにあたり、長野県内で初めて検出されたものである。県内の城館の堀の発掘調査は、本例のように全面調査に及ぶことが少なく、多くが断面観察用のトレンチ調査に終わっている。ある程度の面的調査を実施した例は皆見にふれる限り10指に満たない。したがって、県内の城館に本例のような障子堀採用の堀がないと断言することはもとより予計であろう。障子堀が後北条氏の城館以外に採用されている以上、今後の県内の城館調査は問題意識を持って望めば、障子堀の発見例は増加するであろうが、そう多くはないであろう。いずれにしても、障子堀採用の直接的契機は城館の防御施設を高めることにあるにしても、情報入手の方法や経路など中世史研究の新たな問題提起がなされたとすることができる。芋川氏が中世末期において障子堀を採用した背景には、大塔合戦前後の信濃国人層の台頭と深く結びつくであろうし、直接的には甲越の戦に巻き込まれてゆく信濃国人層のひとつの断面として見ることも可能であろう。高梨氏館跡に見られる土壘の改築（中島1993）もまたこのことを示すものであろう。芋川氏館跡の構築時期は再三述べたとおり、出土遺物で見る限り14世紀末を上限としそれ以降となる。しかし、この年代は芋川氏の存在時期を間接的に暗示するものであっても館跡の構築時期を示すものとはならない。また高梨氏館に示されるように、当初の館の防御機能を高めるべく箱堀で囲まれた芋川氏館を、のちにさらに防御を高めるために、堀底に障壁土坑を追加工事したとも考えられない。主郭・上屋・土蔵などが計画的に一体化されており、また調査所見からも追加工事の痕跡が認められない以上、構築当初から計画的に障子堀を意図した館構築がなされたと考えることがごく自然と思われる。だとするならば、北信地方の軍事的緊張が高まる応永11年（1404）の細川による「下芋川の要害」陥落以降であろうが、障子堀を持つ多くの城館が16世紀に入って構築されているという全国的傾向を勘案するならば、北信地方が戦国的様相を深める永正年間（1504～20）ということになる。永正4年（1507）越後で長尾為景が前守護上杉房能を松之山で滅ぼしたことに関連を発する永正の反乱に、高梨政盛は長尾氏の先鋒として、北信の泉（飯山市）、市河（下水内郡栄村）、烏津（長野市）氏らとともに越後に出兵し、上杉方と争った。恐らく芋川氏も信州党として高梨氏配下のもとに出兵したことが予想される。高梨氏はこれ以降、中野市に居（高梨氏館跡）を構え本格的に領国經營に乗り出しが、更級郡坂城町に本拠を置く村上氏との対立が続き、北信の国人層は高梨党と村上党に分かれて争乱が続くことになる（湯本1987）。芋川氏は恐らく高梨氏党に属し越後とも関係を深めていたものと思われるが史料上の根拠はない。しかし、のちに芋川氏が武田・上杉両氏に戦略上の要地に本貫を持つがゆえに重用されているところを見る限り、この頃にはすでに高梨党の有力武将として勢力を固めつつあったと見てよく、この頃、防御施設を固めた館を構築したと考えるのが妥当であろう。背後の山頂に詰めの城として鼻見城が築かれたのもこの頃であろう。

問題は先行する館がどこにあったかということにある。堀出土の陶器類の大半は14・15世紀代のものである。これらは購入当初から芋川氏の所持品と考えた方が自然で、応永11年（1404）細川滋忠によって攻略された下芋川の要害を若宮城とし、この主が芋川氏であったとする小林・矢野氏の説（小林・矢野1980）は十分考えられる。だとするならば、前身の館が若宮城に近い場所にあったと考えてよいが比定地は不明である。

最後に出上品から越後との関係についてふれておく。いうまでもなく、芋川の地は越後との玄関口にあたり交通の要地であったから、越後との関係は深かったとみることはごく自然である。いわんや主家筋にあたる高梨氏が越後の守護代長尾氏と関係深く、越後領内に多くの所領を持っていた（湯本1986）ことを考えれば当然のことといわなければならない。能登産の珠洲焼は東北信地方に広く見られるが、特に北信に多い背景には越後と北信の国人層との関係があったからにはほかならない。越後に信州系の内耳土鍋が出上することも彼我の関係があったからである。しかし、在地産の土師器小皿（カワラケ）は、越後では手づくね成形の京風であって、東国風のロクロ成形は少なく（益沢正史・水澤2003）北信では逆である（中島1993）。芋川氏館跡でも出土点数は少ないが、

ロクロ成形のみである。これらのこととは北信の国人層の基本は東国的である中で越後との関係が保たれていたと見るべきものと思われる。

引用・参考文献

赤沼英男 1995「鉄闇造遺物の組成からみた堀ノ内跡における鉄器製作とその使用」『堀の内居館跡』辰野町教育委員会

池田光雄 1996「障子堀について」「テーマ「障子堀」について」第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 中世城郭研究会

池田光雄「障子堀について(発表要旨)」1999 中世城郭研究 第13号 中世城郭研究会

市川隆之 1994「栗田城出土の遺物と若干の考察」「栗田城跡(2)」長野市教育委員会

市川隆之 1997「中世の遺構と遺物」「中央自動車道長野線埋文化財発掘調査報告書15—長野市内その3—石川条里遺跡 第1分冊」(長野県埋文化財センター)

今佐今朝人・百瀬忠幸 1984「鎌山遺跡」三水村遺跡発掘調査報告書 第1集 三水村教育委員会

大久保邦彦 1979「三水村上赤塙遺跡出土縄文中期中葉の深鉢型土器」『研究ノート3 地理研究の動向』千曲川古代文化研究所

小沼英雄・馬場俊二 1980「地勢」「三水村誌」三水村

河西克造 1994「栗田城の地図による復元」「栗田城跡(2)」長野市教育委員会

黒岩 隆 1993「市内の遺跡と遺物—縄文時代・中期」「飯山市史」歴史編(上) 飯山市編纂委員会

郷道哲章・白田武正 1983「長野県の中世城跡一分布調査報告書一」長野県教育委員会

小林計一郎・矢野恒雄 1980「上代・中世」「近世」「三水村誌」三水村

小林 孝 1976「縄文時代」「上水内郡誌・歴史編」上水内郡誌刊行会

小林 孝「遺跡探訪(4) 上水内郡三水村赤塙遺跡」「長野」第29号 長野歴史研究会

小林秀夫 1982「御社宮司遺跡の諸問題」「長野県中央自動車道埋文化財発掘調査報告書」茅野市その5 長野県教育委員会

小山丈夫 2000「戦国時代の大田莊」「豊野町の歴史」豊野町誌刊行委員会

小柳義男 1983「上水内郡三水村遺跡出土の遺物—縄文時代草創期の土器を中心として」「しなのろじい」No200、千曲川水系古代文化研究所

小柳義男 1984「上水内郡三水村岩袋遺跡出土の珠洲系陶器」「埋文雜記帳」長野県埋文化財センター(三水村教育委員会「三水村の文化財」1992に再録)

小柳義男・永野裕雄・小林秀雄 1997「上赤塙遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址—」三水村教育委員会

佐々木宗昭・小山佑夫・羽田卓也 1986「中世の遺物」「大井城跡(黒岩城跡)」佐久市教育委員会

筆澤正史・水澤幸一 2001「伝至徳寺跡の遺物標柱—中世前半を中心として」「上越市史研究」第6号 上越市



調査参加者1(第1次調査)



調査参加者2(第2次調査)

- 鶴柄俊夫 1986 「中世信濃における陶磁器の产地構成と流通」『信濃』Ⅲ・38-4 信濃史学会
- 高橋 桂・望月静雄他 1985 「小沼湯滷バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 上野遺跡・大倉崎遺跡」飯山市教育委員会
- 高橋 桂・常盤井智行・高沢秀徳 1989 「大倉崎跡の調査」『小沼湯滷バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』飯山市教育委員会
- 田川幸生 1981 「まとめ」『伊勢宮』山ノ内町教育委員会
- 中世城郭研究会・第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 1998 「テーマ「障子堀」について」
- 中世城郭研究会 1999 『中世城郭研究』第13号 中世城郭研究会
- 寺内隆夫 1991 「長野県上水内郡三木村上赤塙遺跡出土の純文中期土器について」『長野県考古学会誌61-62』長野県考古学会
- 戸根与八郎 2003 「池田遺跡」『上越市史叢書8 考古一中・近世資料一』上越市
- 中島庄一 1993 「成果と課題」『高梨氏領跡一発掘調査報告書一』中野市教育委員会
- 服部敬史 1997・1998 「内耳土器の研究」上・下『土曜考古』21・22
- 原 明芳 1991 「遺物」『栗田城跡・下字木遺跡・三輪遺跡③』長野市教育委員会
- 広瀬忠好 1975 「長野県上水内郡三木村今田遺跡の有孔鉢付土器」『長野県考古学会誌21』長野県考古学会
- 福島 水 1995 「堀と遺物」『堀ノ内居館跡』辰野町教育委員会
- 松沢芳宏 1993 「中世の遺跡と伝統的建造物—城館集落遺跡」『飯山市史』歴史編山飯山市誌編纂委員会
- 水澤幸一 1999 「瓦器 その城館的なるもの—北東日本の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2001 「伝至徳寺跡出土の威信財—瓦器と漆器」『上越市史研究』第7号 上越市
- 水澤教子 2000 「成果と課題 中期後葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴市内その3—更埴条理遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・座河原遺跡)一概文時代編一本文』長野県埋蔵文化財センター
- 湯本軍一 1987 「宝町幕府政府の発展と信濃」「我國の争乱と信濃一応仁・文明崩の信譲」「長野県史」通史編第三巻中世二 長野県史刊行会
- 吉岡康鵬 1994 「中世須恵器の研究」古川弘文館
- 米山一政ほか 1981 「矢筒城跡」『長野県牛込村矢筒城跡遺跡発掘調査報告書』牛込村教育委員会

あとがき

村史跡芋川氏館跡の発掘調査の依頼を受けた時に正直困惑した。数年前に大病を患ったうえに還暦を過ぎ、体力に自信のなかった身であったし、上越市史の編纂事業にかかわり、週に数日高田へ行く約束となっていたからである。加えて中世史は専門外であり、城館の発掘経験は上田市の塙田城程度であったことと、低地性遺跡であること、また調査員に専門家がないことも躊躇させた。低地性遺跡の調査については、かつて長野県埋蔵文化財センターに調査部長として在籍した時に、石川条里や川田条里遺跡など長野県を代表する低地性遺跡の発掘調査の調査方法を含めて計画・立案から調査に至るまで経験していたので、土木面の安全管理者の常駐があれば何とか乗り切れる自信はあった。しかし、総合的に見て私ひとりで乗り切れるものではなく固辞したが、緊急のことでもあり、ほかに適任者もおらず、やむを得ず調査を担当することとなった。

このようにいわば素人集団による調査であったが、池田陸氏を調査主任とする村の文化財調査委員の諸氏、地元を中心として発掘作業の中核を担った作業員の皆さんや、安全管理者として重機を運転しながら安全面の管理を担当した待井毅氏には、共に蓬尾山からの雪まじりの寒風の中で泥と夏の日照りで乾いてコンクリート化した粘土に悪戦苦闘していただいた。感謝の言葉もない。

こうした努力が実って、長野県で初めてという障子堀の検出となった。今後の中世城郭研究に重要な一資料を提供し得たことは望外のことである。加えて、ともすると努力の割に成果が少ないと考えがちで、堀の全面調査をさけがちであった中で、これが根本的に間違いであるとの警告となった。

また今次調査で堀外の調査が部分的に終わったことは、湿地性で黒色粘質土の中での遺構検出が困難であったことにもよるが、反省点のひとつである。また花粉分析などの自然科学的な分析・樹種鑑定なども今後に残ってしまった。景観など環境復元上に必要と考え、資料採集をしてあるので今後分析する必要がある。また木製品の保存も早急におこなう必要があろう。

発掘調査から整理に至るまで多くの研究者に指導助言を受けた。また、地主で、一部地の借り上げなど様々な便を与えていただいた森見一氏をはじめ地元の皆さん、事務局や建設課など三水村役場、長野建設事務所、村松建設㈱の村松社長、協同測量社、ほおづき書籍㈱などの関係者に厚くお礼申し上げたい。

(笹澤 浩)

記号	基 本 層	記号	亞 土 層	記号	亞 土 層
1	耕作土				
2	褐色土 (鉄分集積層)				
3	黒色土	a	黒色上	e	砂礫多量まじり
		b	黄色・黄灰色粘土小ブロックまじり	f	黄色粘土小ブロック・砂礫少量まじり
		c	黄色粘土小ブロック・礫まじり	g	青灰色粘土大ブロックまじり
		d	砂礫少量まじり		
4	黒色粘質土	a	黒色粘質土	e	砂礫まじり
		b	有機物少量まじり	f	有機物少量・礫まじり
		c	有機物多量まじり (有機物層)	g	青灰色粘質土ブロックまじり
		d	有機物少量・砂礫まじり		
5	黒灰色粘質土	a	黒灰色粘質土	d	青灰色粘質土ブロックまじり
		b	有機物少量		
		c	有機物多量		
6	砂質土、砂礫上	a	黄褐色砂質土	e	青灰色砂礫土
		b	青灰色砂質土	f	有機物少量まじり黒色砂質土
		c	黑色砂質土	g	有機物多量まじり黒色砂質土
		d	黄褐色砂礫土		
7	砂、砂礫	a	黒色砂層	d	黄褐色砂礫層
		b	黄褐色砂層	e	青灰色砂礫層
		c	青灰色砂層		
8	礫 (パラス) 層	a	青灰色礫層		
		b	黄褐色礫層		
9	粘土 (粘質土)	a	黄褐色粘質土		
		b	青灰色粘質土		
		c	青灰色砂質粘土		
10	麻土				

表1 土層分類表 基本層 (1~10) と亞上層 (a~g) の組み合わせで使用

△	曲物・ 薄板・ 折敷	下敷・整 作・柄杓 ・機器・ 建物材	漆器	杭	削り 屑	種 子					自 然 木	計		
						モモ	クルミ	クリ	ウリ	マツ	フジ			
S K01					7	1						4	12	
S K02	4	4			3	1						4	16	
S K03	4	4	2	3	20		3			1	1	63	101	
S X01					5							2	7	
S K04													0	
S K05				1	3							4	8	
S K06													0	
S K07					1								1	
S K08												2	2	
S K09												1	1	
S K10	1		1		3							1	5	
S K11	1	2	1	3	18		1					50	72	
S K12	39	9	6	7	67	13	18(1)	3	4	1		46	213	
S X04	8	1	1		190	1	5	1				27	234	
S K13	8		1		195		2(1)					13	214	
S K14	4				19	1	1				1	5	31	
S X05	3		1	1	3		1	1			1	1	12	
S K15					15		4	2					21	
S K16	12		1	1	10							14	38	
S K17	11				4	14		2	1		1	30	55	
S K18	7				4							4	15	
S X06					4								4	
S K19	3												0	
計	95		20	15	24	573	17	37	8	4	5	1	271	1,062

表2 植物質遺物

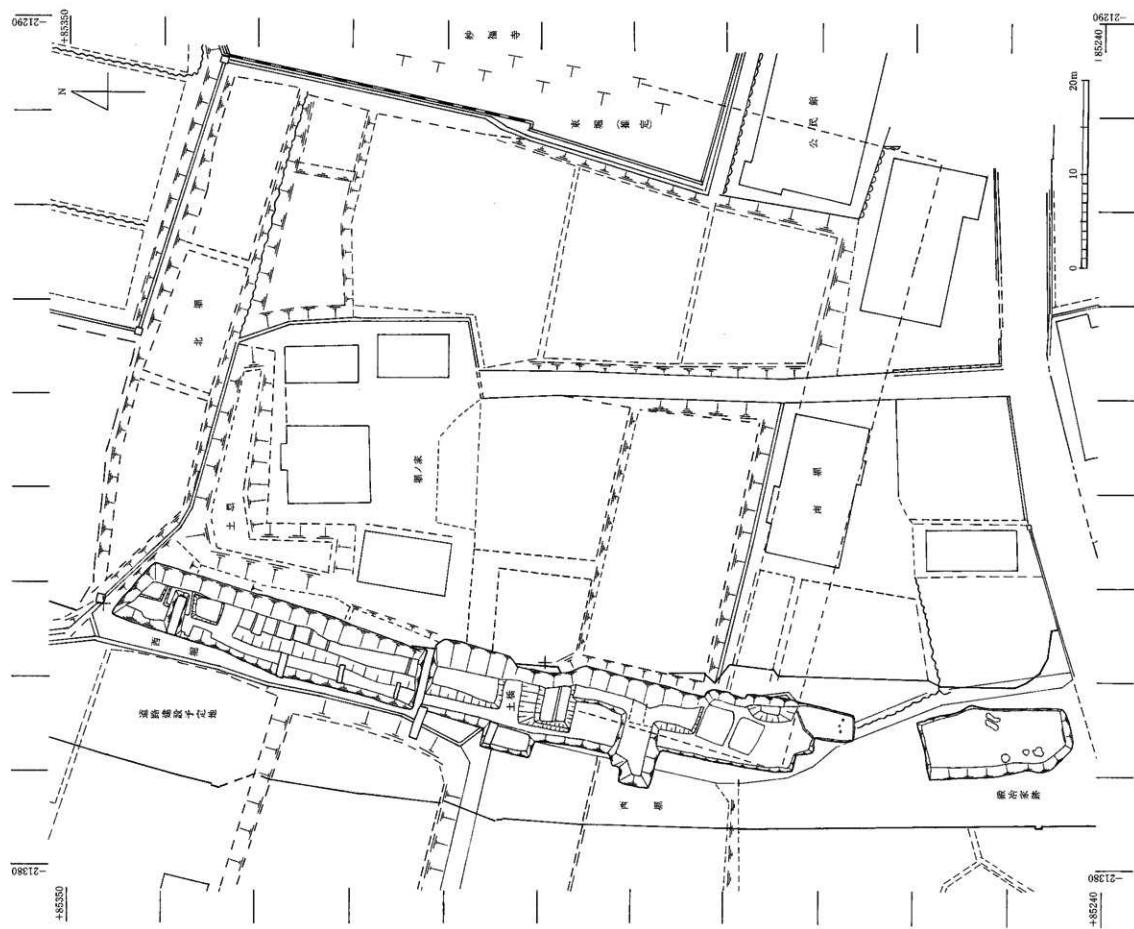
岡番号	分類	出土地点	口 径	底 径	器 高	色 調	備 考		
							1/2存	粘土質	
1	A	SK12	10.8	5.4	2.5	黄灰~青灰色	1/2存	粘土質	
2	A	SK18	10.9	—	—	明褐色	1/4存		
3	A	AF34	8.0	—	—	タ	1/8存		
4	—	SK12	—	5.1	—	明黃白色	1/4存	石英など少量	
5	D	SK12	10.8	—	—	淡黃灰色	1/5存	粘土質	
6	E	SX05	10.5	5.3	2.4	暗褐色	1/4存	石英など少量	
7	B	SK12	10.3	—	—	黃灰色	1/6存		
8	B	SK12	9.0	—	—	タ	1/4存		
9	B	SK18	9.0	5.4	2.8	タ	1/8存		
10	B	SK14	8.9	4.6	2.1	淡茶褐色	1/5存		
11	B	SK12	8.2	5.4	2.4	棕褐色	1/5存		
12	B	SK12	8.4	6.7	1.8	茶灰色	1/6存		
13	—	SK12	—	—	7.6	明褐色	1/6存		
14	C	SK12	8.4	6.6	1.8	暗褐色	1/6存	油煙付着	
15	C	SX05	7.4	4.9	1.8	黃灰色	2/3存		
16	—	SK12	—	—	5.5	タ	1/3存		

表3 土器小皿

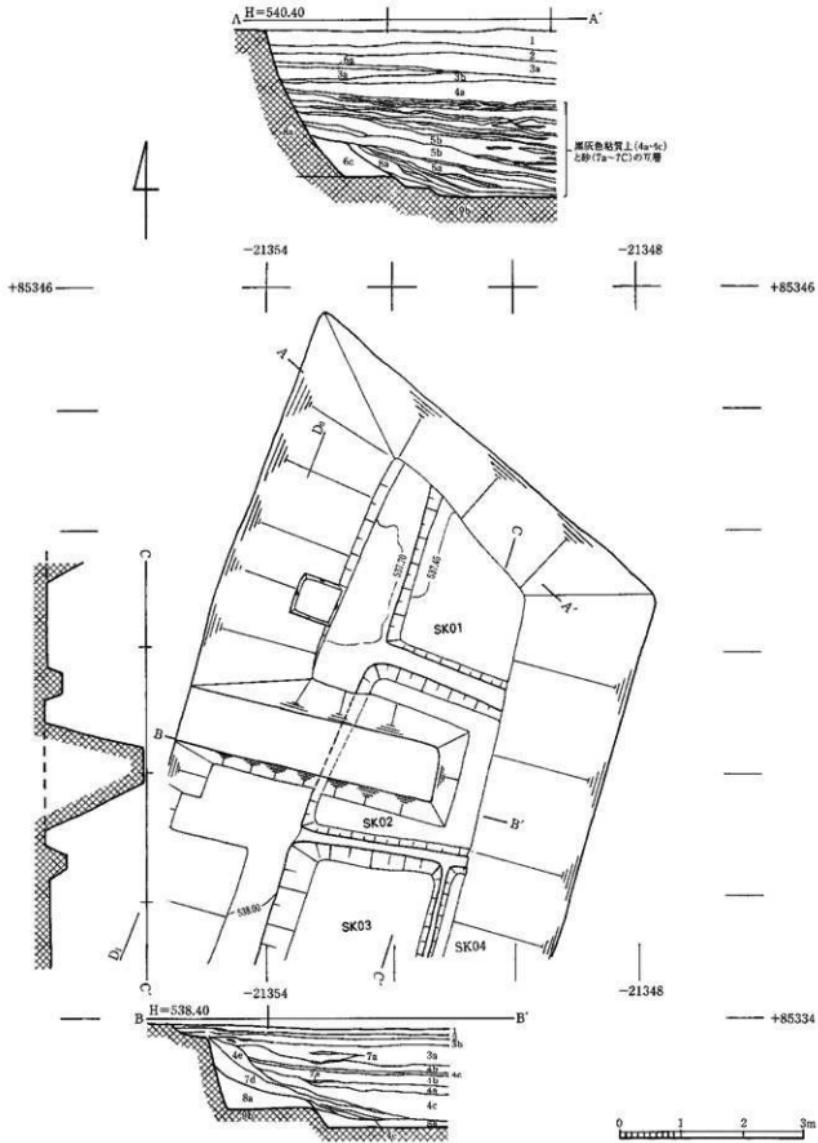
岡番号	器種	出土地		石材	口径	器高	底径	ふく み幅	心棒孔 形	寸り面 分画数	すり面 方向	備 考
		地點	層位									
1	茶臼上臼	SK12	5a	An多孔質	19.5	11.8	19.1	4.0	円	2.3	8	左 挽き手孔3段に造形 完成
2	茶臼下臼	SK13	5a	An			20.0			—	左	1/6存
3	粉挽下臼	SK12	4a	An	—	—	—	—	—	—	—	1/12存
9	粉挽上臼	SK12	5a	An	33.0	14.1		8.0	(円)	(7.0)	4	挽き手孔長方形 1/3存 球部深さ4.9cm
11	♦	SX07	石列	An	29.0	10.4		2.8	椿円	—	—	左 挽き手孔深さ3.0cm 1/4存 供給口有り
12	♦	SK12	5b	An	30.0	—		—	—	—	6	左 1/3存
13	♦	SK12	5b	An	32.2	—		—	—	—	—	1/5存
14	粉挽下臼	SX07	石列	An	33.2	12.2		2.5	円	4.0	6	左 1/2存 目綱かい SD02 5a An — 12.0 — 円 2.5 6 左 1/2存 目綱かい
15	♦	SD02	5a	An								
16	♦	SX06	4c	An	28.0	9.5		1.4	円	2.0	—	1/3存 自ほとんどすり減る
10	粉挽上臼	SX07	石列	An	41.8	11.4		7.0	—	—	8	面部深さ3.9cm
7	茶臼下臼	SD02	水路跡	An	23.0	17.6	36.0	8.0	円	3.0	—	1/2存
8	♦	SX07	5a	An	—	—		—	—	—	—	小片
17	石鉢	SX04	5a	An多孔質	35.0	13.6	24.5					1/8存 内面全面に煤付着
18	♦	SK16	5b	An	—	—	18.2					1/5存 片口
19	♦	SK12	5a	An多孔質	28.0	12.8	19.0					1/4存 片口
20	茶臼下臼	SK10	5a	An多			42.6					
21	石鉢	SX07	石列	An	—	—	30.0					1/4存
22	凹石	B区	—	An	11.4	—	—					1/2存 半面に煤付着
23	♦	SK12	5a	An	9.2	—	—					1/3存
24	不明	SK12	5a	An	—	—	—					小片 外面に溝(幅6mm)
25	茶臼上臼	SK12	5a	An	20.2	—	—					1/6存

表4 石製品一覧

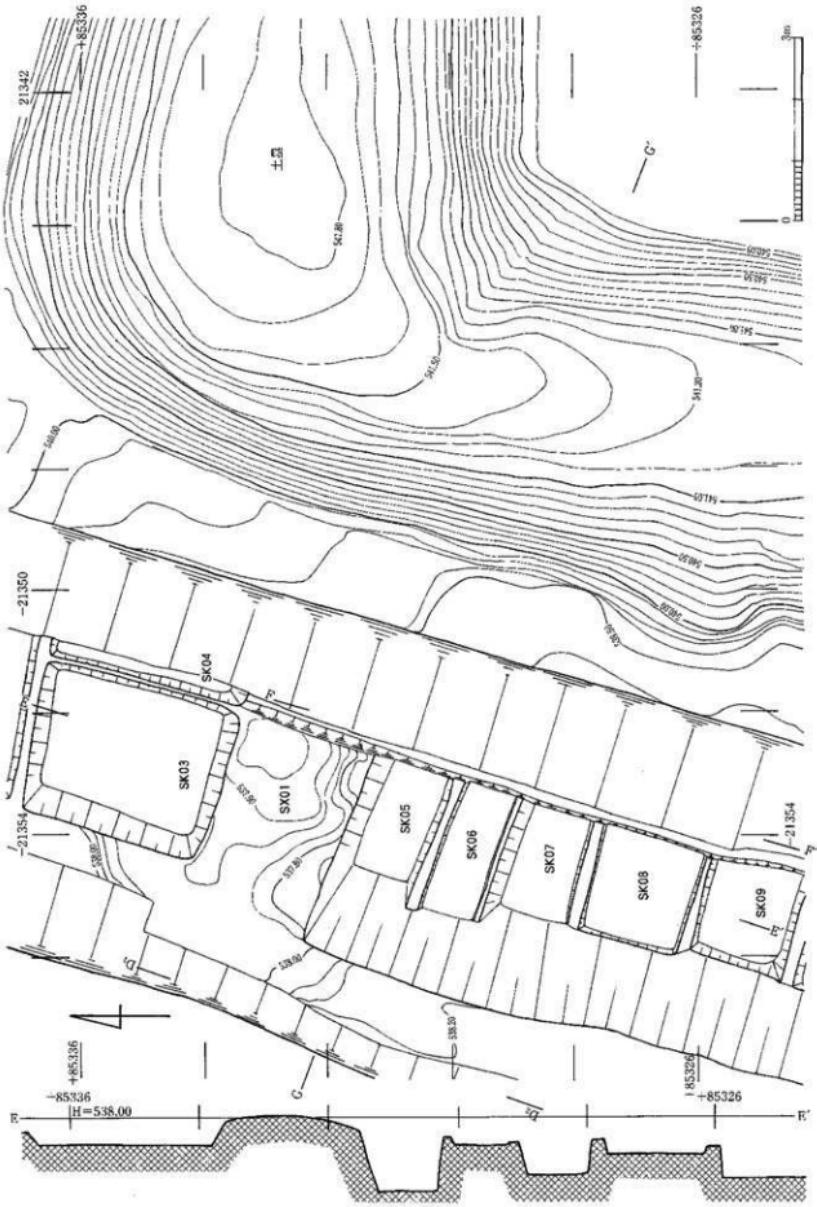
A n. = 安山岩



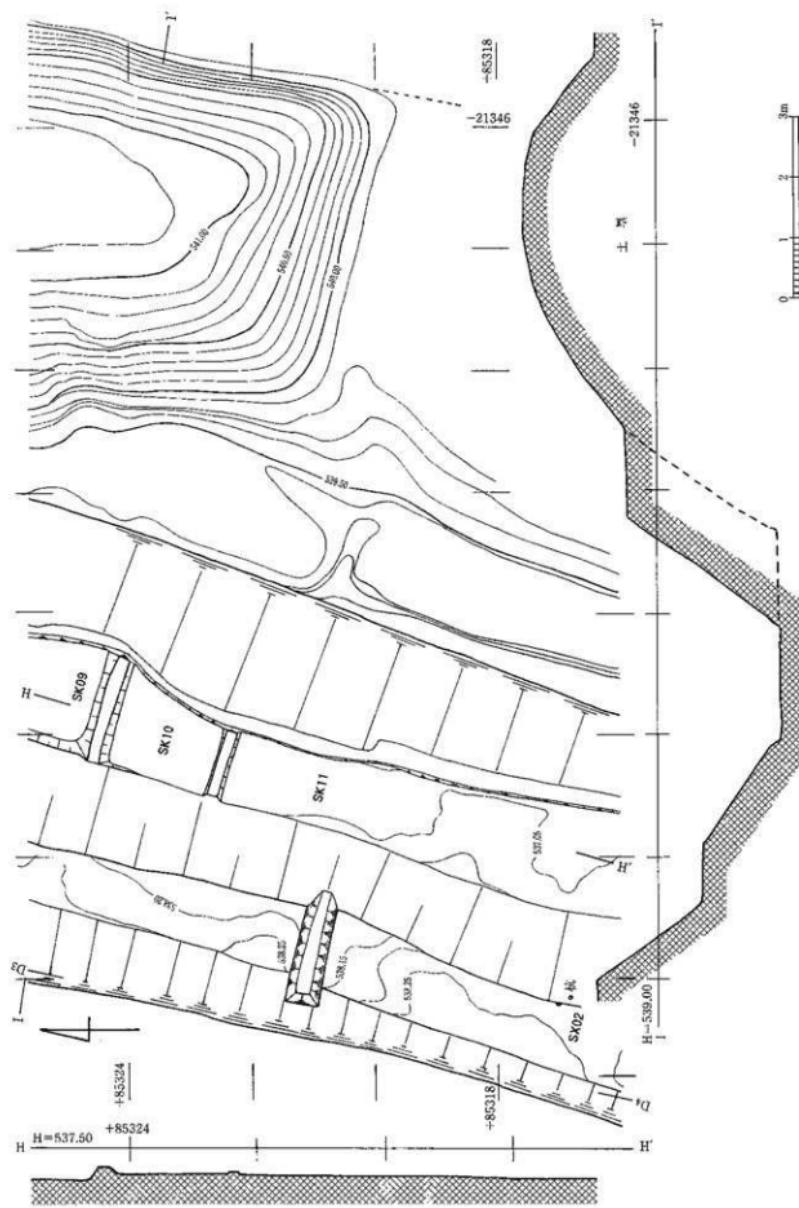
第6図 李川氏館跡発掘全図 (1:400)



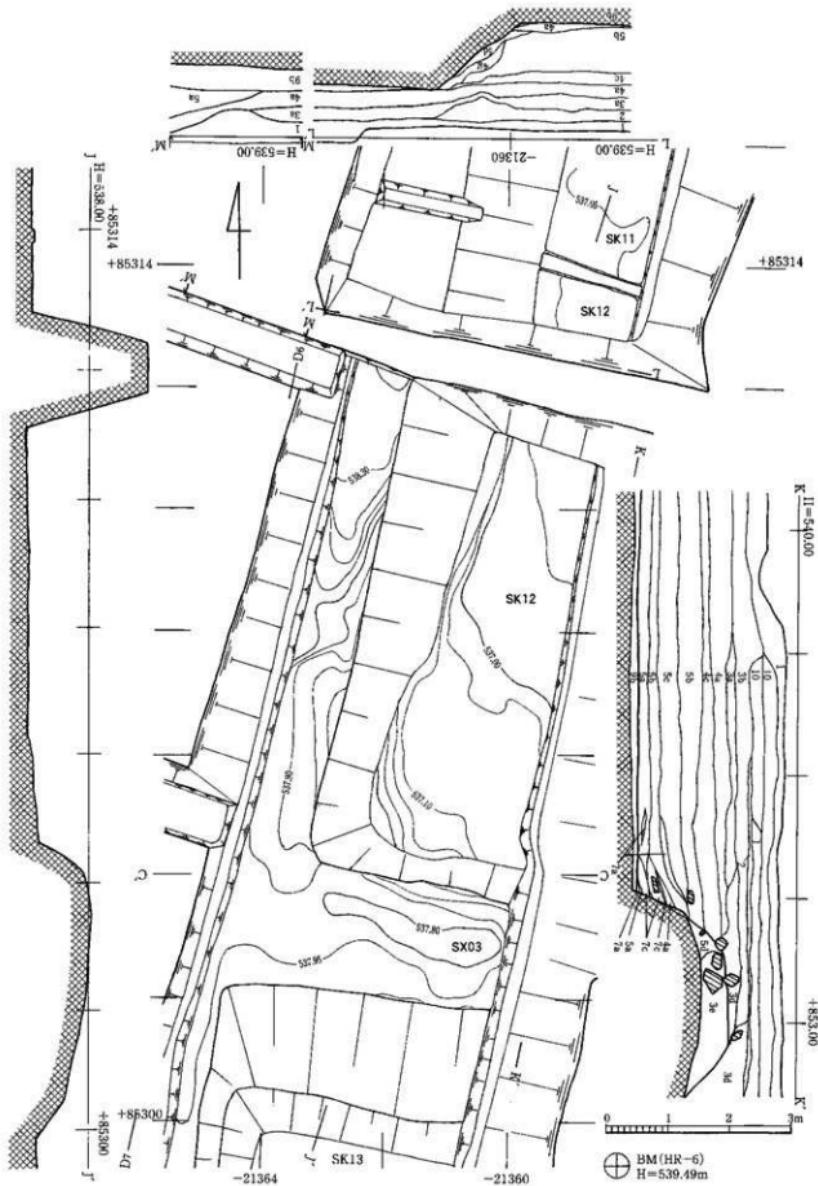
第7図 遺構図(1), 西堀 S D01(1) (1 : 80)



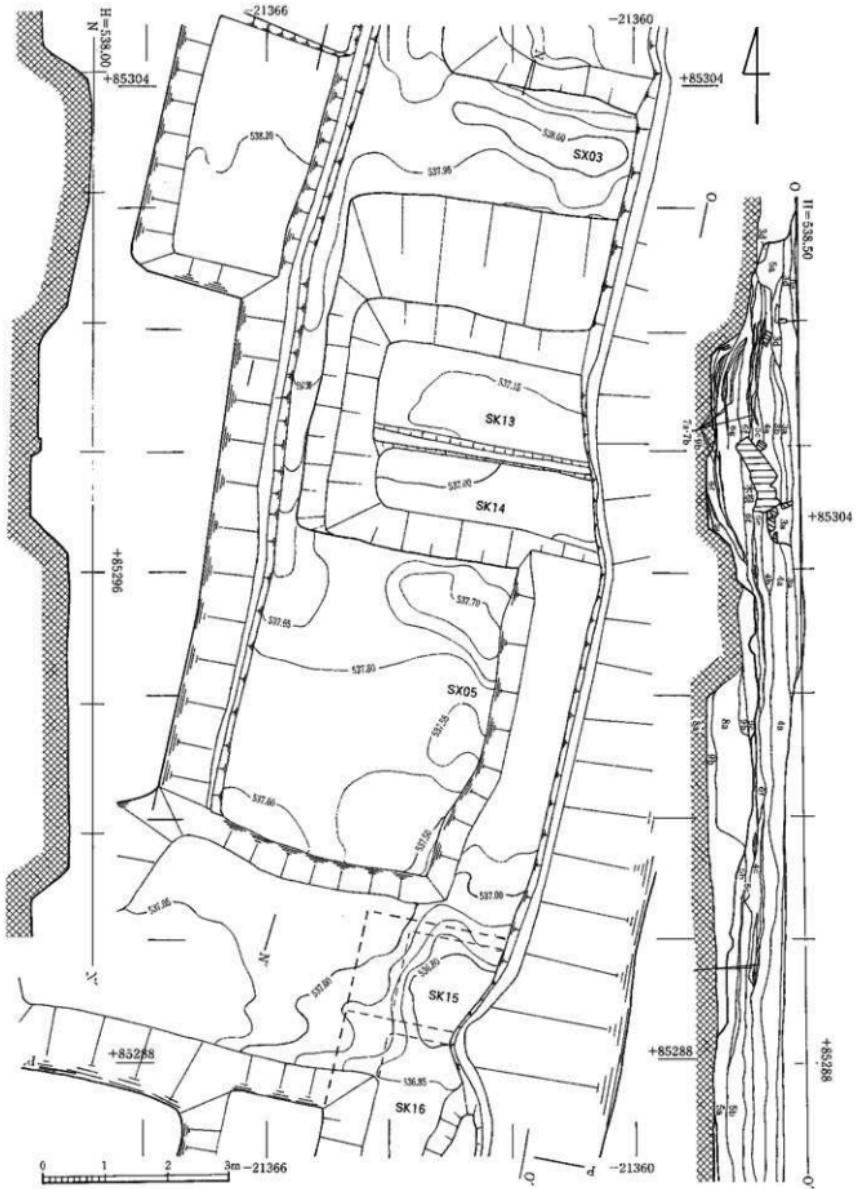
第8図 遺構図(2)、西船 S D01(2)・土壙(1) (1 : 80)



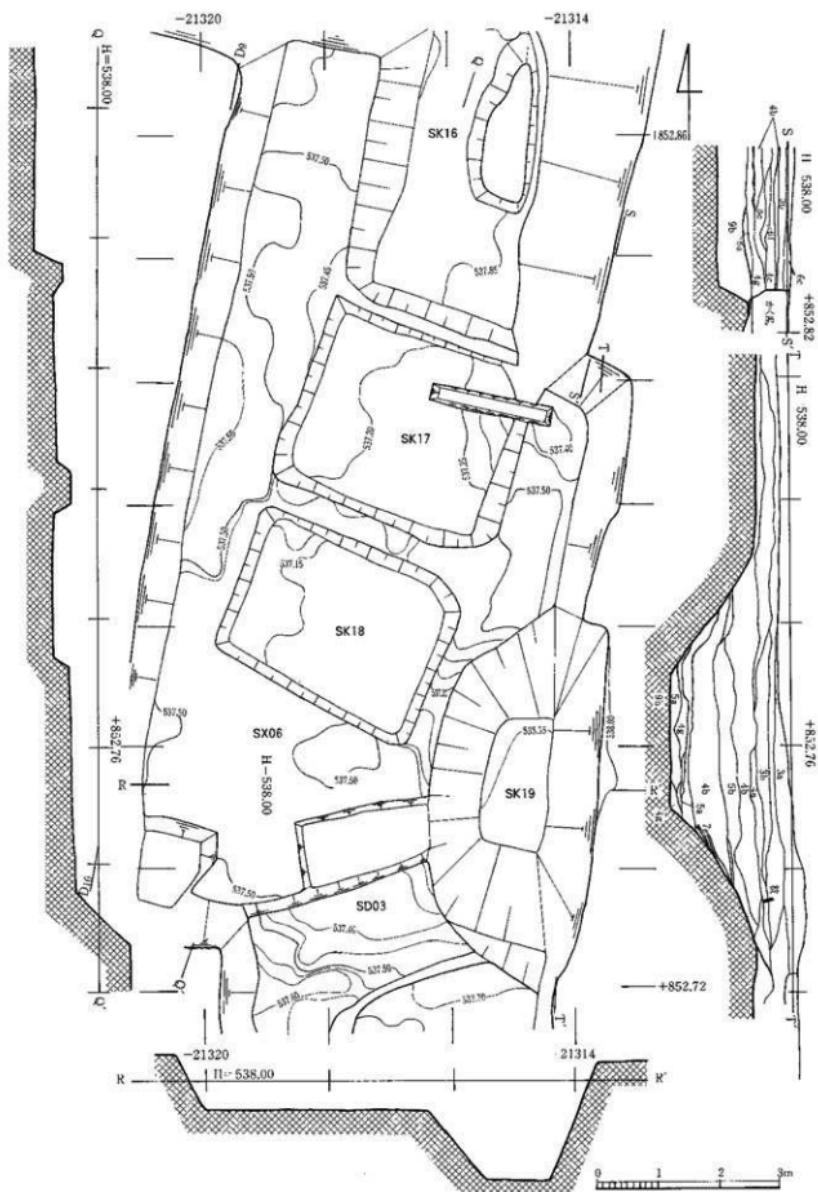
第9図 道構図(3), 西側 S D01(3)・土壌(2) (1 : 80)



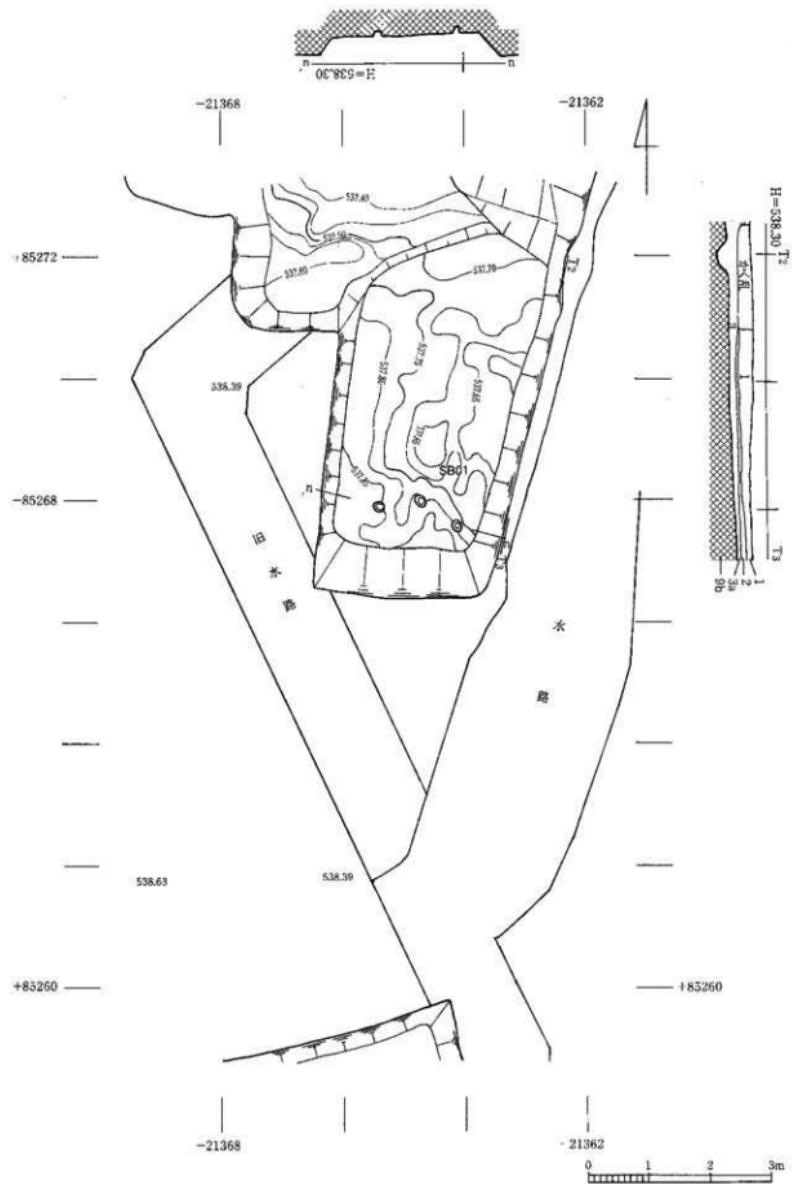
第10図 透構図(4), 西堀 S D01(4)・上堀 S X03 (1 : 80)

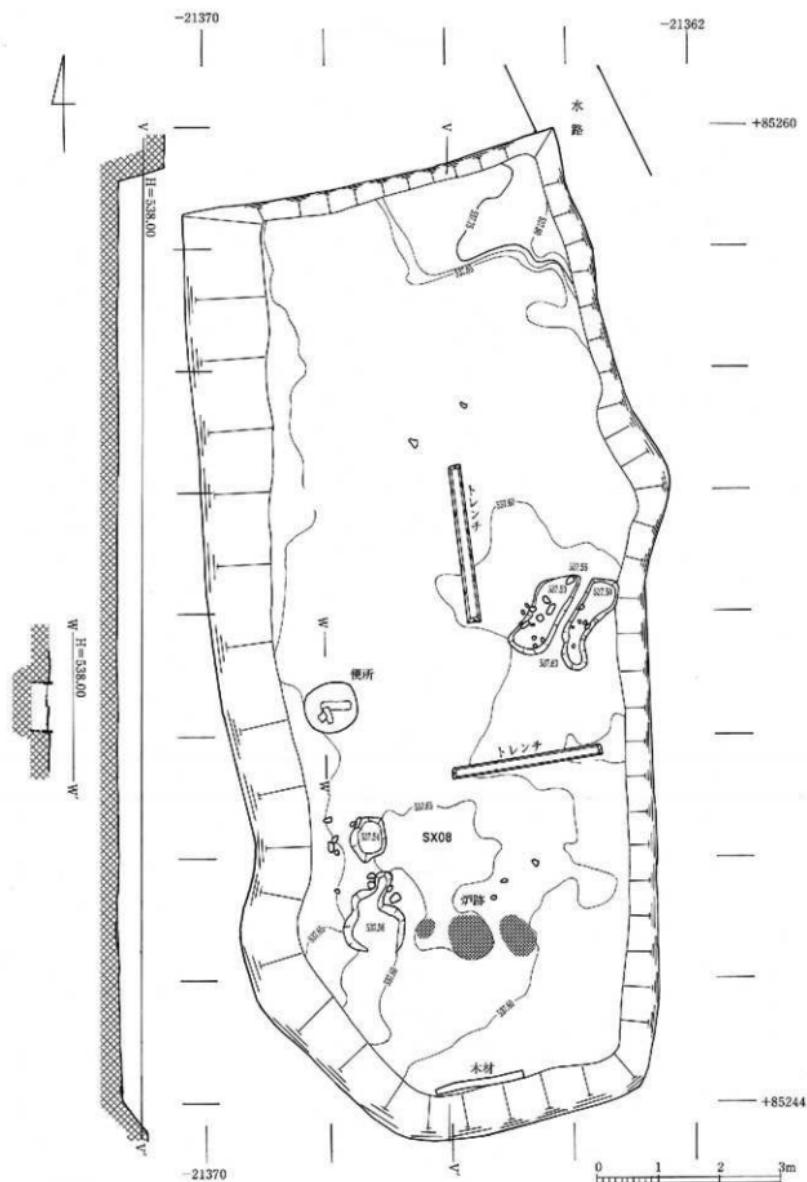


第11図 遺構図(5), 西堀 S D01(5) (1 : 80)

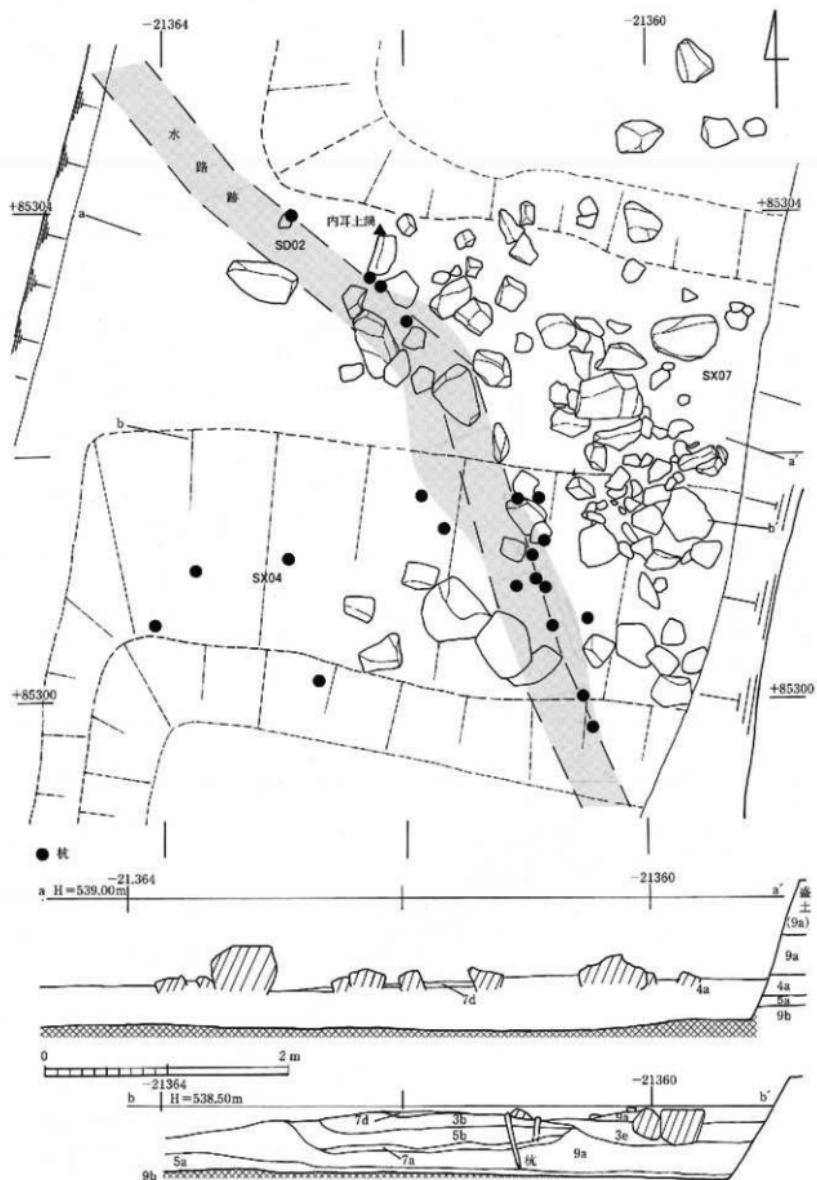


第12図 遺構図(6), 西堀 S D01(6)・南堀 S D04(1) (1 : 80)

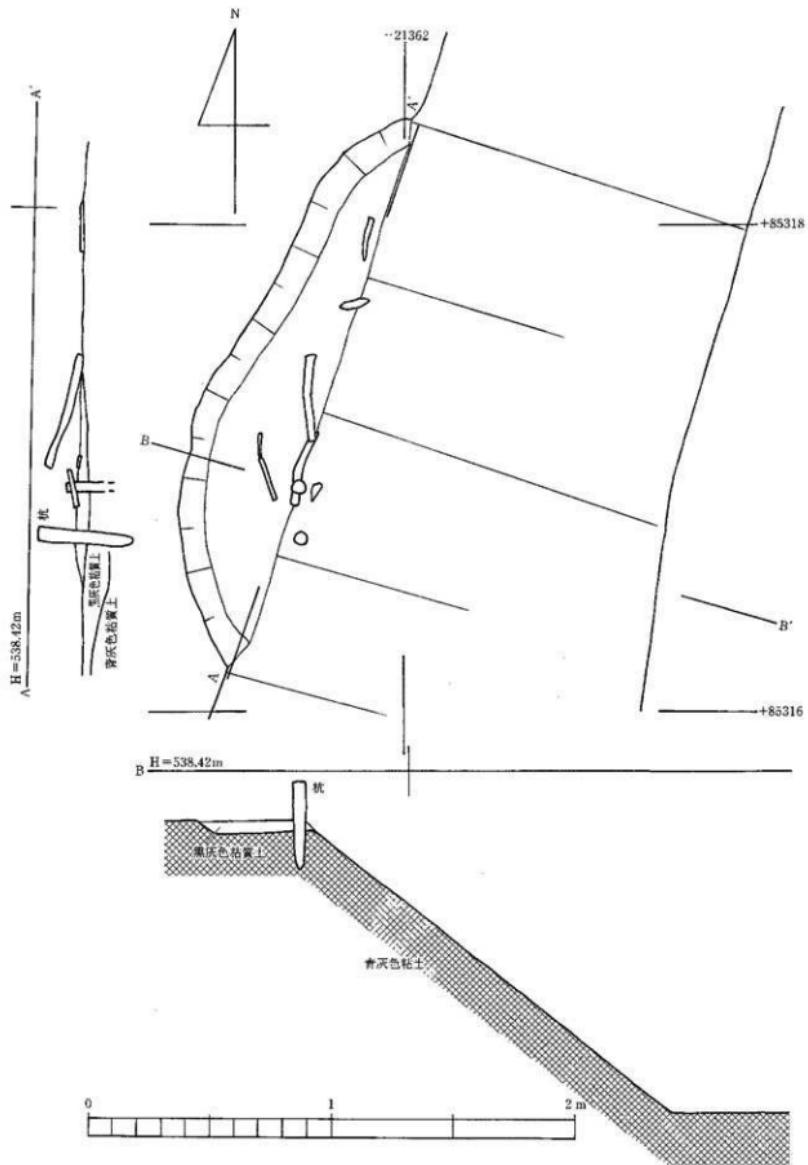




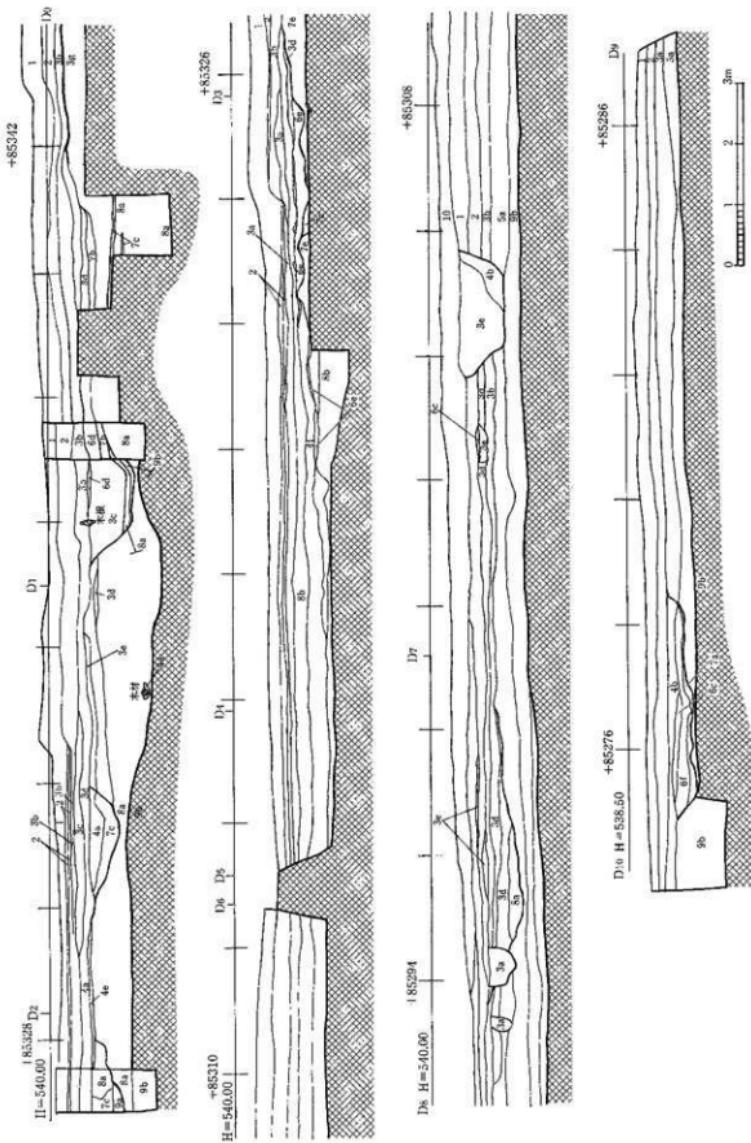
第14図 遺構図(8), 築治跡 SX08 (1:80)



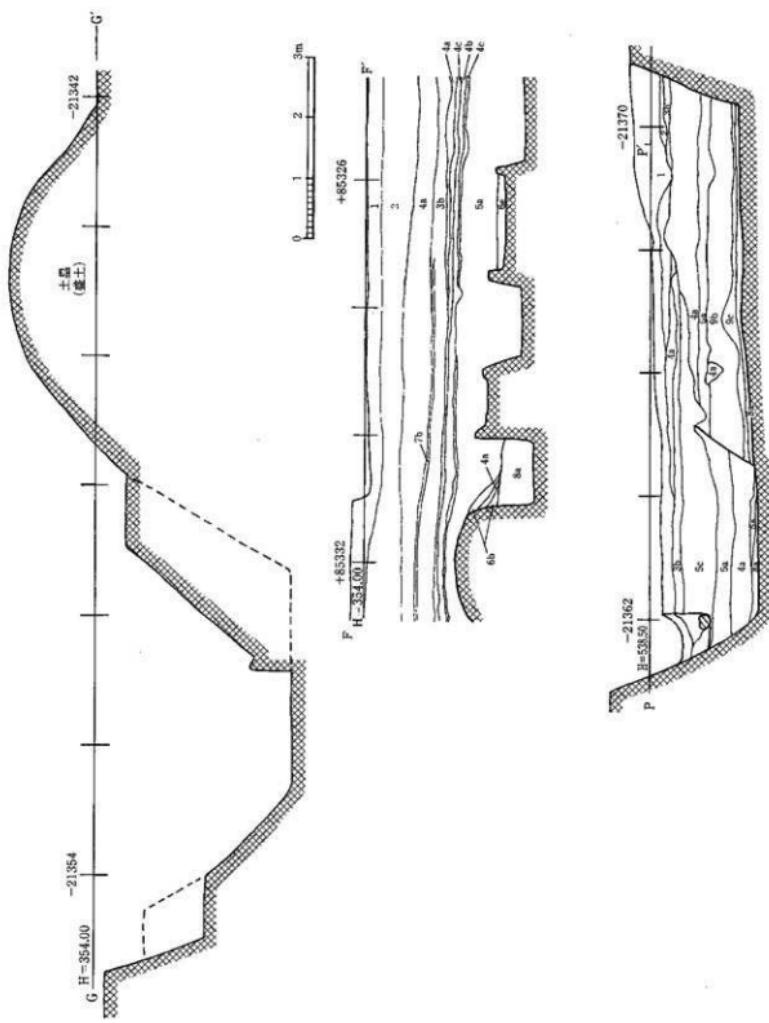
第15図 造構実測図(9), 列石 S X07・水路路 S D02, 杖列 S X04 (1 : 40)



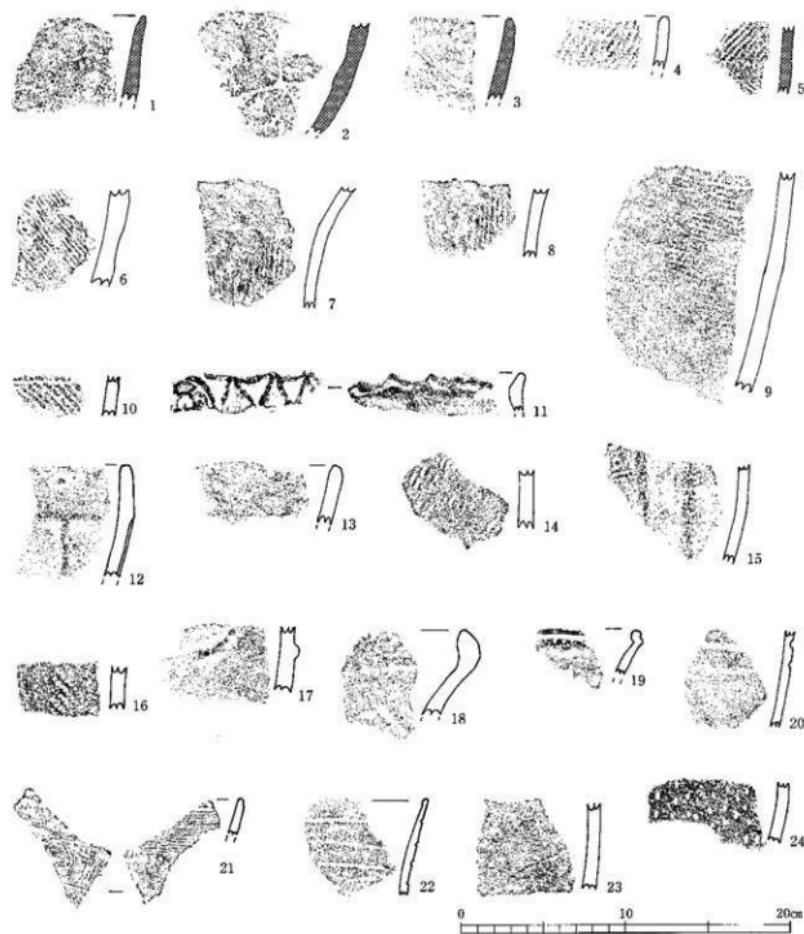
第16図 遺構実測図⑩、西堀西岸の杭列 S X 02 (1 : 20)



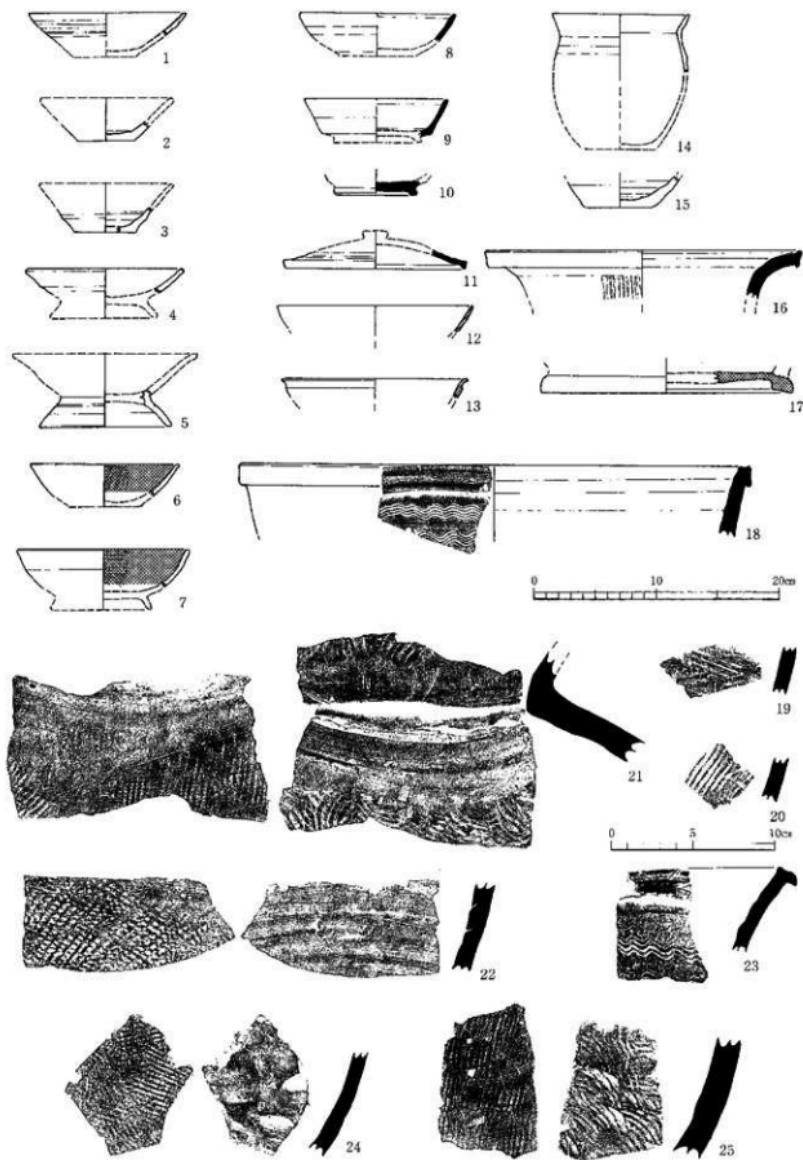
第17图 先掘区西壁土层图 D₁—D₄ (1 : 80)



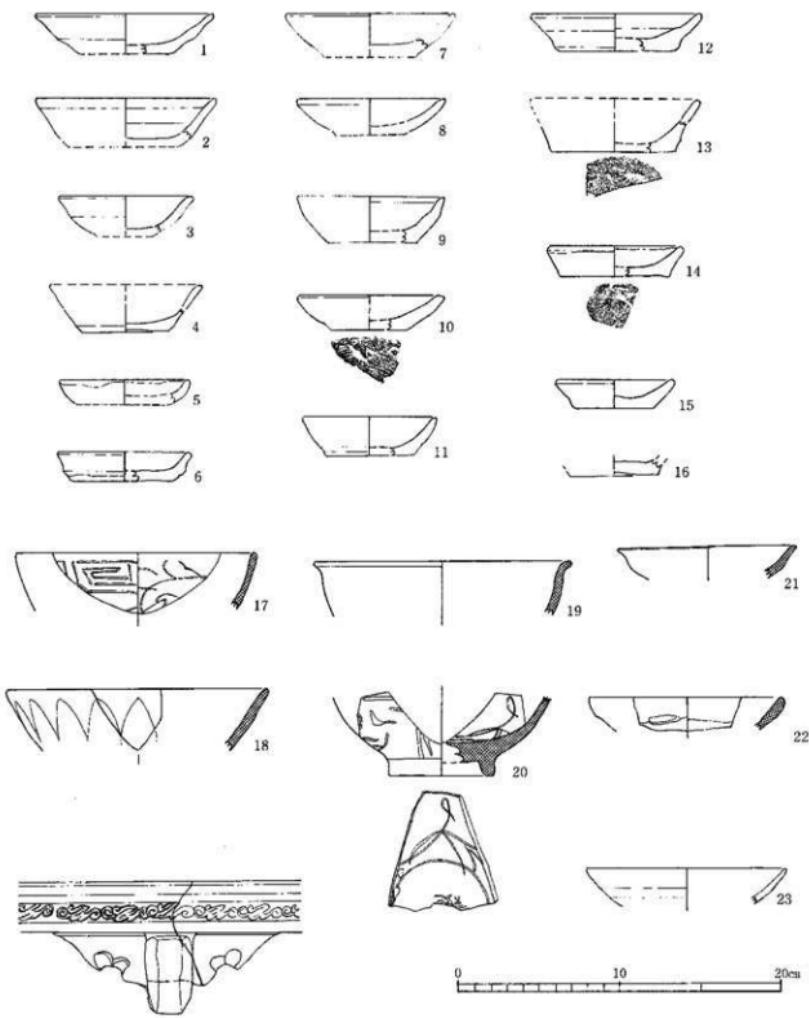
第18図 土壌・西堀横断図 $G - G'$, 土層図 $F - F'$, $P - P'$ (1 : 80)



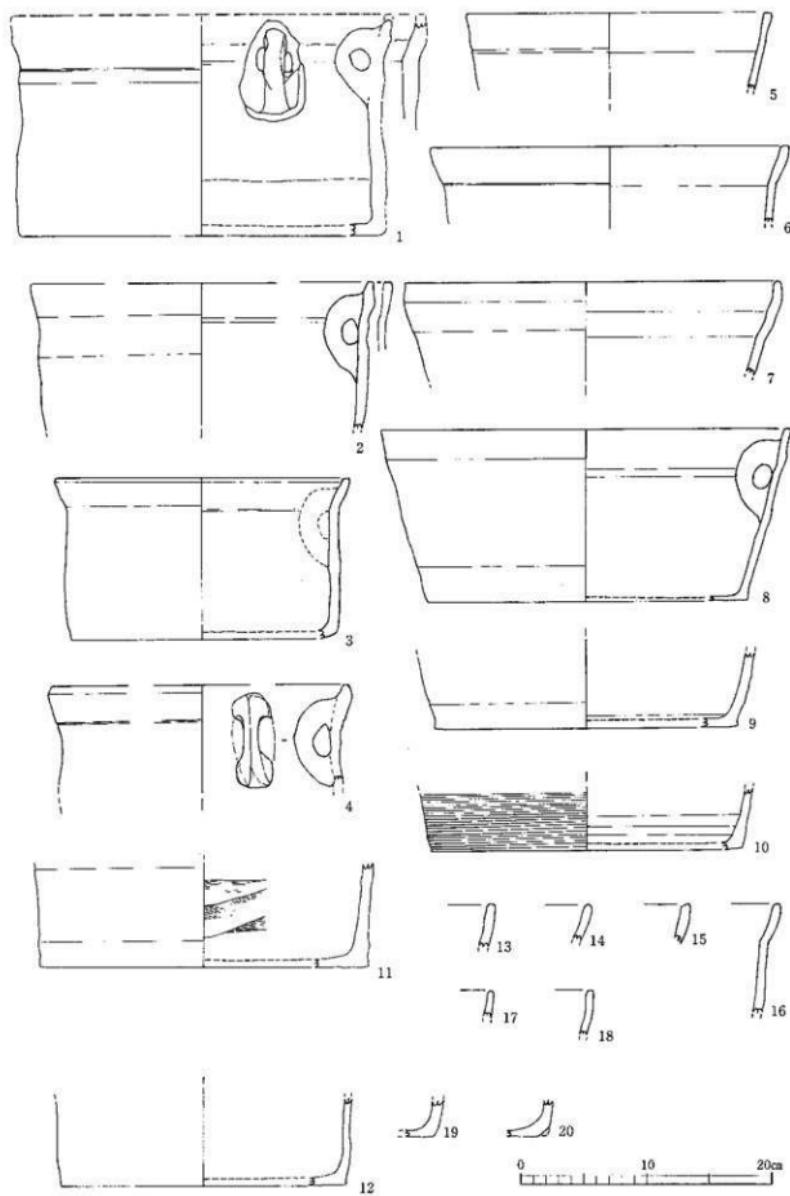
第19図 繩文土器 (1 : 3)



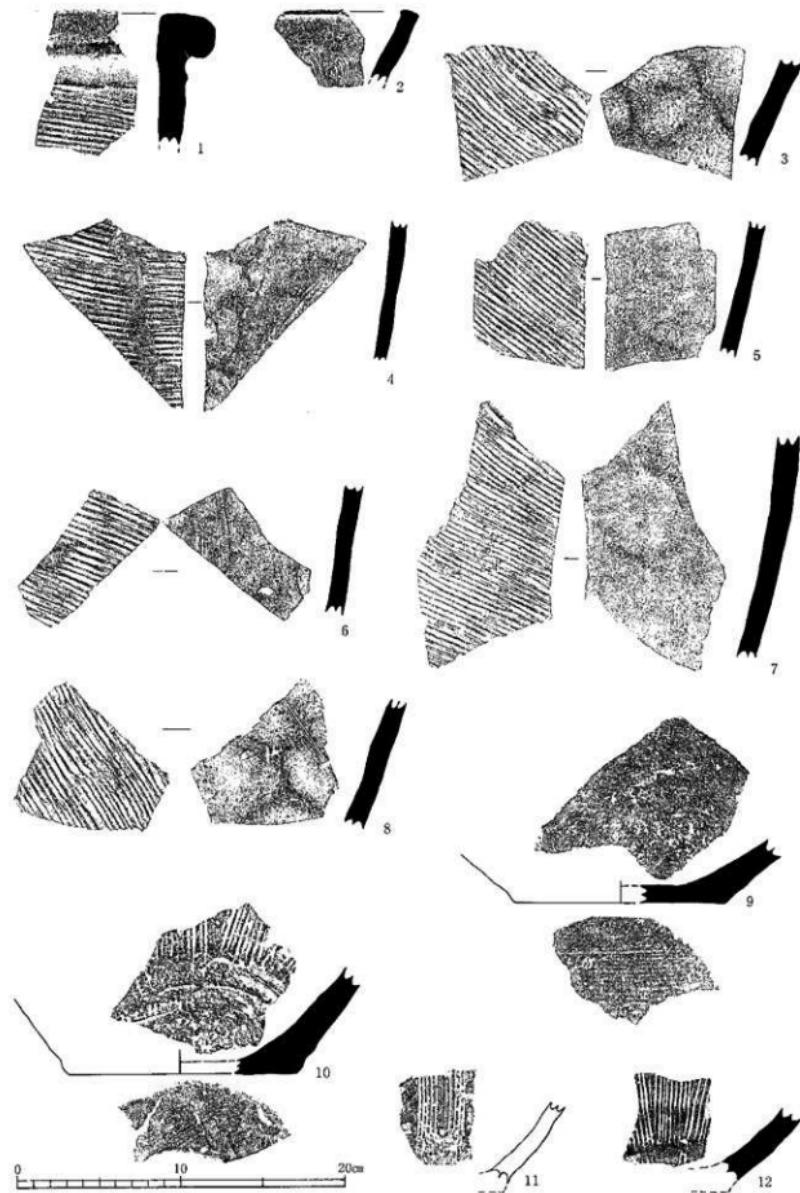
第20図 古代の土器 1~18 (1 : 4), 19~25 (1 : 3)



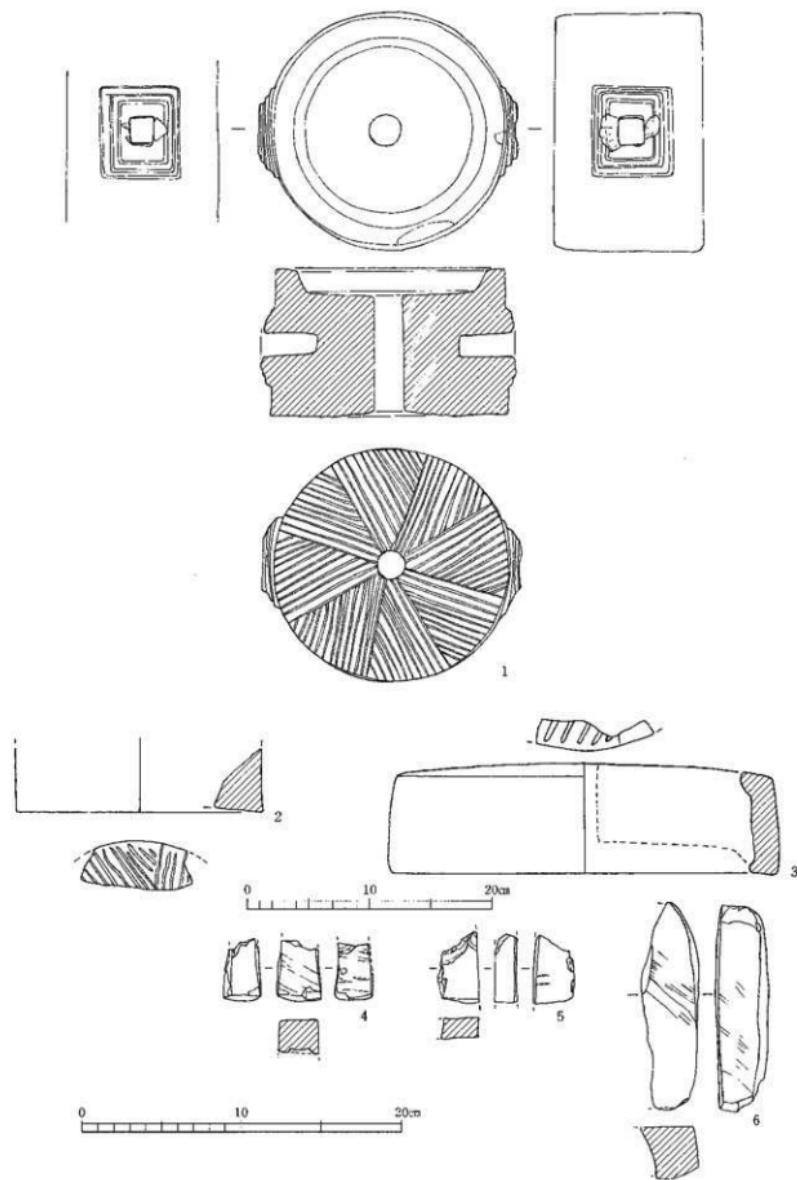
第21図 土器小皿 1~16. 陶器器 17~23. 風炉 24 (1:3)



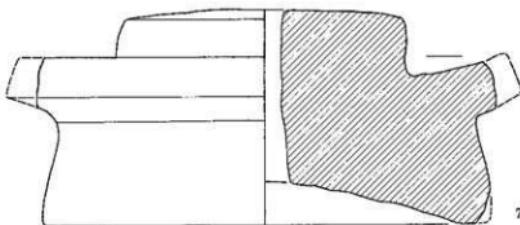
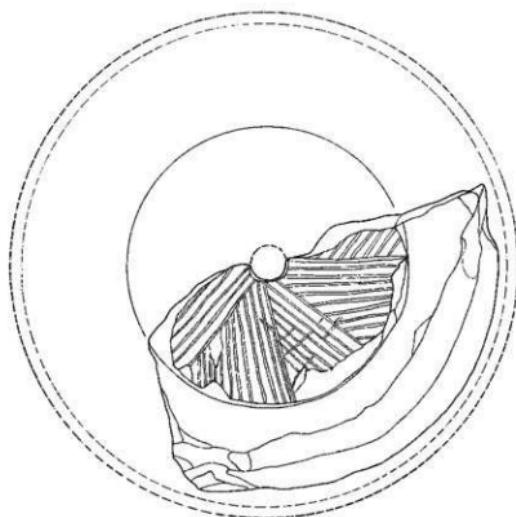
第22圖 内耳土鍋 (1 : 4)



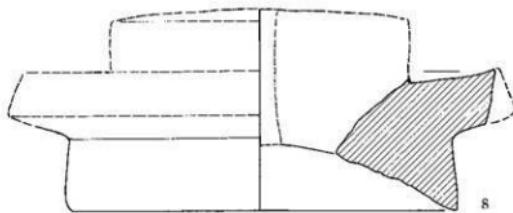
第23図 球洲焼・瓦質土器 11 (1 : 3)



第24図 石製品(I) 1~3 (1:4), 4~6 (1:3)



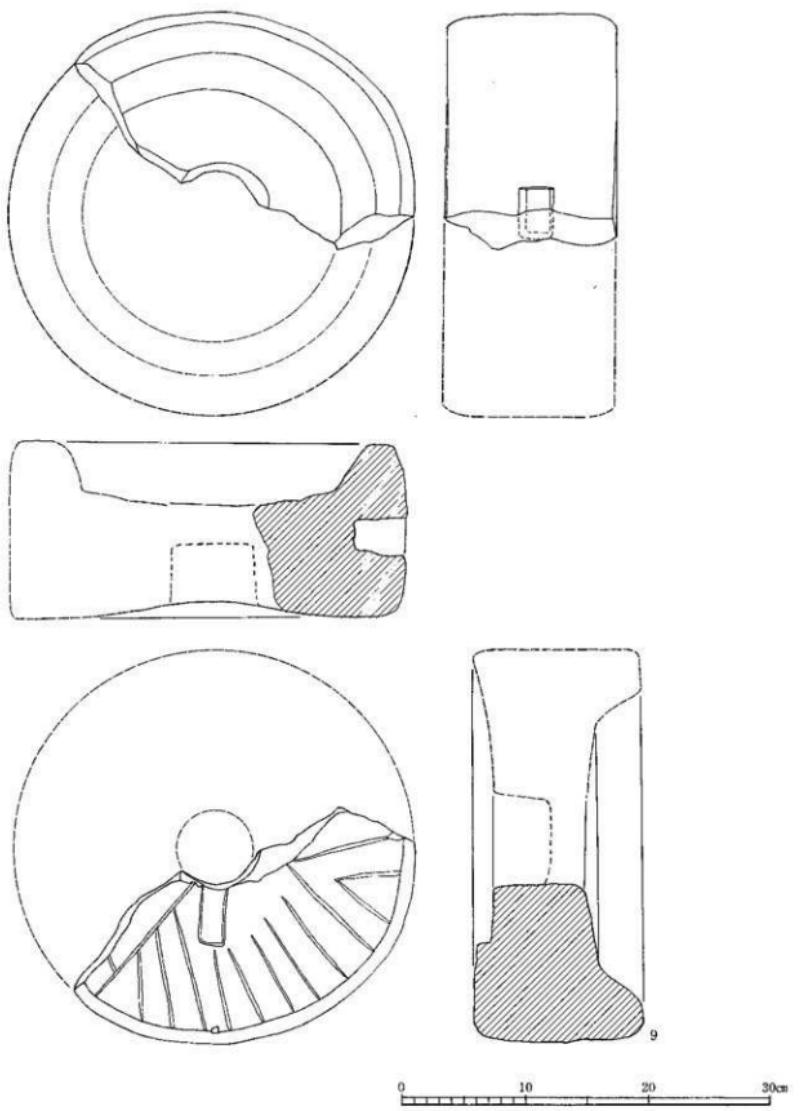
7



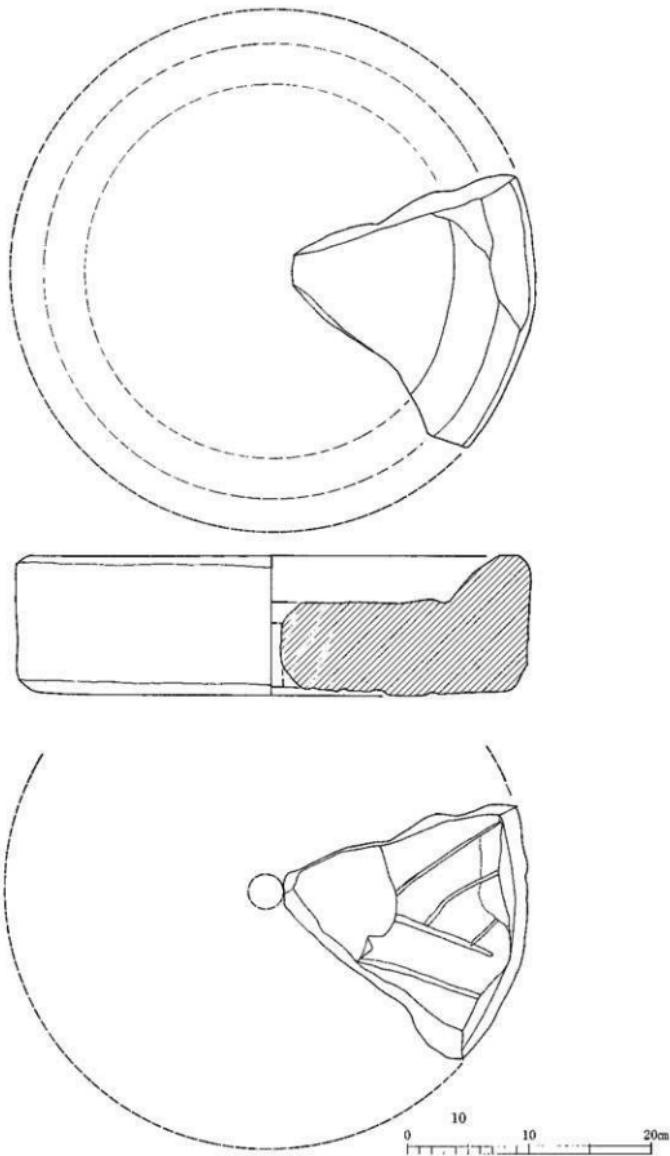
8

0 10 20cm

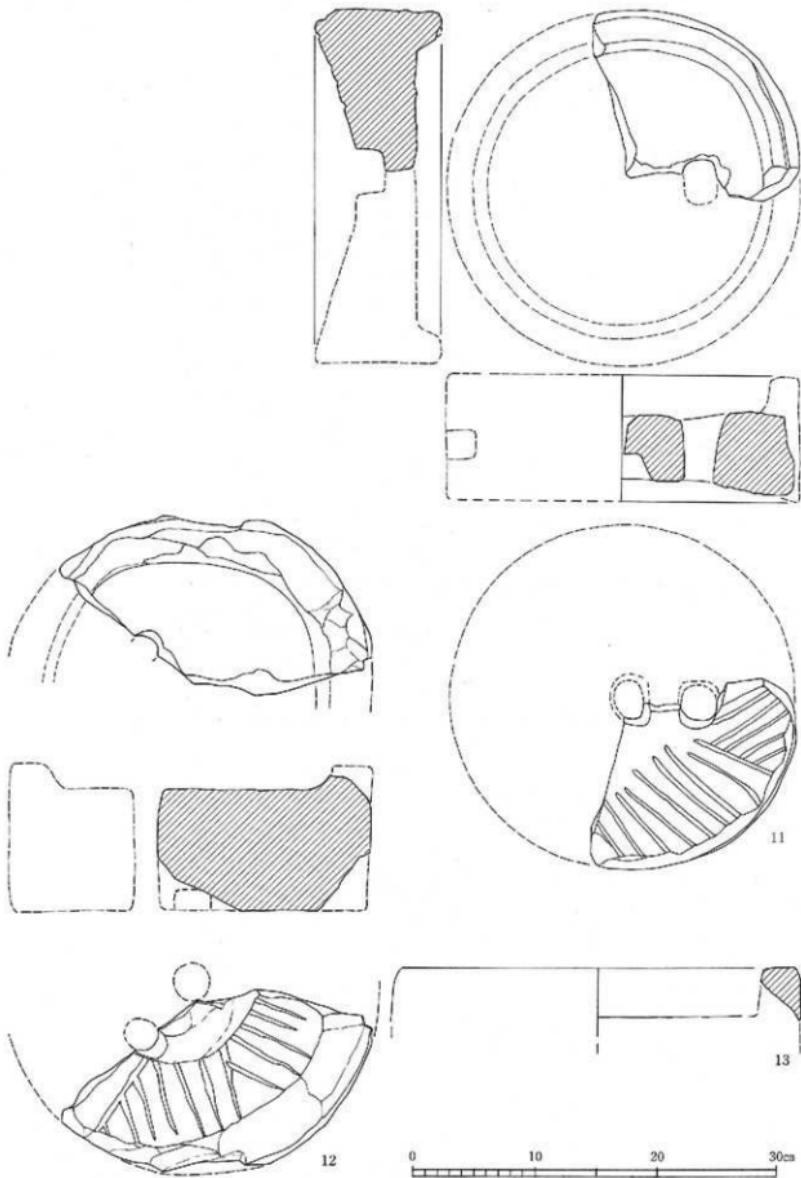
第25図 石製品(2) (1 : 4)



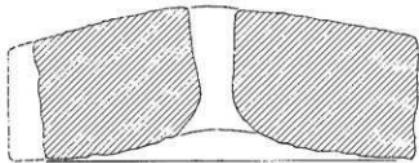
第26図 石製品(3) (1 : 4)



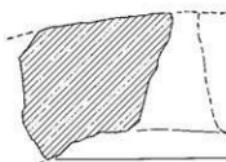
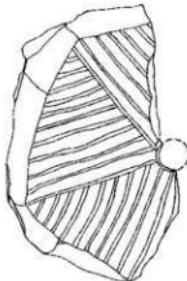
第27図 石製品(4) (1 : 4)



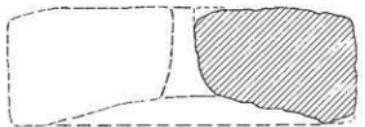
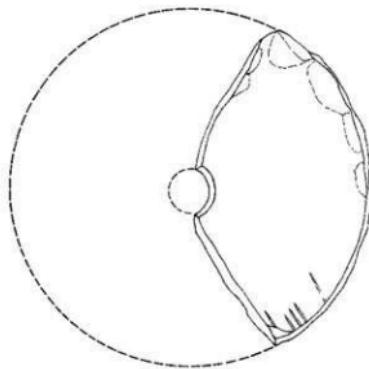
第28図 石製品(1 : 4)



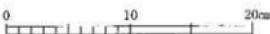
14



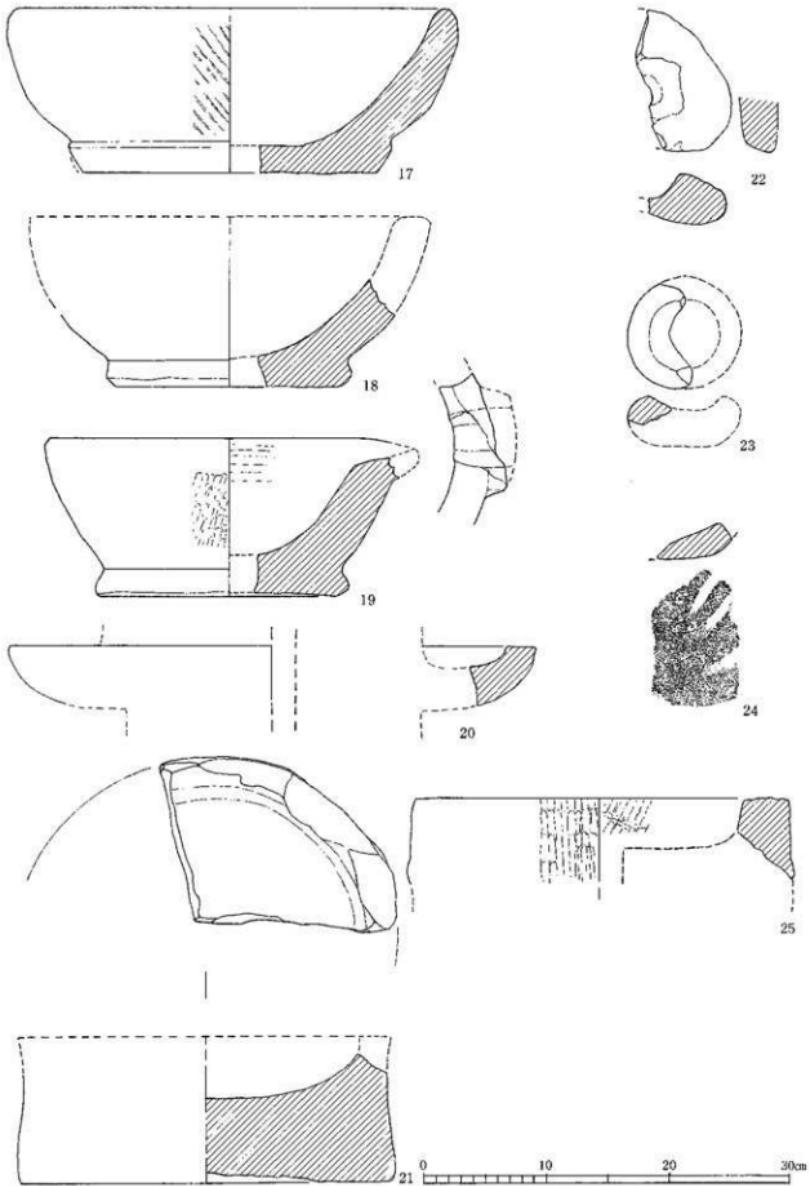
15



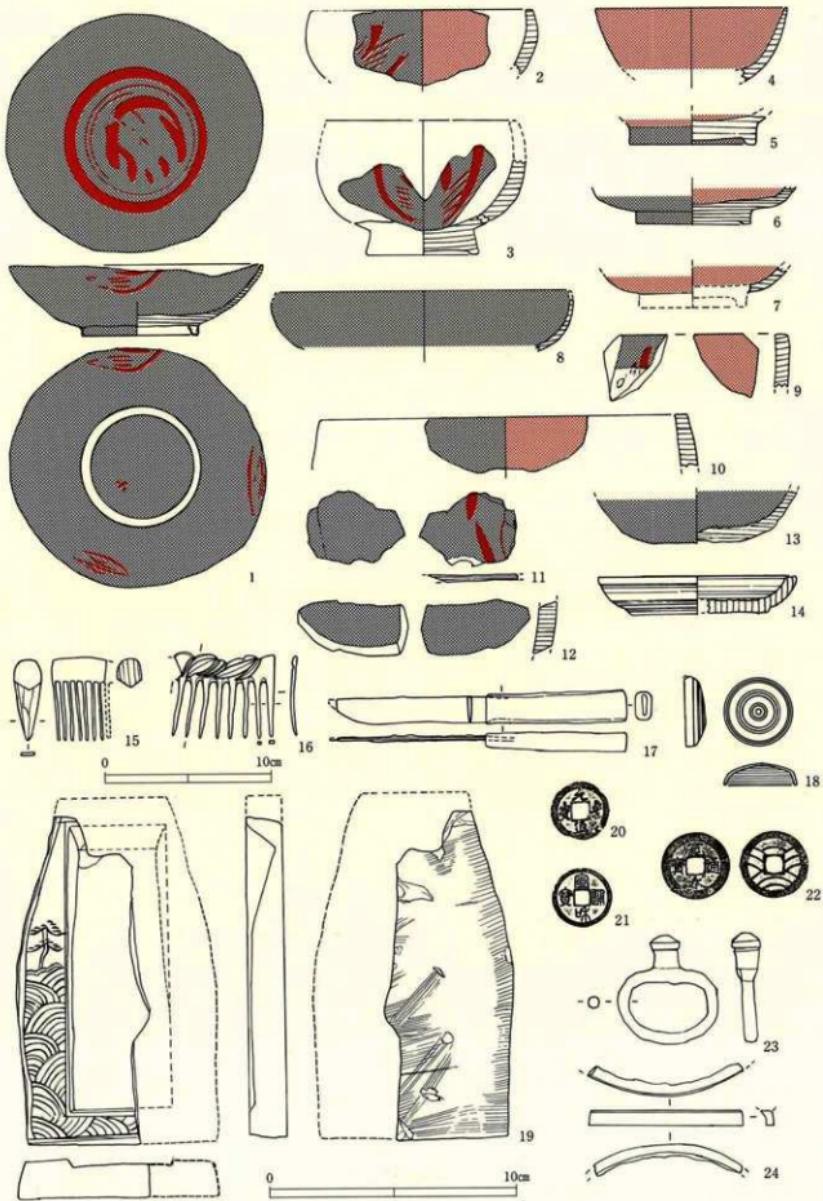
16



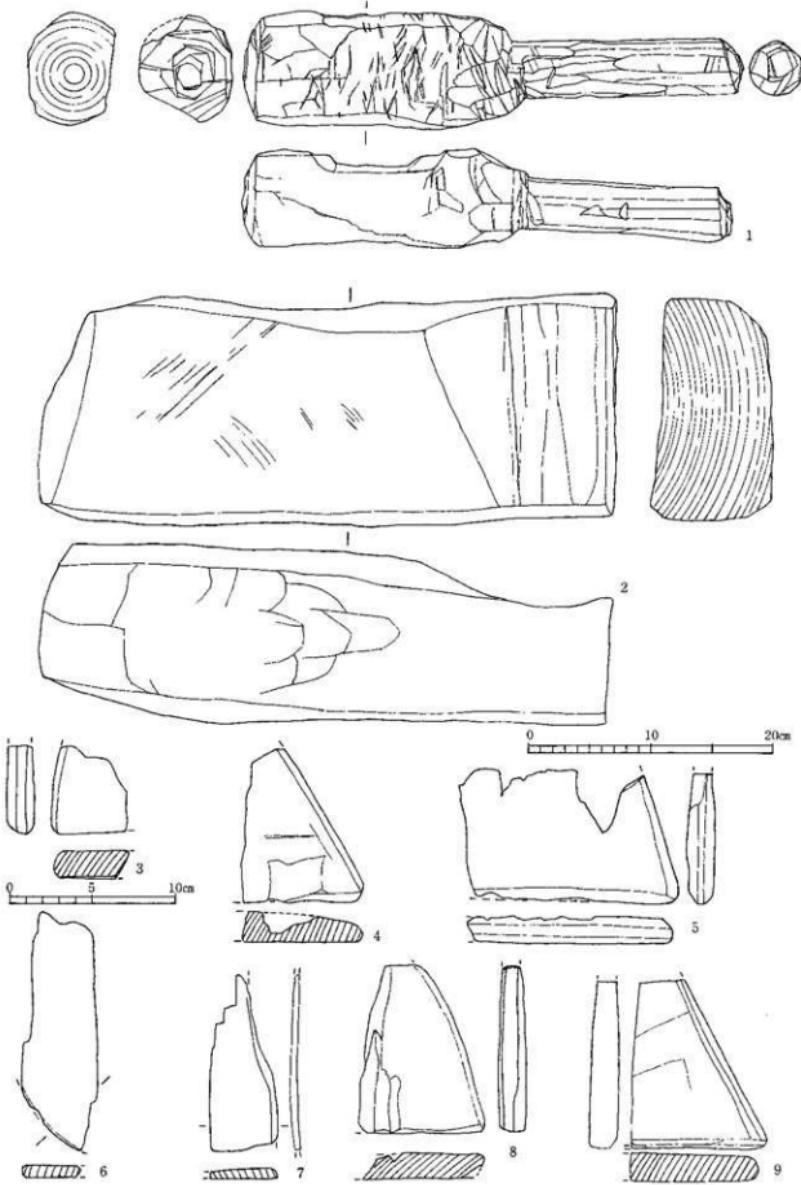
第29圖 石製品(4) (1 : 4)



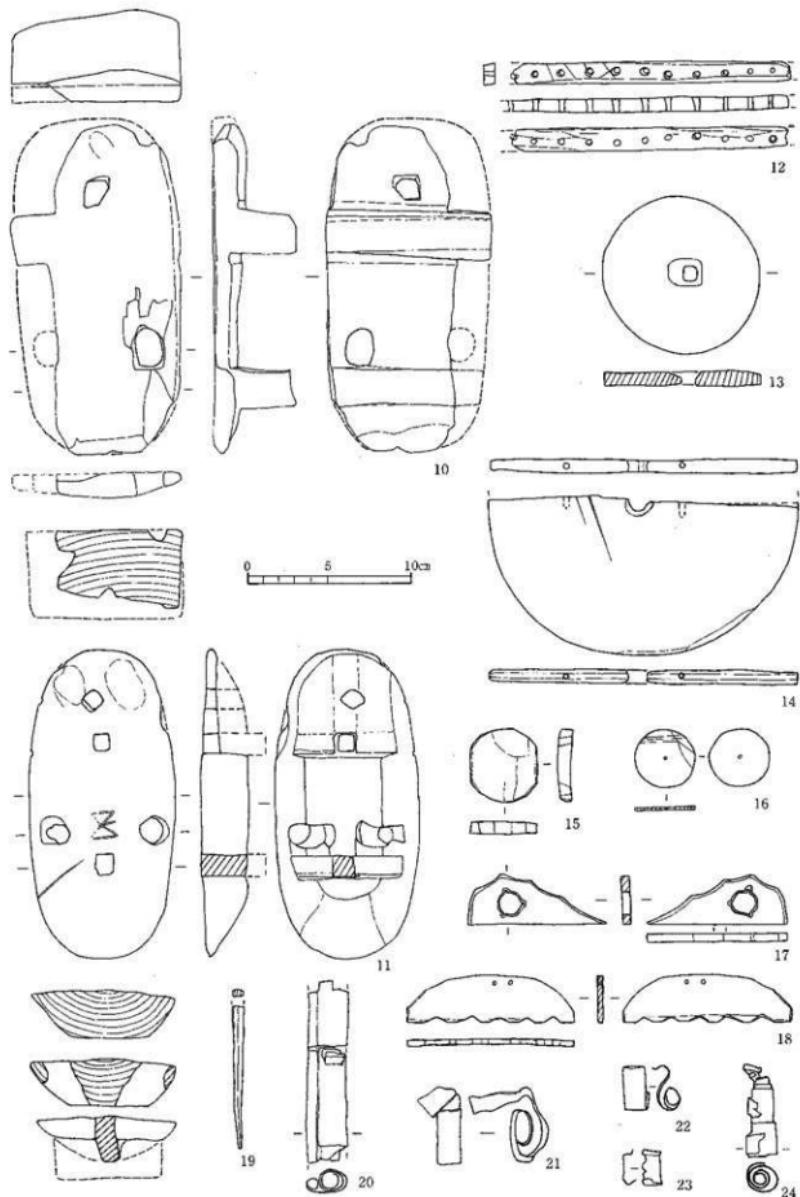
第30図 石製品(7) (1 : 4)



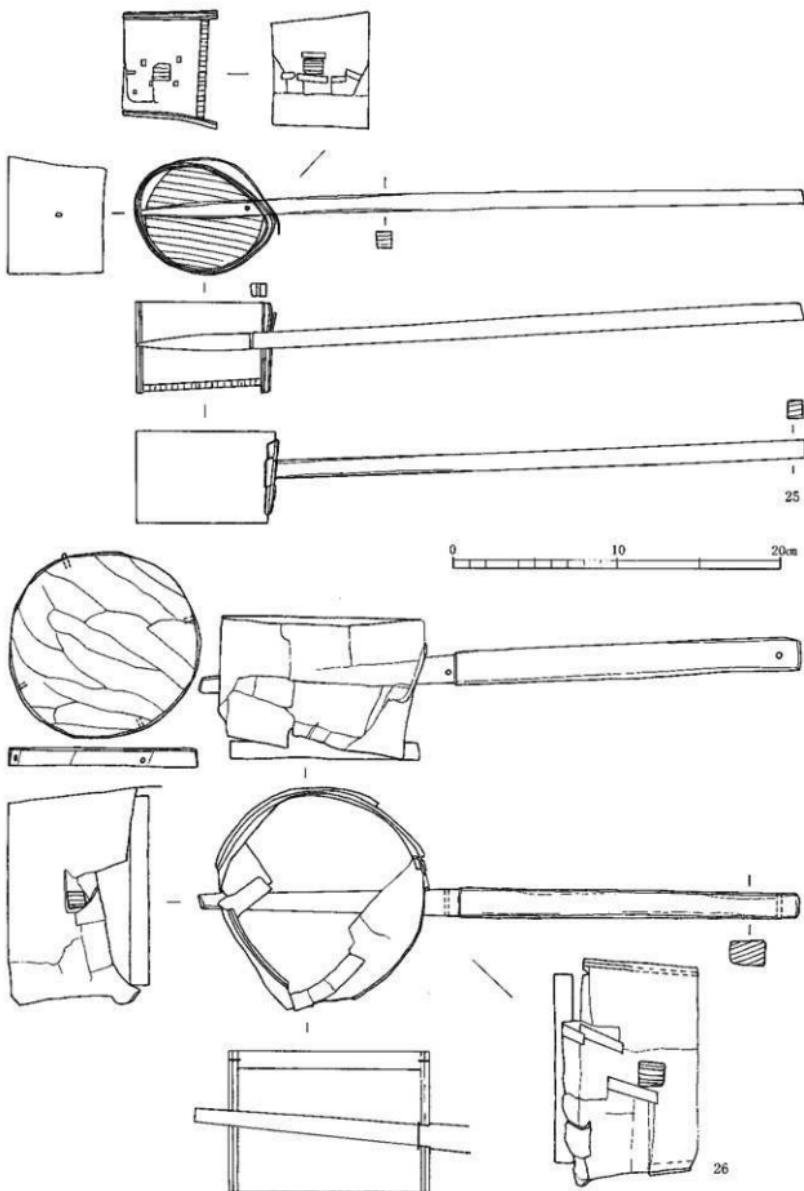
第31図 漆器・櫛・刀子・錢貨・金属製品・石硯 1~7 (1:3), 18~24 (1:2)



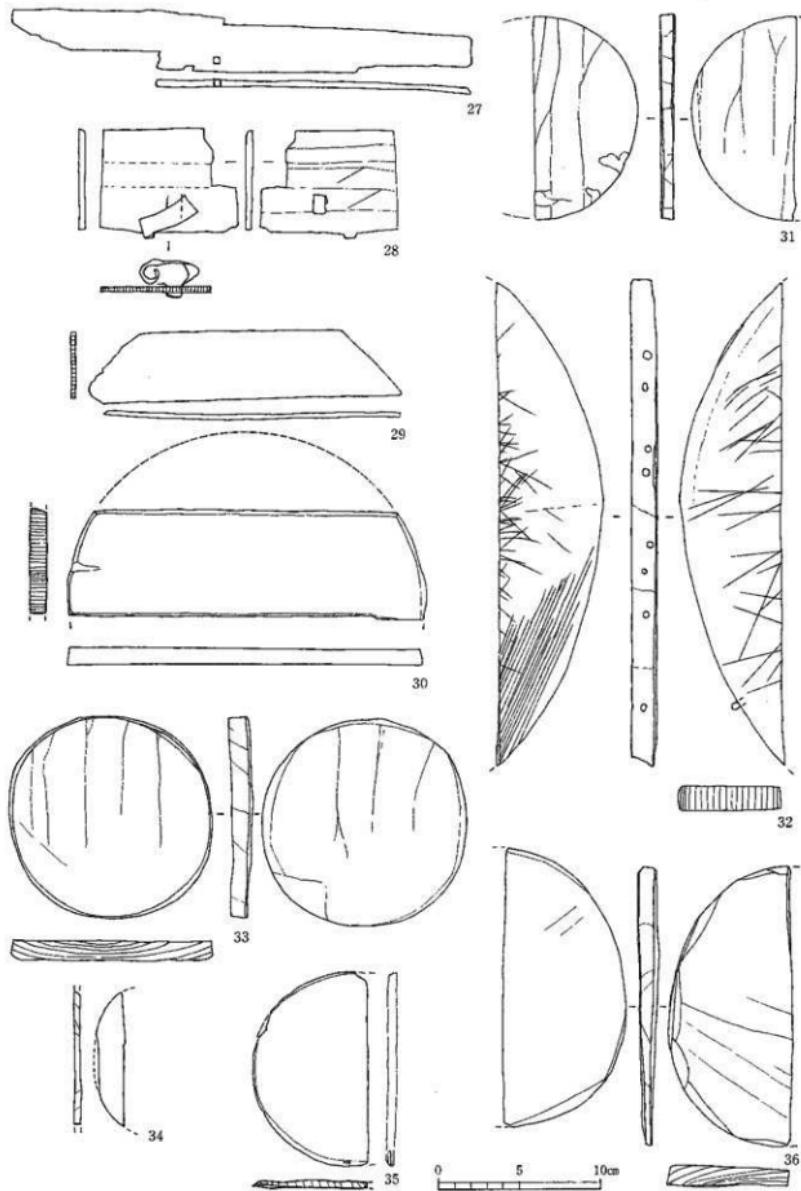
第32図 木製品(1) 1・2 (1:4), 3~9 (1:3)



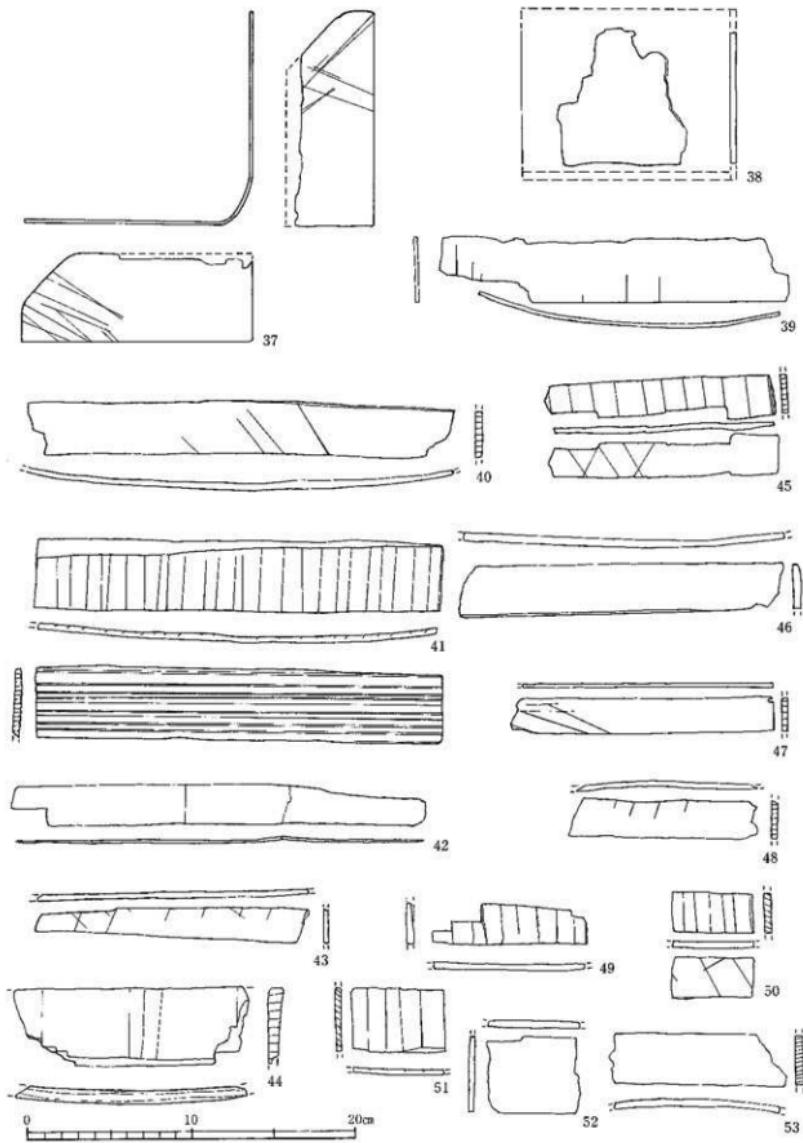
第33図 木製品(2) (1 : 3)



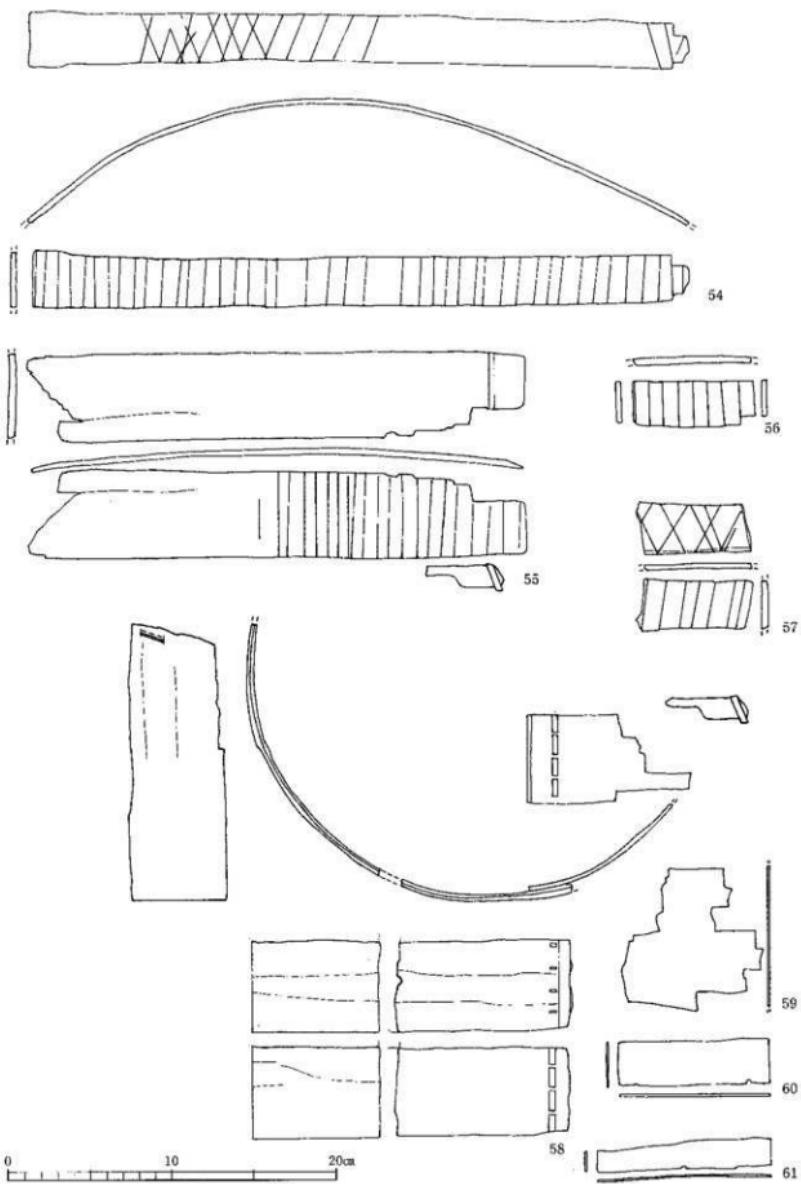
第34図 木製品(3) (1 : 3)



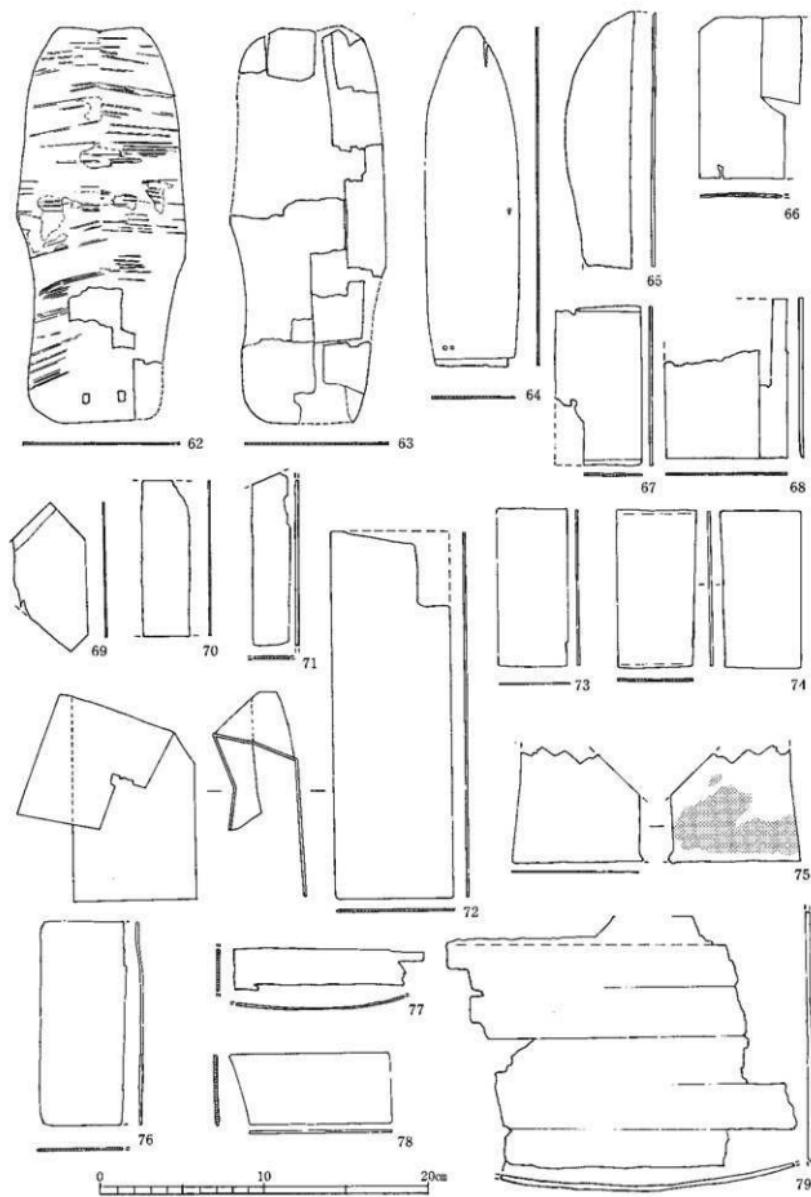
第35圖 木製品(4) (1 : 3)



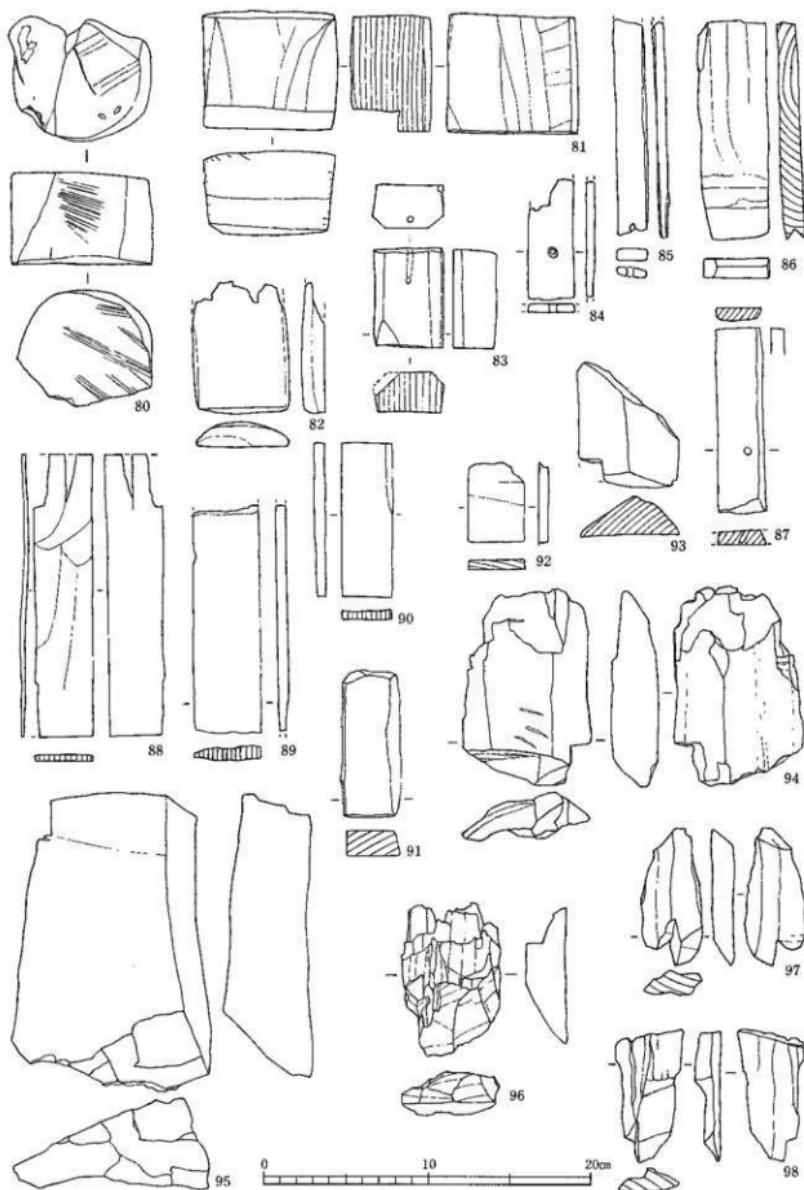
第36図 木製品(5) (1 : 3)



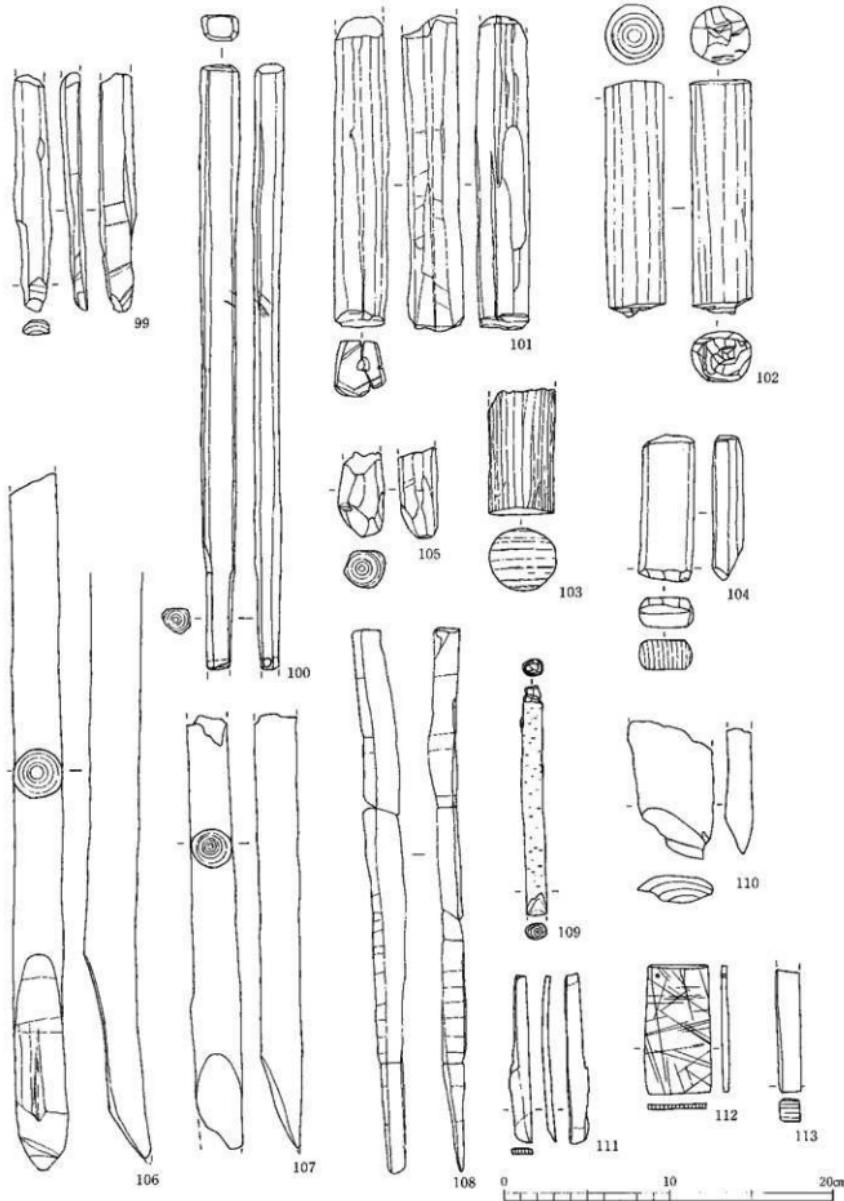
第37図 木製品⑥ (1 : 3)



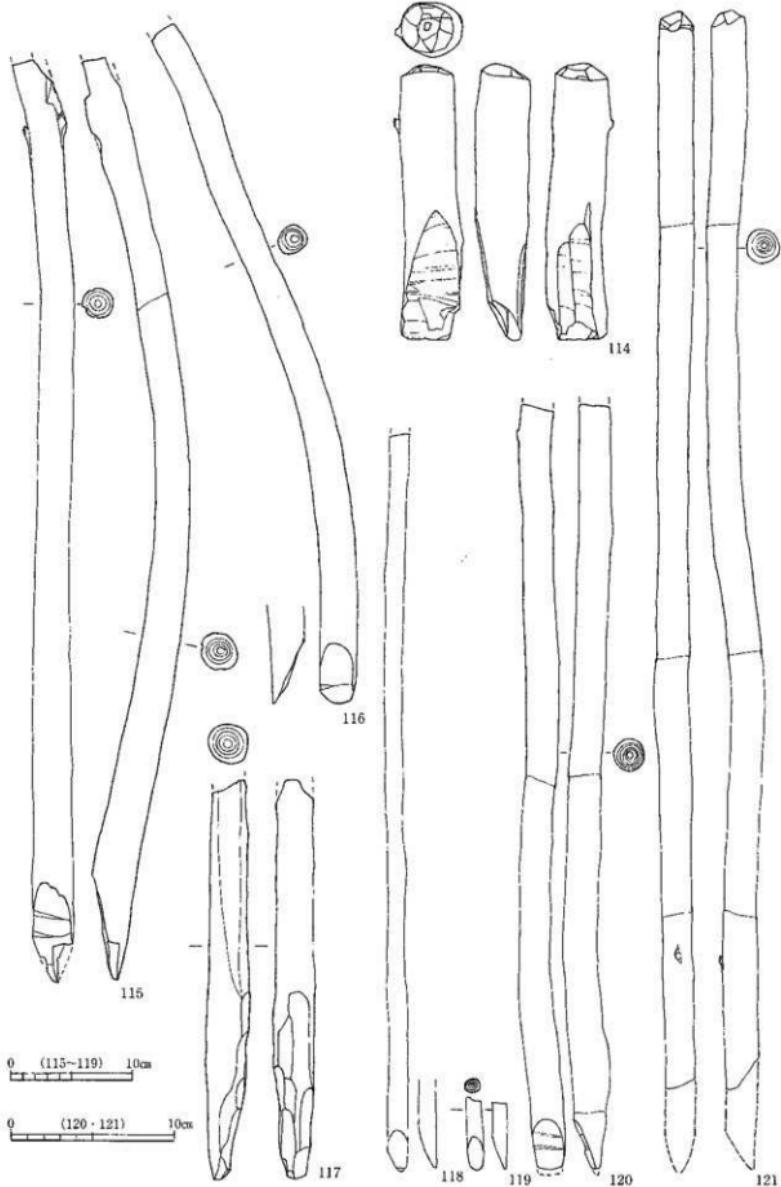
第38図 木製品(7) (1 : 3)



第39図 木製品(8) (1 : 3)



第40図 木製品(9) (1 : 3)



第41図 木製品 120・121 (1 : 3) 115~119 (1 : 4)

写真図版



全景
(西上空より)



全景
(第1次調査)
(南上空より)



西堤全景
(第1次調査)
(右、北側)



西堤全景
(第1次調査)
(南より)

西堀
右より SK02～SK09
(東より)



西堀全景
<第2次調査>
左側北



西堀全景
(左: 北より)
(右: 南より)





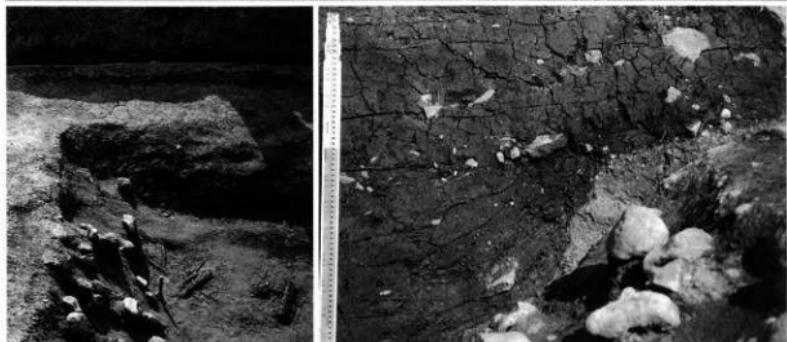
西堀
SK12、土橋 SX03
SK13・14
(北より)



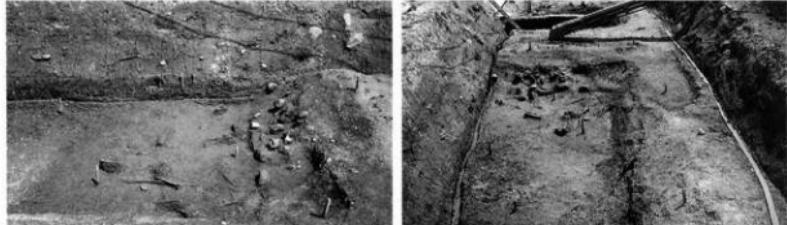
西堀・南堀
SK12～SK19
(南より)



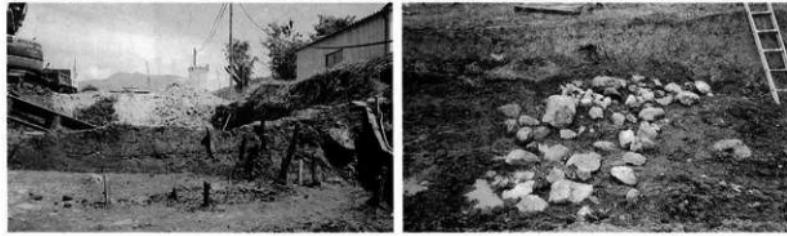
土橋 S X03
(西より)



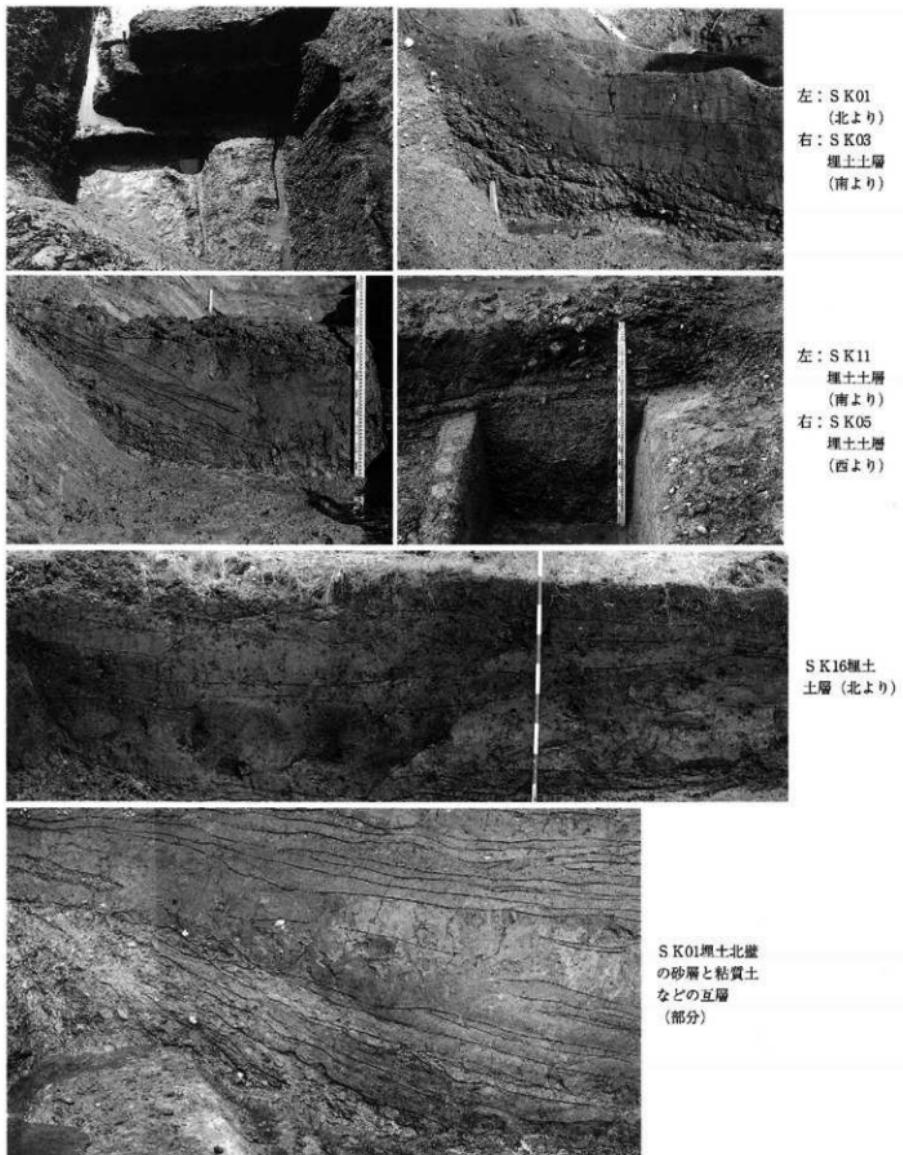
左：土橋北側斜面
右：同上土層



S K12遺物
出土状況



左：土橋上層の杭例
右：土橋上層の石列
S X07(西より)



左：西土器と調査前
の西堀（部分）
右：北土塁（北より）



左：甫上星残存部
(西より)
右：村史跡茅川氏
館跡入口部現状

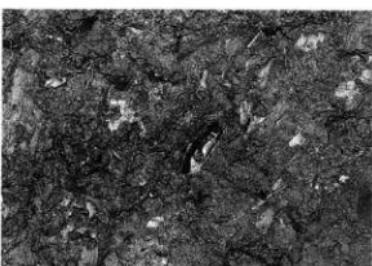


左：見せかけの主郭
西南域
右：鍛冶跡全景
(西より)

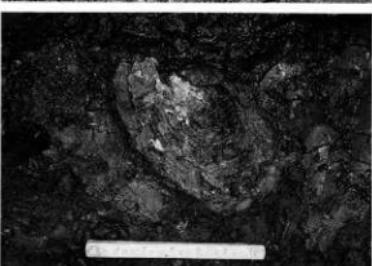


左：鍛冶炉跡と
「火の神」
出土状況
右：便所跡

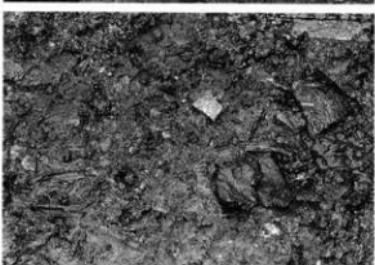




左：ケルミ大木
出土状態
(S K12・13)
右：昆虫出土状
態(S K03)



左：広葉樹葉な
ど出土状態
(S K03)
右：カラスガイ
出土状態
(S K01)



左：漆器・土師
器・小皿片
出土状態
(S K03)
右：把杓出土状
態(S K12)



左：櫛粹出土
状態
(S K11)
右：櫛出土状態
(S X05)

左：下歎出土状態
SK12
右：漆器出土状態
SK16



スダレ(?)出土
状態と部分(右)
SK12

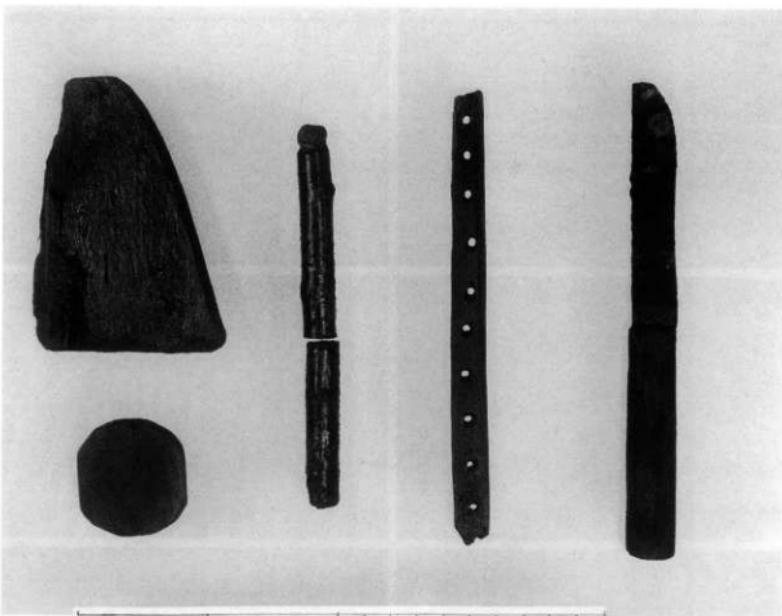


薄板製品
出土状態
(左部分)
SK13

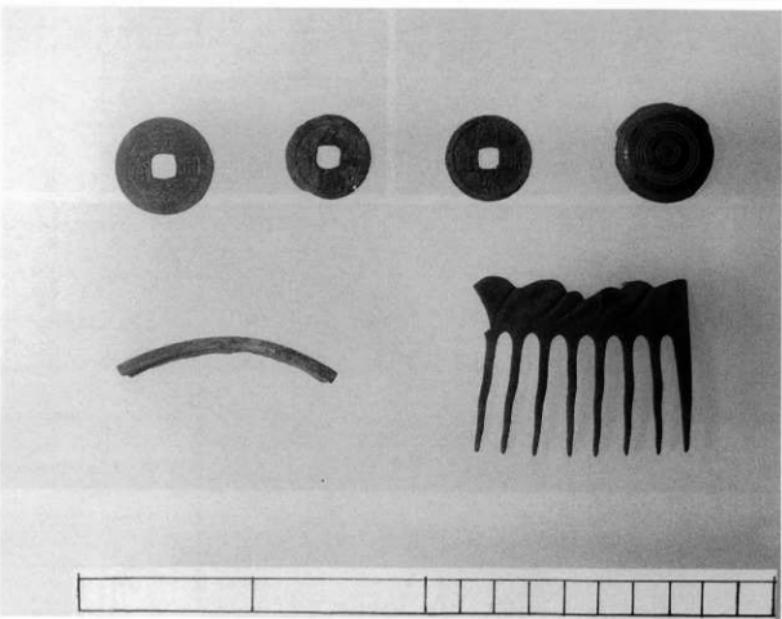


風炉、内耳土鍋
出土状態
SK13



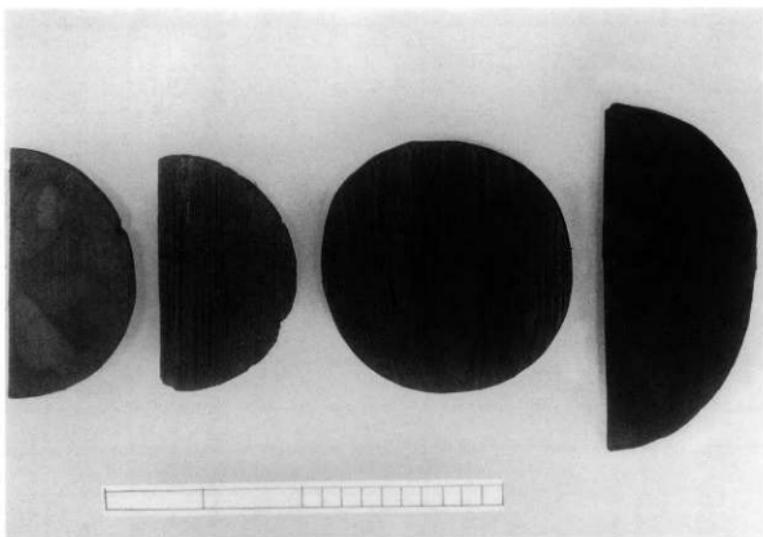


木製品・小板

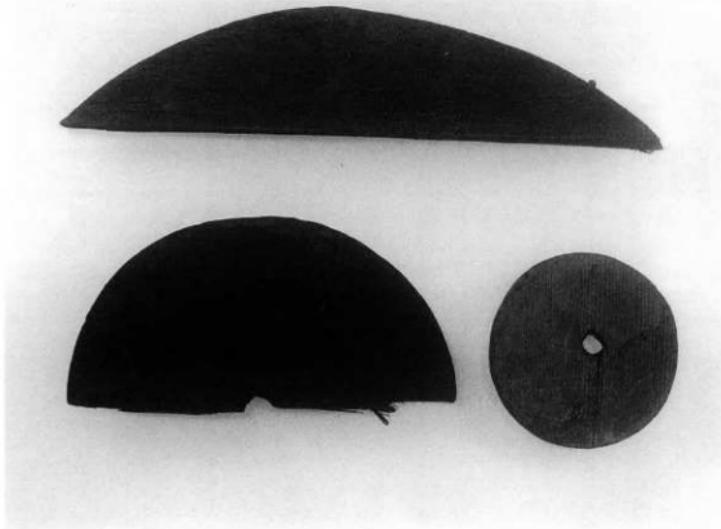


金属製品・物

木製品
(把杓・曲物
底板)



木製品
(曲物底板
鍋蓋(??))



報告書抄録

書名	芋川氏館跡発掘調査報告書							
副書名	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編著者	笠澤 浩							
編集機関	三水村教育委員会							
所在地	〒389-1201 長野県上水内郡三水村芋川324 TEL026-253-2501							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
芋川氏館跡	長野県上水内郡 三水村芋川	5851	22	36° 45' 51"	138° 15' 18"	20011019 ~2001201 20020625 ~20020824	3,000	緊急地方道路整備事業 (芋川バイパス) (長野県土木部施行)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
芋川氏館跡	館跡	縄文時代	—	縄文土器			遺物包含層	
		平安時代	—	土師器、須恵器、灰釉陶器			遺物包含層	
		中世	堀(摩子堀)	内耳土鍋、土師器小皿、風炉、珠洲焼、陶磁器、錢貨、金属製品(小柄他)、木製品(曲物、柄杓)、横柾、縱柾、下駄、櫛、漆器他)石製品(茶臼、粉挽臼、石鉢、砥石、石硯、凹石)			—	
		現代	鐵冶跡	鐵製品			—	—

本書10ページに掲載の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したもので。(承認番号 平15国復、第75号)

芋川氏館跡発掘調査報告書

発行日 平成15年3月31日

発行 三水村教育委員会
長野県上水内郡三水村芋川324

印刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野市柳原2133-5

